Written by miwashiba

Alicemare

アリスメア

【著／イラスト】
△○□×（みわしいば）

PHP

Teacher

Letty

Stella

Allen

Rick

Joshua

Chelsy

目次

Cover Illustration by △○□×

●編集協力・デザイン
株式会社サンプラント
編集協力 / 松本光生　デザイン / 東郷猛

●プロデュース
小野 くるみ（ＰＨＰ研究所）

序章

カエルはわるいやつだって、アリがおしえてくれた。
　ネコはわるいやつだって、カエルがおしえてくれた。
「いや、いちばんわるいのはウサギさ！」
　そう、ネコがおしえてくれた。
　だから、ぼくは──。

🦋

　……耳鳴りがする。その音は、何かを語りかける声のようにも聞こえる。
　ぐったりと椅子に寄りかかり、上を向く。天井はぼんやりと白く歪ゆがみはじめていた。現在の時刻を確かめようと時計のある場所に目をやるが、数字は黒く滲にじみ、虫のように蠢うごめいているだけで何も教えてくれそうには無かった。
　この景色を、僕はよく知っている。あの時の事は今でも忘れない。
「……必ず、終わらせてみせるから」
　誰に話しかけるわけでもなく、そう呟つぶやくと僕は目を閉じた。
　耳鳴りは収まる気配を見せない。その声は、段々と大きくなっていくようだった。

『××されたい？　なら、××せばいい』
『なにを××せばいいの？』
『そうだな、わるいやつを××せばいい。そうすれば、オマエも××してもらえるぜ』

　あの時ネコはそう言った。…いや、本当にネコが言ったのかはよく覚えていない。
　ただ、僕は誰かに××して貰いたかった。昔からその事ばかり考えている。その答えを得るために今、僕はこの施設で子供達の観察をしながら研究を続けている。
「頭が痛いな……」
　体を起こし、ベッドに向かおうとしたが、力が入らずにそのまま机に倒れこんでしまう。何度か挑戦してみたが、ひどくなる耳鳴りと頭痛がさらにその気を喪失させた。
「……まあいいか」
　そう呟いて、そのまま机にうつ伏せになる。

　意識が混濁していく中、僕は鳴り続ける金属音の中に彼女の声が聞こえた気がした。

第一章　おやすみ

1

　白く長い廊下が続く。一歩進む度に足音が長く響き渡っていた。
　同じ景色ばかりが続くと、言い知れぬ不安や心細さを感じる。先程までいた場所ではちらほらと従業員らしき姿を見かけたが、今は人の気配が全く感じられなかった。辺りの静けさがさらに不安を増幅させる。
　大きな森に隣接するこの街は、都会にまでには及ばないが土地は広く、人も多く賑にぎやかな所だ。質素で貧しい生活を送る家が多い森の中の住人達と比べ、皆、格段に豊かな生活を送っていた。
　僕は今、その街の中心に建つ大病院の廊下を歩いている。この病院で医者として働く友人から昨夜、「子供を病院で保護したので、お前に少し診てもらいたい」と電話で頼まれたからだった。
「よう！　久しぶりだな」
　溌はつ剌らつとした声と共に、後ろからぐいっと肩を引っ張られる。振り返ると、栗毛にそばかすをはり付けた人の良さそうな顔をした、白衣姿の男性がそこに立っていた。
「もしかしてと思って探しに来てみて良かった。……まーた迷子になっていたみたいだな？」
　僕のただ一人の友人、クリフは少し笑いを交えながら僕にそう言った。
「……道や場所を覚えるのはどうも苦手みたいだ。あそこで暮らし初めてから、街に来る事なんて食料の買出しの時くらいしかなくなったしさ」
「でも、お前は昔からこっちに住んでるんだろ？　だったら……ああ、いや……大学で知り合った当時から色々な所で迷ってたな……」
　眉み間けんに皺しわを寄せながら、クリフは肩を竦すくめる。
「……それにしても、よくあの施設を買い取って住もうと思ったよな。昔から変な噂ばっかりだっただろ？　あそこ。精神病患者を隔離していたとか、人体実験をやってたなんて話も聞いたぜ」
「ああ、あの時は君に世話になったな。そうだね、窓もないし、ひとつそれっぽい部屋もあったかな。まあ、人が寄ってこないから静かだし、気に入ってはいるよ」
「いや、あれは元はといえば俺が悪かったしな。……二階の左側の廊下にあった部屋だろ？　結局どうしたんだ？」
　少しためらうような仕草も見せながら、クリフは僕にそう聞いてくる。
「片付けるのもイヤになりそうだったから、そのままカギをかけて放置してる」
　僕がそう答えると、クリフはさらに頬を引きつらせたように見えた。小さくため息を吐くと、僕らの間に少しの沈黙が流れる。
「……そうだ、お前に言っていた子なんだけどさ。最近、この街で強盗殺人事件があっただろ？　そこに住んでいた夫婦の子供らしいんだ。他に兄弟もいないらしい」

クリフは俯うつむき気味にそう言った。
「……襲われた両親はどうなったんだ？」
　そう聞くと、クリフは無言で首を横に振る。僕がニュースで見かけた時には「夫婦は重体で、現在は病院で治療中」と報道されていたが、彼の表情から察するに結局どちらも助からなかったのだろう。
「とりあえず、あの子と話をしてみてくれないか。俺も話をしようとはしたんだが……あんまり上手くいかなくてさ」
　そう言いながら、僕が進んでいた方向とは反対側へと誘導する。何かを思い出し、すっかり憔しょう悴すいしきった顔になってしまったクリフを心配しつつ、僕も彼の後をついて歩き始めた。

🦋

　最近、この街では事件が頻発している。事件の内容は様々だが、一部の容疑者や犯人は共通して「何かにとり憑つかれたようだった…」と発言していて、新聞やニュースも最近は事件のあらましよりも、それらの発言についての報道ばかりが目立っている。
　病院が保護したという子供の所へ行くまでに、クリフが知っている限りの情報を教えてもらった。
　強盗殺人事件が起きたのは今から二日前。容疑者の男性が、図書館付近に広がる住宅街に建つ民家……ルウェリン家を訪れ、そこに住んでいた夫婦をナイフで襲いメッタ刺しにした、という内容だった。金品や何かを盗んだ形跡も無く、動機も不明。容疑者も何かにとり憑かれていただとか、声が聞こえただとか不可解な供述を繰り返すばかりだという。
　ルウェリン夫婦には子供がいたが、事件の発生時には外出をしていた。その子供が帰宅し、変わり果てた姿の両親を発見した頃には、容疑者の男性は既に逃亡をしていたらしい。
　その後、ルウェリン家の玄関の前で気を失っている子供を近所の人が発見。心配して駆けつけた際に室内の惨状に気づき警察へ通報、事件の発覚に至ったという。
「やっぱり、かなりショックだったんだろうな。自分の名前以外には、その事件の事も、家族の事も何も思い出せないって言っているんだ」
「記憶喪失か……」
　クリフはああ、とこちらを見て相あい槌づちをうつと、少しだけ歩くスピードを落とした。すっかり息が上がってしまった僕に気を遣ってくれたようだ。
　そんな友人の気遣いに自分の不甲斐なさを感じながらも、僕も歩を緩める。
「両親が亡くなった事はまだ伝えていないんだ、今言っても余計に混乱するだろうしさ。他に親戚もいないみたいだし……確か、お前は事件や事故で行き場を無くした子供達を保護して、カウンセリングをしているんだよな？」

僕は少しだけ間を置いて、ああ、と小さく頷うなずいた。
「こういうお願いは二度目だし、できたらでいいんだけどさ。あの子も、お前の所に連れて行ってもらえないかな。他に親戚とか引き取り手が見つかれば、また連絡するからさ」
クリフからそう言われ、自分の顎に手を当てて考え込む。
現在、施設では四人の子供を保護している。金銭面からも、一人増える分には特に問題もないのだが、研究の対象が増えるのは少し手間も増えるし、その子の状態次第で判断するしかないか……。

結論が出る前に、先程まで話に聞いていた子だろうか、少年が目の前に現れた。
その子は廊下に設置された空色のエントランスベンチに一人で行儀よく座っていた。
金髪に白いシャツ。俯いていて表情は確認できない。その下には黒色のズボン。サスペンダーと、ちらりと覗く青と白の縞模様の靴下が印象的な少年だった。
その少年の視線はこちらではなく、膝の上で開いた分厚い本のページに注がれていた。大きな瞳が右から左へ、という動作を繰り返している。読書に集中しているようだ。しばらくその様子を眺めていたが、こちらに気づく気配は全く無かった。
僕はその少年の正面へと回り込む。膝をつき目線を合わせると、ようやく少年はゆっくりと顔をこちらへと向けた。少年の顔は少しだけ青ざめていて、困惑したような表情をしてこちらを見つめている。先程までは俯いていてよく見えなかったが、その青く澄んだ瞳は少しだけ生気を失っているように見えた。
直感ではあるが、この子は……既に“発症寸前”の状態だった。
内心驚いているのを悟られないよう、一呼吸置く。その後、自分の胸に手を当て軽く微ほほ笑えむと、
「はじめまして」
そう、少年に挨拶をした。

2

水の流れる音がする。今の状態で、静寂の中にいるのは不安で耐え難かった。
……僕のお母さんやお父さんは、どんな顔をしていただろう。何歳だった？　怒りっぽかった？　どんな家に一緒に住んでいた？　……あの時、僕は何をしていた？
一つでも、何か小さな事でもいい。僕は必死に、何か思い出そうと記憶を辿たどっていたが、どこを探したって何も見つからなかった。得られるのはただ、空に浮かぶ雲を掴つかもうと躍やっ起きになっているような空しさや欠落感ばかりだった。

深呼吸をして、顔を上げ目の前にいる人物の顔を見てみる。低めの背丈に少しだけはねた金髪。青い色の目。右手をあげてみると、その人物も呼応するように左手をあげる。どうやら今、目の前の鏡に映っている人物は僕らしかった。

自分が生きているという事への安心感と、鏡の向こうの人物が自分だという確信が持てずに生じた不安に同時に襲われる。

「アレン・ルウェリン……」

自分の名前を呟いてみる。目覚めた時に、唯一ハッキリと覚えていた記憶。

気がついた時には、僕はこの病院のベッドの上にいた。その前の事を思い出そうとしたが、どうしても思い出せない。警察の人や、栗毛のお医者さんにも家の事やお母さん、お父さんの事について色々と聞かれたりしたが、答える事が出来たのはただ一つ、自分の名前だけだった。

溢れ続ける水を止める為に蛇口の栓を捻ひねる。キュッという音と共に水音が途切れる。僕は洗面所を出ると、元いた場所へと戻る事にした。

🦋

先程まで座っていたエントランスベンチへ戻る。栗毛のお医者さんに「君に会わせたい人物がいるから、ここで待っているように」と言われたのだが、一向に戻ってくる気配がしない。

座り続けるのも疲れたので、洗面所で少し時間を潰していたが、相変わらず自分の足音と呼吸の音以外に何も聞こえない廊下を前に、もう少し時間が掛かるのだろうと思った。

ぽすり、と少しだけ勢いをつけてベンチに座る。とても座り心地が良い。手で何度かその感触を楽しんだ後、ベンチの片隅に置いてあった本を手に取る。

赤い表紙に青い色のスピン。背表紙に自分の名前が記されている事と、所々くたびれた様子を見ると、以前から自分が繰り返し読んでいたものだろう事がわかった。

自分が本を好んで読んでいた事は、何となくだが覚えている。とにかく、文章を読んでいる間は自分の事を考えなくて済むので、一人の時にはいつも本を開いて読んでいた。

ページをめくると、短めの詩に可愛らしい挿絵が添えられている。何か思い出せる事もあるかもしれない、と僕は淡々とページを読み進めていった。

🦋

そのままどのくらい時間が経っただろうか。目の前に揺らぐ影が見えて、ハッと顔を上げる。長く本を読んで首が凝こり固まっていたからだろうか、実際の動作はとてもゆっくりとしたものになってしまっ

た。
　無造作なまま放置された長い黒髪を後ろに束ね、ガラス玉のような目でじっとこちらを見つめている。首から伸びる茶色く長いヒモの先には、黄金色に輝くロケットペンダントを下げていた。全く気がつかなかった。突然現れたそれに、僕は驚きを隠せなかった。
「はじめまして」
　そう、優しい声で挨拶をされて初めて目の前にいるのが生きた人間━大人の男性である事がわかった。よく見ると男の背後で、あの栗毛のお医者さんが心配そうにこちらを見ている。
　今の状況が掴めずに、頭の中がぐるぐるとする。そんな僕の様子に気づくと、その人も心配そうな表情を浮かべた。
「……大丈夫？　顔色が随分と悪いけれど」
「……大丈夫、です」
　僕は、相手にきちんと聞こえたのか不安になるほど小さな声でそう答えた。
「そうか……良かった」
　その人は、そう言って安心したように微笑んだ。僕はきちんと伝わった事にほっとし、同時に子供のような笑い方をする人だな、と思った。
「……記憶喪失だと、彼から聞いたんだ。大変だったね。ここに一人で居続けるのも、心苦しいだろう？　僕の住む施設には、君と似たような境遇の子達が居るんだ。良かったら、君も落ち着くまで僕達と一緒にその施設で生活をしないか？」
　思いがけない誘いに僕は驚いた。今はじめて会ったばかりの人に、一緒に住もうと言われている。安易に「はい」と言ってしまって良いものかと、返答に窮きゅうしてしまう。
「ずっとここに居ても、面白いもんなんてあんまりないからさ。俺なんかと話をするよりは、こいつの所で同じ年頃の子達と話をするほうがいいんじゃないかって思って頼んだんだ。見た目はこんなだが、信頼できるやつだぜ」
　困惑している僕の様子を見て、助け舟を出すように栗毛のお医者さんがそう言った。僕の目の前にいる人は、失礼なやつだな、と言うようにお医者さんの方を見ていたが、僕の視線に気づくと、苦笑して肩を竦めた。

確かに、ここにいてもベッドの上で本を読むくらいしか、出来る事はない。知らない大人達と話をするよりは、知らない子供達と話をする方が大分気も楽になると思う。
　若干不安も残るが、僕はその人の施設へ行く事に決めた。そう伝えると、その人も少しだけ微笑んだような気がした。

車は街の中心部を過ぎ、今は森の中を走っている。時折、パキパキと木の枝が折れる音と共に車内がゴトンと小さく揺れる。スピードは随分とゆっくりだった。

　それから数十分程走り続け、やがて現れた古ぼけた建物の前で停まった。

「着いたよ、時間が掛かってしまってごめんね。あまり運転、しないからさ……」

　その人は申し訳なさそうに、後ろ頭を掻きながら僕の方を向いてそう謝罪した。何故か額に薄っすらと汗を滲ませている。

　僕は別に大丈夫、と急いで頭を横に振ると、シートベルトを外して外に出る。もう夏も終わろうかという季節のはずだが、まだ暑さは一向に衰えおとろえる気配が無い。じんわりとした強い日差しから逃れるように、僕は薄茶色の壁に黒い屋根の施設の中へと、その人と一緒に入っていった。

　施設の中はその古ぼけた外観に反して、とてもキレイで整理されていた。明るい色の床に、白い壁と高い天井。廊下もかなり広く感じられた。

　施設の中を見渡していると、こっちだよ、と声を掛けられ、手招きをされる。そのまま、案内された方へと向かう。

「ここは、僕の部屋なんだ。特別な時以外には、大体ここにいるからさ」

　そう言って、その人は目の前の扉を開けると、部屋の中へと僕を誘導する。

　入ってすぐ、大量の本や紙の束が目に入った。室内の隅に置かれた机の上には、それらが大雑把に積み重ねられ、放置されている。

　その人は、机の近くに置かれた椅子を引っ張ってこちらへ持ってくる。「どうぞ」と言われて腰を下ろすと、その椅子はギイ、と鈍い音をたてた。

「大丈夫だよ、確かに年代ものだけどいきなり脚が飛んだりはしないさ」

　……不安に思ったのが顔に出ていたのだろうか。その人は苦笑しながら僕にそう言った。

「ああ、君の名前を聞いていなかった……」

　やはり年季の入った別の椅子に腰掛けながら、その人が思い出したように呟く。

「えっと、アレン。……アレン・ルウェリンです」

　自分自身でも再確認をするように、一言ずつ噛み締めながら答える。

「そうか、アレン君だね。これからこの施設で暮らす為に、少しだけ約束事があるんだ。まあ、そんなに難しいものでも厳しいものでもない。……大丈夫かな？」

　僕はこくりと頷く。

「ありがとう。まず一つ。食事の時間や勉強、就寝時間がこの施設では決まっている。勿論、それ以外は自由時間になる。自由に行動をして良いのは、この施設の外は施設付近の庭まで、施設内は二階に図書室があるから、自由時間には好きなように利用してもらって構わない」
「図書室……」
　なら、好きな時に本が読めるのか。どのくらいの数の本があるのだろう。
「図書室の本を自室に持っていってもいいけれど、就寝時間にはちゃんと寝るんだよ」
　その人は微笑む。……釘を刺されてしまった。
「本はいいんだけれど、物置にある物とか人の部屋から勝手に物を持ち出すのはダメだよ。あとは、物を壊さない事。壊してしまった場合は、僕に言う事」
　僕は相槌を打ちながら話を聞いていく。
「カギのかかった部屋は、無理に入ろうとしない事。人を叩いたりしない事。他に困った事や欲しいものがあれば、僕に教えてくれ。……以上だ。出来そうかい？」
　僕は、はい、と小さく答えた。
「よかった。一応、さっき言った事をまとめたメモも渡しておくから、自分の部屋の壁に貼っておいてくれるかな」
　そう言って、その人が差し出した小さなメモ用紙には、先程言った事が、大きな字で丁寧にまとめられていた。約束事の最後の一文の下には、綿毛のような、まんじゅうのような物体に耳を無理矢理生はやしたかのような不思議な生き物が描かれている。
「あはは、ウサギのつもりなんだけどな。……難しいな、絵は」
　そう聞いて、もう一度その謎の物体を凝視する。確かに、そう言われればウサギのような気がしなくも無い。じっと見つめていたら、これが本来のウサギの姿なのではないかとさえ思えてきた。
　……ここ数日の出来事で、知らず知らずのうちに疲れが溜まっているのかもしれない。
「ここでの生活の話は、大体これ位だね。わからない事があれば、いつでも聞いてくれて良いからさ。あと、それからこれ」
　ウサギのような物体と謎の格闘をしていた僕を遮さえぎるように、その人は空色の小さな手帳を差し出した。
「君専用の手帳だよ。ここにいる子達には、皆に配ってるんだ。好きな時でいい。嫌な事でも、楽しい事でも、何か感じたら、その手帳に書いて僕に渡して欲しいんだ」
「……それって、文じゃなくてもいいの？」
　僕の質問にその人は、はは、と軽く笑う。
「ああ、絵だけ描いて出す子もいるから、それでも構わないよ。なんでもいいんだ」
「そうなんだ……」
　貰ったばかりの手帳をパラパラとめくってみる。白い紙に一枚一

枚、グレーの横線が規則正しく並んでいた。
「……えっと、聞きたい事が……あ、そうだ、あなたの名前は……？」
　そう聞くと、何故かその人は少しだけ困ったような顔をした。
「……ああ、ごめんね、自己紹介をしてなかったな。先生、と呼んでくれればいいよ」
　……それは名前なのだろうか。「先生」も名前と一緒に呼ぶものではないだろうかとも思ったが、ここにいる大人は先生一人のようだったし、きっと問題ないのだろう。
「聞きたい事っていうのは、僕の名前のことだったのかい？」
「あ、えっと……違います」
　僕は、少しだけ開かれた扉の方に視線を向ける。
「先生、あそこ……さっきから部屋の外で誰かが、こっちを覗いているんですけど」

🦋

　僕の視線を追った先生は、何かを理解したようにゆっくりと腰を上げると、そのまま扉に近づき勢いよく開ける。そこにいたのは四人の子供達だった。全員、僕と同じくらいの年齢に見える。
　ヤベッと声を漏らした一人の少年がその場から逃げようとしたが、あっけなく先生に捕まってしまう。少年と一緒にいた残りの三人は、皆少女だった。
「話し終わるまでは部屋に居るようにって、僕は言ったんだけどな」
　先生は呆れ気味にため息を吐いた。
「見に来るなって言われたら、見に行きたくなっちゃうじゃん。なあ？」
　銀髪の少年が、背伸びをしながらそう他の子供達に問いかける。
「うん！　だって、気になっちゃったんだもん。新しい子がくるって聞いたら、わくわくしちゃうじゃない！」
　赤紫色のメッシュが入った白髪が印象的な少女がその問いに答える。
　その奥で、茶髪の少女が戸惑いながらこちらを見つめていた。こちらも見つめ返すと、体をびくっと震わせて隣にいた黒髪の少女の後ろへと隠れてしまう。黒髪の少女はその子に代わるように、無言でこちらを見つめ返した。
　……何か気に障さわるような事でもしてしまっただろうか。早くも先行きが不安になる。
　先生がパン、と手を叩き僕たちの注目を集めた。
「仕方が無い。もうすぐ夕食の時間だし、食事が出来るまで君達はここでアレン君に色々と教えてあげてはくれないか」
「えー、それはめんどうくさいな」
　銀髪の少年はそう言って、不満げに口を尖とがらせる。
「……君達の方がここでは先輩だからね。皆、アレン君のお兄さんや

お姉さんだ。だから、アレン君の事は任せたよ」
　先生は微笑んで少年にそう諭さとす。少年の方も、満更ではなさそうな顔をしてニヤけていた。……扱いやすそうな子だな。
　先生は「食事が出来たらまた呼びに来るから」と言って部屋から出て行った。
　残された僕と、子供達は部屋の真ん中で床にちょこんと座った。四人は囲むようにして僕の顔をしげしげと見つめたり、服の袖を引っ張ってみたりしている。僕は無抵抗でその好奇心を受け入れていた。
「そうだ、自己紹介をしてなかったな。えっと、お前はアレンだったよな？」
　突然の問いかけに少しだけ驚いて、声のした方へと振り向く。先程から一番目立っている、あの少年だった。銀色のチェーンがついた黒いニット帽。少しはねた銀髪の下からのぞく、何かを企んでいそうなオリーブ色の目。暗い青緑色に銀色のラインが映える服に身を包んでいた。
「うん、そうだよ。僕は、アレン」
「そうか！　僕はマーカス。よろしくな、アレン！」
「……ち、ちがうよ。えっとね、アレン君。この子は、ジョシュア君だよ」
　そのまま握手をしようとした少年を遮ったのは、先程まで黒髪の少女の後ろに隠れていた茶髪の少女だった。その髪は、真っ赤な丸い髪飾りで下の方でふたつに結ばれている。その下には赤いポンチョとふんわりとしたバルーンスカート。白いフリルのついたエプロン。おとぎ話の赤ずきんを彷ほう彿ふつとさせる格好をしていた。
「なんだよチェルシー、ネタばらしが早すぎるぞ。お前はちょっと、マジメすぎるんだよ。えーっと、そうだ。リラックスしなきゃな！」
　ちぇっ、と舌打ちをすると、ジョシュアはチェルシーと呼んだ少女の耳を軽くつまんだ。くすぐったかったのか、きゃっと小さく悲鳴をあげると、頬を赤らめてまた黒髪の少女の後ろへと移動してしまう。
「あっ、まだアレンに自己紹介してないだろ。えっと、さっきの赤いのがチェルシーな。すっごく怖がりでさ。すぐああやって誰かの後ろに隠れちゃうんだ」
　怖がりとは関係なく、今のはどうみてもジョシュア君のせいだと思うんだけどな……。
　チェルシーへ視線を向けて様子を伺うかがってみる。頬を未だほんのりと赤くしたまま、俯いている。大丈夫かな、と心配すると同時に誰かに両手を勢いよく引っ張られた。
「えっとね、アレン！　私は、アレン！　あっ、違う！　えっと、アレン！」
「おっ……ま、待って、ちょっと、おっ、落ち着いて」
　僕の言葉も跳ね返すように、少女はそのまま腕を上下に大きく振りはじめる。
　瞳より少し暗めの赤紫色のメッシュが入った、ゆるいウェーブのかかった白髪。その上には紫色の造花がついた黒い髪飾りがちょこんと

のっている。先程から勢いよく振られる少女の両腕からヒラヒラと舞っているのは、多分リボンだろう。揺れる視界の隅でチラチラとしているチェック柄のスカートがやけに印象的だった。
「あっごめんね！　嬉しくって、ついはしゃいじゃった。えっとね……私は、レティっていうの！　あとね、リックって子がいるんだけど、今はおやすみしていて会えないんだ。おはようをしたら、ちゃんとアレンにあいさつするんだよって言っておくからね！」
　早口で捲まくし立てると、レティは腕の動きをピタリと止めた。呼吸を乱している様子は微み塵じんも伺えないレティに対し、僕ははげしい運動をした後のように息が上がってしまっていた。腕がじんじんと痺しびれてくる。……僕は、こんなにも体力が無かったのか。
　すっかり意気消沈してしまった僕を、レティは大丈夫？　と心配をして頭を優しくなでてくれる。違う、そこじゃない。そんな言葉も声にならないほどに息は絶え絶えだった。
　僕は誰かに助けを求めるように周りを見渡す。その時、一人の少女と目があった。透き通るような黒い長髪。赤ワイン色のリボンがついた白のヘッドドレス。不思議な形状の黒いワンピース。何よりも、赤く鋭い眼光が僕には少しだけ恐ろしく感じた。
　そうだ、まだあの子の名前を聞いていなかったな。そう思い彼女に話しかけようと思ったが、少しだけ躊た躇めらう。そういえば、先程から彼女は一言も声を発していない。それに、こちらを睨にらんでいるようにも見える。……もしかして、嫌われているのだろうか。
　そんな僕を見かねてか、ジョシュアは僕の背中を軽くポンと叩く。
「えっと、あいつはさ、あんまお喋りじゃないんだ。特に、はじめましての時なんかは僕も一言も喋ってもらえなかったしさ。だから大丈夫だって！　なっ！」
　どうやら、慰なぐさめてくれているようだった。一方で、少女の凍りついたような表情は一ミリも変わりそうにない。感情を表す事も得意ではないのだろうか。仕方無く、ジョシュアに向かって尋たずねてみる。
「……名前はなんていうの？」
「えっと、ス……」
「……ステラよ」
　驚いて、声のした方へと振り向く。確かに、今のはこの少女が……ステラ自身が発した声のようだった。
「えっ……ステラ、今しゃべった？」
　ジョシュアがおそるおそるステラに確認をとったが、彼女はその問いを無視して、
「……不思議ね」
　と言ったっきり、また口を閉ざしてしまった。
　ジョシュアは不思議そうに首を捻りながら、腕を組んで僕の方を見る。
「まあいいや。ここのどこに何があるのかとかは……まだ聞いてないよな？」

僕は首を縦に振った。
「そっか。じゃあ入っていいところと、入っちゃダメなところも一緒に説明するからな。えーっと、そうだな、まずは……」
そう言いながらこちらに手招きをするので、僕はジョシュアへ少しだけ近づく。彼はこの施設について簡単に説明をしてくれた。一通りの説明が終わった後、先生が僕達を呼びに戻ってきたので、その後は皆でダイニングルームへと向かい食事をした。

🦋

僕がこの施設で先生や子供達との生活をはじめて数か月が経った。
皆とともに生活を送り、話をするうちに、段々と彼らの特徴や性格を知っていった。
レティはとても元気の良い少女だ。元気が良すぎて振り回される程に。初日にレティが話していたリックという子には、その日の夜の自由時間、本を借りようと図書室へ行った際に会う事ができた。レティと同じ赤紫色のメッシュが入った白髪を後ろで一つにくくり、小さなリボンが複数ついたズボンをはいている少年で、外見はレティとそっくりだった。双子なのかもしれない。
少し会話もしたが、性格はレティとは正反対で落ち着いていて、あまりはしゃいだりするのは得意ではなさそうな印象を受けた。次の日、もう一度話をしようとリックを探したが、見つける事ができなかった。レティに聞いてもおやすみしてるから、としか答えてもらえない。夜の自由時間に何度かリックを見かける事はあったし、話す事もあったけれど、レティの言葉が今でも気に掛かっている。
チェルシーは、少し臆病だけどとても優しい少女で、周りの皆にいつも気を配っている。洗濯物を畳んだり掃除をするのは先生よりもチェルシーの方が上手かもしれない。外で走り回ったりするのはあまり得意ではないようで、外で彼女の姿を見るのは施設の庭の花壇に水をやっている時位だった。
部屋にはぞっとする量のクマのぬいぐるみが置いてあって、はじめて遊びに行った時には腰が抜けそうになったが、女の子はぬいぐるみが好きだし、チェルシーもきっとそうなのだろう。
ジョシュアは、イタズラが大好きな少年で、よくカエルや虫などを施設の庭で捕まえてきては、先生や他の子に見せたりこっそり肩に乗せたりして驚かせている。僕もすでに何度かやられた。とてもやんちゃなイメージだが、服を汚せば自分で洗面所に持って行くし遊び終えたおもちゃもきちんと片付ける。意外としっかりとしているようだった。
そしてとてもお喋りで、いつも嘘なのか本当なのかわからないような話をしてくれる。僕以外の男の子はリックとジョシュアしかいないし、リックはたまにしか姿を見せないので、僕は本を読む時間以外には彼と行動を共にしている。
ステラは、未だ謎が多くて不思議な少女だ。何かを聞けば一応反応

はしてくれるが、それ以上に何か話そうとしたり、彼女から話しかけてきたりするような事は全くない。
　ただ、すれ違う度に僕を睨んでいるような気がする。……やはり嫌われているのだろうか。たまに彼女の部屋からはピアノの音が聞こえてくる。一度しっかりと聞いてみたいと部屋の扉に耳を当てていたら、彼女に見つかってしまい鋭く睨まれてしまった。
　先生は、少し抜けている所があって、頼りになる大人……とは言い難い。でも、僕達への対応はすごく丁寧で、常に気を配っていてくれているとわかる。たまに施設に顔を出しに来るクリフさん曰いわく、とても才知に長たけた人物らしいのだがジョシュアにイタズラを仕込まれたり、レティに振り回されている所を見ているとてもそういう風には見えない。ただ、先生の部屋にあった資料のようなものや本は、たしかに難しそうなものばかりだった。……何かの研究をしているのだろうか？
　一度思考に没頭すると、ちょっとやそっとじゃこちらに気づいてくれない。ジョシュアは「そういう時は腰を叩くんだぜ」と言って叩いて見せてくれたが、とんでもない事になったので腰が弱点なのだろう。
「……あ、手帳に書いちゃった」
　頭の中で整理するだけのはずが、いつのまにか目の前に開いていた自分の手帳に全て書き写してしまっていた。貰った日から一度も先生に出せていない空色の手帳。なんでも書いて良いと言われたが、僕は何も書けずにいた。
　記憶についてもあれから進展が無い。ただ、何かが引っかかっている感じがずっとしている。何か、大事な事を忘れているような――。それが何なのかを思い出せずに、僕はずっとモヤモヤとしていた。そのまま、また一つの季節が過ぎようとしている。
「……もう寝よう」
　就寝時間はもう少し先だったが、僕はパジャマに着替えて布団へ潜る。ふわふわとした枕と布団は、どこか懐かしい香りがする。僕の家の布団もこんな感じだったのだろうかと、またそんな事を考えてしまう。その度に小さな頭痛がして、とても空むなしい気持ちになる。
　もしかしたらこのまま一生空っぽのままなのだろうか……。
　少しずつ大きくなる頭痛から逃げるように。
　……僕はそのまま深い眠りに落ちた。

🦋

「……私は知ってるわ。貴方が今知りたい事」
「……本当に？」
「ええ、でも私以外にも知っている人はいるのよ」
　知らない声。視界は真っ暗で、姿は見えないが――誰かが、いる。
「それは誰？」
「そうね、今世界には何億の生命が存在しているのかしら」

「……君は誰？」
「それは、貴方が今知りたい事ではないでしょう？」
　少女の声だ。さっきから会話がうまく噛み合わない。
「なら、ヒントをあげる。……答えは、貴方が自分で思い出さなきゃ」
　思い出す。思い出せるのか？　……きっと無理だ。僕は、何も思い出せない。
「……あら、手が震えてるわよ」
　いつの間にか冷たくなっていた僕の手にぬくもりを感じる。少女が、僕の両手を包み込むようにそっと握っていた。
「大丈夫よ、ダイジョウブ、ダイジョウブ。……ほら、ね」
　少女はそう言って、僕から溢れていたものを掬すくい取ってくれる。手の震えはいつの間にか止まっていた。
「心配しないで、全て思い出せる。あせらなくていいの、消えたんじゃなくて奪われただけだから。……××は、ちゃんと貴方の中に残っているわ」
「××……？」
　その少女が言った言葉を復唱してみる。しかしその言葉はノイズがかかったようにモヤモヤになる。でも、僕は知っている。この言葉を━存在を知ってる？
　……奪われただけ？
「それって━」

🦋

　━ゴッ！
　鈍い音と痛みが体中に響く。どうやらベッドから落ちてしまったみたいだった。まだぼんやりとしている頭をなでながら体を起こす。
「××……」
　その言葉は夢の時と変わらずハッキリとしない。その後にひどい頭痛に襲われ、ベッドに倒れこんでしまう。夢と現実の狭はざ間まにいるような気分だった。
　最近、似たような夢をよく見る。誰かが僕に語りかけてきて、慰めてくれる夢。あの夢の中に出てくる少女は誰なのだろうか？　確かに僕の手を包んでくれた。
　手を軽く握ってみる。その微熱は、まとわりつくようにまだ僕の手に残っていた。……いや、手だけじゃない。なんだか体中がぽかぽかしていて、気だるい。
「……クシュンッ！」
　頭が先程よりぼんやりとしている。とりあえず、もう一度体を起こそうとしたが体に力が入らず、再びベッドに倒れ込んでしまった。
　そのまま、どうしようかと悩んでいるうちに僕はまた眠りに落ちていた。

「──微熱だね。季節の変わり目だからかな、安静にしていれば大丈夫だと思うよ」
「……すみません、先生」
　あれからどの位時間が経ったのかはわからない。あの後、先生に体を揺さぶられて目が覚めた。先生が持ってきてくれたホットミルクを一口飲む。ちょっぴり熱い。
「熱はそこまで高くないけれど動けないようだし、スープを作って僕がここに持ってこよう。他に何か欲しいものはあるかい？」
　先生は微笑んでそう聞いてくる。本が読みたい、なんて言ったら怒られるだろうか……なんと答えるか考えるよりも先に、僕の口からは一つの言葉がこぼれ出ていた。
「……××」
　自分が何を言ったかを気づくのに数秒。その後に急いで先生の方を見ると、先生は突然冷や水をかけられたかのような顔をして、僕の方を見つめていた。
　しまった。自分にはノイズのようになっていてわからないので気にしていなかったが、もしかしたら変な意味の言葉なのかもしれない。急に気恥ずかしくなり、俯いてしまう。
「……まいったな。それは、僕には与える事ができない。買えるものじゃ、ないしね。……ごめんね。勉強しておくよ」
　顔をあげると、少しだけ悲しそうな顔をして笑う先生がいた。はじめて会った時にも思ったけれど、本当に子供っぽい表情をする人だ。
「それじゃあ…また新しい本を買ってこようかな。昼に街へ買出しに行く予定なんだ」
　新しい本、という単語にピクリと肩を震わせて反応する。図書室にある本は薄っすらと記憶にあるものばかりで、他は僕の好みに合いそうな本がなかった。だから、読める本が増えるのはとても嬉しい。
「アレン君は本当に本が好きだね。難しい言葉ももう理解できるようだし、すごいなあ」
　先生は感心したように言った。
「……先生も、難しい本を読んでますよね。あの大量の……部屋にある本」
「あはは……先生は頭が悪いからね。ああやって沢山読んで勉強しないと、理解できないんだ」
　先生は寂しそうな顔をして、少しだけ俯く。さらに片手で口を軽く押さえると、そのまま黙り込んでしまった。
「先生？」
　声を掛けてみるが、反応が無い。片手を先生の目の前でヒラヒラと振ってみても状況は変わらなかった。……また何かを考え込んでしまったようだ。こうなってしまっては、こちらに戻ってくるまでに少し時間が掛かる。
　先生は一人の時だけでなく、僕達と会話をしている最中でもこうし

て急に黙り込んでしまう事がよくある。いつも夜遅くまで調べ物をしているようだが、何を調べているのだろうか。先生はとても優しい人だ。だけど、それ以上に僕は先生の事を何も知らなかった。
「アレン君は━世界とは違う、セカイがあると言ったら…信じるかい？」
「えっ？」
　先程まで俯いていた先生が、再び僕の目を捉えていた。
「……どういう、ことですか？」
　突拍子もない質問に僕も質問で返していた。セカイって、なんだ？
「……いや、ただのおとぎ話さ。ごめんね、急に変な事を言い出して」
　先生は慌てた様子で、早口でそう答えた。
「でも……扉に誘われたら、その扉は開けないようにね」
　そのまま再度僕の体調をチェックして、部屋から出て行く。
　扉を閉める瞬間に、「もう少し」先生は小さくそう呟いた気がした。

　次に目が覚めた時には、体調はすっかり良くなっていた。先生がこまめに様子を見に来て看病をしてくれたお陰かもしれない。机に用意されていたチキンスープとサンドウィッチを食べて、その隣に置かれていた風邪薬を飲む。その後、パジャマから私服に着替えた。
　部屋の外に出ようとして扉を開けたら、きゃっという小さな悲鳴と共に、体に小さな衝撃を感じる。目の前には一人の少女が尻もちをついて、目を泳がせていた。
「大丈夫？　チェルシー」
　そう言って手を差し伸べたら、かあっと頬を赤くする。その後、おそるおそる僕の手を握って、ゆっくり立ち上がった。
「あっ、ありがとう、えっと、ご、ごめんなさい……」
　恥ずかしそうに下を向いて、チェルシーは消え入りそうな声で答えた。ここで暮らし始めてから結構経ったはずなのだが、未だに話す時には距離を置かれている。
　もしかして僕の顔が怖いのだろうかと、チェルシーに微笑んでみる。するときょとんとした顔をして首を捻られてしまった。……僕は表情の作り方も忘れてしまったのかもしれない。
「え、えっとね。先生が、体調ももう大分良くなってるみたいだったし、お話ししても大丈夫だろうって言ってたから。それで、ちょっと気になってたから……」
　段々ごにょごにょと声が小さくなっていく。最後の方は何を言っているのか上手く聞き取れなかったが、僕の事を心配してくれていたのだろう。
「……ありがとう。もう、大丈夫だよ」
　チェルシーの目をしっかりと見てお礼を言う。チェルシーは慌てた

ようにこちらを見つめ返すと、小さく頷いた。はじめは全く目を合わせてくれなかったことを考えれば、徐々にではあるが、彼女と仲良くなる事は出来ているのだろう。……まだ、少し距離は遠いけれど。
　その時、天井からギイ、と何かが軋きしむような音が聞こえた。その瞬間チェルシーが小さな悲鳴をあげて、僕はその悲鳴に驚いて尻もちをついてしまう。チェルシーは慌てて僕の手を引っ張ろうとして、手を伸ばした瞬間に足が絡まって転んでしまった。
「……何してるの？」
　僕の隣の部屋の扉が少し開く。その隙間からリックがこちらを怪け訝げんそうな顔をして見ていた。事情を説明すると、何も言わずに僕とチェルシーの手を掴んで引き起こしてくれる。
「レティから、『アレンは今風邪を引いてるから、近づいちゃダメだよ』って言われてたけど。もう、大丈夫そうだね」
　リックがそう言って僕の頭をなでる。
「そういえば、何で音にびっくりしたの？　ここ、結構床とかグラグラしてるから音が鳴るなんてよくある事なのに」
　リックはそう言って、片足に体重をのせる。木造の床はミシミシと今にも抜け落ちそうな音を立てる。不安になった僕は咄とっ嗟さにもういいよ、とリックの腕を引っ張った。
「えっと……ジョシュア君がね、言ってたの。最近、二階から変な声がするんだって。だから……もしかしたら……おばけとか、いるんじゃないかって……」
　チェルシーの顔がどんどん青ざめていく。
「……ジョシュアのそういう話は大体嘘なんだから。チェルシーは、正直者過ぎるよ。実際に見たわけじゃないんだから、大丈夫だって」
　リックがため息を吐きながら、チェルシーの肩をポンと叩く。またジョシュアの噂話か、と思いつつも今回はやけに気になる。
「……それって、どんな声なんだろう。女の子の声かな。おじさんの声かな」
「なんだ、アレンまで。……そんなに気になるなら、ジョシュアに聞けば良いと思うよ。あいつ、自分の部屋に居ると思うからさ」
　リックが呆れたような顔をする。その時チェルシーが眠そうにあくびをしたので、二人とも僕におやすみをした後、それぞれ自分の部屋に戻っていった。
　僕はジョシュアに二階の声について聞こうと思い、彼の部屋へ向かった。
「あれ、風邪引いてたんじゃなかったっけ？　もう大丈夫なのか？」
　扉をノックしようとしたら、中からタイミングよくジョシュアが出てくる。ちょうどいい、と思い先程チェルシーから聞いた二階の声について聞いてみる事にした。
「ああ、それね！　最近二階の物置から声がするんだよ。たすけてーってな。あれは絶対おばけかなんかだって！」
　両手をあげて、ワッと僕に襲い掛かるような動作をする。しかし僕の反応が薄かったためか、少しだけ恥ずかしそうにその手をゆっくり

と下ろした。
「ジョシュアは、その声確かめに行ったの？」
「えっ？　やだよ、気持ち悪い。確かめに行けるわけないだろ。あっ、怖いわけじゃないぞ！　僕、そういうのばかばかしいって思うからさ！」
　ジョシュアはそう言うが、よく見ると膝が震えている。もしかして、今回は本当なのだろうか。僕は「わかった」とだけ言って二階に続く階段の方向へと歩き出す。
「あっアレン、もう就寝時間だからな！　先生に見つからないようにするんだぞ！　見つかっても、僕が言ったって言うんじゃないぞー！」
　慌てたようなジョシュアの声が、背後から投げ掛けられた。しかし声の方が気になっていた僕は、ぼんやりとしか聞いていなかった。
　廊下に出て二階に上がろうとしたら、上から誰かが下りてくる音がした。まずい、先生だろうか。そう思い少しだけ後ろに下がり様子を伺ってみる。二階から降りてきたのは、先生ではなくステラだった。彼女の手には本が数冊携たずさえられている。
「…………」
　……沈黙が重い。ステラは僕をじっと睨みつけてくる。自然と体が後ろに下がる。彼女も僕との距離をあけまいとするかのように、一歩ずつ近づいてきた。
「……やっぱり、貴方って不思議だわ。だって、声が出るもの」
　透き通るような声が僕の耳を掠かすめる。彼女の声は、久しぶりに聞いた気がする。
「貴方が生きているように感じないからかしら。ここにいる人達は皆そういう風に感じるけれど、貴方が一番だわ」
　……これは褒められているのだろうか。なんと返答をして良いのかわからずに戸惑う。
「いえ、貴方は少し違うわね。……先生なら二階には居なかったけれど、用があるなら早めに済ませた方がいいわよ」
　そんな僕を無視して、彼女は一人で何かを納得したように頷く。全てを見透かされたような言葉に少しドキッとしてしまった。……おばけより、彼女の方が怖いかもしれない。彼女が僕の横を通り過ぎて姿が見えなくなるのを確認してから、大きな音が出ないようにこっそりと階段を上る。
　二階は既に真っ暗で、静まり返っていた。手探りで物置部屋の扉を見つけ、恐る恐るドアノブを回してみる。カギは掛かっていないようだった。
　ギイ、という音を立てて扉を開ける。部屋は真っ暗で、少し埃っぽい。
　数歩前に進んで、耳を澄ましてみる。隙すき間ま風のような音が聞こえる以外には、特に異常はなかった。やはり単なる噂話だったのだろうか。少しだけがっかりして、思わずため息が漏れてしまう。自室に戻ろうと、体の向きを変えた、その時。

『──て』
「えっ？」
……今、何か聞こえた？
『──けて』
何か居る。声が聞こえるだけで、それが何かははっきりとしていないけれど。手探りで声のする方向へと近づいてみる。心臓の音が段々大きくなっていく。
『──たすけて』
ようやく声の主の元まで辿りつく事が出来た。薄暗く、ハッキリとは見えないがおそらく位置的に蝶の標本があった場所だ。
考えるよりも先に、蝶の標本に手を掛けようとする。位置が少し高く、背伸びをする。それでも届かずに限界までつま先を伸ばすと足が震え、やっと手にした標本が手から滑り落ちた。
──ガシャンッ！
蝶の標本が僕の足元に落ち、大きな音をたてて飛び散る。大きな音にビックリして、慌てて後ろに飛び退のいた。……まずい、非常にまずい。自分の顔が青ざめていくのがわかる。心臓の音は更に大きくなる。その中で、背後から何かの笑い声が聞こえたような気がした。

３

……ひどく頭痛がする。アレン君の風邪を貰ってしまったのだろうか。
いや、そんな理由ではないのは自分自身が一番わかっていた。きっともう限界に達してしまっているのだろう。また、懐かしい眩め暈まいに襲われる。
「……そうだ、もう一度全ての扉にカギを掛けたか見に行かないとな。ステラ君がいたから図書室にはまだ掛けていなかったし」
ゆっくりと体を起こす。まだ歩けない程に悪化してはいないようだった。
──ガシャンッ！
二階から何かが割れたような音がした。もう就寝時間は過ぎたはずだが、上に誰か居るのだろうか？　音の方角からして、物置のようだが、あそこは普段からしっかりとカギを掛けていたはず……。
──いや、それよりも二階に居る人物が誰かを特定しなければいけない。
急いで二階へと向かい、物置部屋の扉を開ける。
「誰だ！」
電気を点つけると、そこには青ざめた顔をしたアレン君がいた。足元には蝶の標本が落ち、ガラスの破片が散らばっている。
アレン君は体を震わせてこちらをじっと見つめていた。事情を察し、これ以上怯おびえさせないようにゆっくりと彼に近づく。
「……大きな音がしたから来てみれば、こんな所で何をしているんだい？　就寝時間を過ぎたら、もう自分の部屋から出てはいけないと教

えていたよね？」
　彼と目線が合うように膝をついて、静かに問いかける。アレン君は申し訳なさそうな顔をしながら、小さな声で、
「……蝶が、たすけてって、言ったんだ」
　そう呟いた。……蝶が喋った？
「……なるほど。でもね、その蝶は生きているように綺麗だが、もう死んでいるんだよ。魂の無いものは、喋らないだろう？」
　自分で言った言葉に、胸を締め付けられる。あの日の後悔に、僕はまだ縛られたままのようだった。
「標本、ぐしゃぐしゃになっちゃった……」
　アレン君は泣きそうな声で呟くと、そのまま僕から目をそらし、俯いてしまう。
「……怪我はないみたいだね、よかった。ガラスの破片も散らばっていて危ない。先生が片付けるから、君はもう自分の部屋に戻って早く寝なさい」
　アレン君の手を取って、傷が一つもない事を確認して安堵する。彼の手は小刻みに震えていた。……少しきつく言い過ぎてしまっただろうか。
「ごめんなさい……」
　小さく、繰り返し何度も呟く。……まずい。このままでは危険だ。
「そんなに謝らなくてもいいんだよ、次からやらなければいいんだ。大丈夫、ダイジョウブ、ダイジョウブ……ほら」
　アレン君の手をそのままそっと包み込むようにして、おまじないを唱える。アレン君はぎょっとしたような顔をしてこちらに再び視線を合わせてくる。何か変な事でも言ってしまっただろうか？
　━とにかく、早く彼を部屋の外に出そうと立ち上がった瞬間、キン、と耳障りな音が響いた。
『━本当に大丈夫なのかい？』
「……ッ！」
　どこからか声が聞こえる。僕のよく知った、不快な声。
「先生、大丈夫？」
　ハッとして顔を上げると、アレン君が心配そうな顔をしてこちらを見上げていた。大丈夫、と返事をして、アレン君を出口に導く。そのままアレン君が階段を下りていく姿を見送ってから、振り返らずに先程の声に問い返す。
「……ずっと見ていたのかな」
『なんだなんだ、まるで苦虫を噛み潰したかのような顔をして！　久しぶりに会ったんだから、もうちょっと歓迎してくれたっていいんじゃあないか？』
　ぬらり、とまとわりつくような気配を背後に感じる。僕の不快感はさらに増していくようだった。
『オマエもとっくにわかってるだろ？　さあ、どうするんだい？』
　独特な笑い声が全身を這はいずり回る。僕は振り返り、その声の主へと口を開いた。

「……君に、お願いしたい事があるんだ」

　４

　一階はすでに全ての明かりが落とされ、不気味な雰囲気が漂ただよっていた。壁をつたい、なんとか自室まで辿りつく。
「大丈夫……」
　先生は、何故夢の中の少女と同じおまじないを知っていたのだろうか？　結局、あの声の正体はなんだったのだろうか。頭の中で様々な疑問が浮かんでは、解消されずに漂う。
「……眠い」
　昼間もぐっすりと寝ていたはずなのだが、強烈な眠気に襲われる。パジャマに着替えようとクローゼットに向かい、扉に手を掛ける。
「ニャア」
「……？」
　足元に、何か黒い物体がいる。周りが暗くてハッキリと見えない。
「ニャアン」
　ネコらしい声をその物体は出した。だが、どこかネコっぽくない。この違和感はなんなのだろう。僕の足に顔をこすり付けて、クローゼットの扉に前足を乗せる。
「入りたいの？」
　相手は言葉を喋るわけじゃないのに、そんな質問をしてみる。
「……開けないの？　アリス」
　びくっと肩を震わせて声の主を探す。何度か確認してみたが、足元にいるネコ以外、この部屋に声を発する生き物はいなさそうだった。ネコが、喋った……？
「そんな驚いた顔をしなくたっていいじゃあないか。オマエが読む本の中でだって、ミミズやネズミが喋ったりするだろう？」
　暗闇の中で、片方だけの金色の目がギラリと光る。白くギザギザな歯は、耳があるべき場所に届きそうなほどつり上げられていた。
「……本の中の話と、現実は違うよ」
「そうかい！　なら、夢の中ならどうだ？」
　……夢の中？　確かに、夢なら本に描かれているような景色を見たり、不思議な体験をする事はある。でも、今はそんな事が何か関係あるのだろうか？　もしかして、既に僕は夢の中に居て、ネコとお喋りをしているのだろうか？
「心配は要らない。夢は、いずれ覚めるもんだ。何が起きようが、自分が八つ裂きにされようが、それは全て夢の中でのお話さ！　さあ、どうするアリス？」
　先程から度々ネコが口にしている「アリス」とは、僕の事なのだろうか。本物のアリスは白ウサギを追いかけて、ウサギの巣穴へ落ちたんじゃなかったっけ。今、僕を不思議の国へ誘いざなおうとしているのは片目だけが不気味に浮遊しているネコだし、目の前にあるのはウサギの巣穴ではなくクローゼットだ。……思考が追いつかずに頭の中

がぐるぐるとする。
　痺れを切らしたのか、僕を急せかすようにネコが前足でクローゼットの扉をカリカリとひっかき始める。夢のセカイへの扉は、今、僕の目の前にある。
　少しだけ迷った結果、僕は両手でその扉をゆっくりと、開けた――。

🦋

「……さあ、表紙は開かれた！　ようこそ、アリス。楽しい夢物語のはじまりだぜ」

　――耳の奥で金属音のようなものが何重にもなって聞こえる。無重力空間に投げ出されたような浮遊感が全身を巡る。まぶたはまるで糸で縫い付けられたように重く、開く事が出来ない。……ここはどこだろう？　手足を動かそうとしても、ピクリともしない。
『…………』
　誰かの声が聞こえたような気がする。しかし、不快な耳鳴りに掻き消されてしまう。
　腕に何か温かいものが触れた。そのまま、僕はそのぬくもりに引っ張られて……。

🦋

「……あれ？」
　目を覚ますと、僕はベッドの上に横たわっていた。……あの後、眠ってしまったのだろうか？　布団から這い出て、足を床につけてみる。僕は、靴を履いたままだった。
　そのまま立ち上がり、ゆっくりと辺りを見回してみる。僕の部屋ではなかった。……ここはどこだろう？　まだ頭はぼんやりとしていて、長く考え続ける事が出来ない。
　薄気味悪く続く木の床は、所々が抜け落ちており、その下は深い闇に覆われていて見えない。道以外には、壁や他の物などは一つも無かった。
　抜け落ちている所に気をつけながら道を進んでいく。同じような景色ばかりで、自分がちゃんと前に進めているのか不安になってきた。
　しばらく歩いていると、目の前に人影が見えた。……いや、よく見ると下半身は何かの動物のようだった。上はフードのついたマントのようなものを身に着けており、その下からは長い尻尾がチラついていた。おそるおそる近づいてみると、その人影のようなものは何かに勢いよく引っ張られたようにこちらを振り返る。
「ジーザス！　なんだなんだ！　ハジメテミルおかしな人間がいるじゃあないか！」
　ニヤリ、といやらしい目でこちらを睨む。人の体にネコのパーツをむりやり継ぎ合わせたような物体が、目の前でブラブラと体を揺らし

ていた。顔の形状はフードが作り出した闇に覆われ、確認する事が出来ない。

「なんだい？　何か気になる事があるなら俺が答えてやるぜ、アリス！」
　アリス、と呼ばれて少し前の記憶を辿る。そういえばあの時、ク

ローゼットの扉を開けるようにそそのかしてきたネコの声に似ている。よく見れば、フードの中に浮遊している片目も記憶の中のネコと一致している。なら、ここはネコが言っていたように夢の中なのだろうか？
「イエス……アリスが夢だと言うんなら、ここは夢さ。ここはアリスが言う事、思う事が全てだからね！」
　声に出していない質問を、ネコのような生き物はバカにしたような喋り方で回答する。
「僕は、アリスじゃないよ。アレンっていう名前があるんだ」
　イライラする気持ちを抑えながら反論する。唯一自分の中に残っているものまで、別のものに塗り替えられてしまったらという恐怖心があったのかもしれない。
「そんな名前じゃない？　いや、アリスはアリスさ。だって、俺が言うんだからそうなるのさ！」
　頭がくらっとする。
「さっきと言ってる事が違うって？　そりゃそうだ。ここには私を含め、頭のおかしなやつしかいないからね！　シシシシシ！」
　声に出していない疑問を、エゴイスティックに答えていく。夢の中の住人とは仲良くはなれないと、この時点で僕は察していた。
「……そんな事言うなよ。うまい飯だって、夢だって、中途半端にさめたらまずいだろう？　このセカイは今出来上がったばかりなんだ。じっくりと味わっていけよ」
　そう言いながら片方だけの金色の目を細め、ねっとりと笑う。……気持ち悪い。
「おっと！　いけない、こうみえても僕は忙しいんだ。んじゃ、あばよ！」
　ネコのような生き物は一方的に別れを告げ、身を翻ひるがえすと同時にその場から消えた。一体なんだったのだろうか。明らかに増していく不快感から逃げるように、目の前に続く道を僕はまたゆっくりと歩き始めた。
　少し進んだ所には大広間のような広い場所があった。鉄格子に囲まれた壁と、所々に亀裂が入った石畳み。周りには、ぽつぽつとお墓のようなものが点在していた。
　その中心に、先程のネコとは違う人影が見える。木の枝のように歪いびつにわかれた、不思議な髪型。頭上にはウサギのような耳がぴょんと生えている。ただ、片耳は無残にも獣に食われたかのように引き千切れていた。
　ウサギのような生き物は、こちらの姿を確認すると僕を手招く。こちらに来いと言っているのだろうか。白目の部分は黒く染まっており、その真ん中に真っ赤な月のような瞳が浮かんでいる。その目が少し恐ろしくて、あちら側へ行くべきか少し思い悩ませる。
「……早くしてくれませんか」
　今度はイラついたような声を僕に投げかける。やっぱり言葉を喋るのか。そんな事を考えている内に、相手のイライラがどんどん増して

いくようだったので急いで近づく。
「はあ……アナタで六人目、説明は五度目になります。全く、面倒です。だから小分けにしろとあれほど言ったのに……」
　僕に向かってというわけでもなく、一人ぼそぼそと愚痴を零こぼしている。その肌は生気を感じない程に白く染まっていた。一応、ウサギらしい尻尾もついているようだったが、あいにく今触れると八つ裂きにされてしまうかもしれない、という程の殺気が溢れ出ていた。
「ああ…すみません。お見苦しい所をお見せしました」
　先程までの殺気に満ちていた表情をコロッと変えると、体勢を整え、こほん、と一つ咳払いした。
「改めてこんばんは、アリス。そしてようこそ。ここまでご苦労様でした。僕はシロウサギ、このセカイの案内人です。ここは結構広いですから、必要であればお呼び下さい」
　まるで言い慣れた言葉のように、スラスラとシロウサギは僕に挨拶をした。
「……とは言いますが、基本、僕はここから動きません。だって面倒ですし。だから、セカイへは自分で……あれ？　数が合わないな。これは一体……？」
　何か問題があったのだろうか。シロウサギは、何か悩み始めた。しかし、数十秒後にはその行為すら面倒だというようにため息を一つ。
「……まあ、いいでしょう。実は、今大変困った事にセカイへの扉のカギを無くしてしまいましてね。全部で五つあるのですが、その内の四つを何者かに盗まれてしまいました。……誰が持っていったのかは大方予想がついていますが」
　酷い頭痛に襲われたかのように眉間に皺を寄せる。先程まで穏やかだった表情が、また殺気立ったものへと変化していく。
「先程も申しましたが、僕はここから動きたくありません。だから、アリス。あなたに回収をお願いしたい。……どうでしょう？」
　イエス、という返答しか認めないような、おぞましい表情でこちらを睨みつける。僕の知っている童話に登場するシロウサギのイメージとは全くの別物だった。
「……まあ、イヤだと言ってもやらせますがね。幸い、一つのセカイのカギは僕の手元にありますので、既に入れるようにしてあります。アイツの事ですから、きっとセカイのどこかにばら撒まいているのでしょう。ブラブラしていたら、見つかると思いますよ」

こちらの返答を待たずに、シロウサギはスラスラと説明を続ける。何なんだ、ここの住人は。皆、自分を中心に世界が回っているかのようなやつらばかりだ。

「……何か聞きたい事があれば答えますよ。ただし、三つまでですが」

　困惑している僕に億劫そうに、シロウサギは言葉を吐き捨てる。

……ちゃんと答えてくれるのだろうか？　まだ色々と整理がついていないが、とりあえずは質問してみる事にした。
「セカイって、何？」
「……セカイは、主にはアリスの心の裏を具現化した空間ですね。表面上の心はすぐに消えてしまいますから。カギは掛かってたりなかったりしてますが、大体は掛かっています。……まあ、人に自分のココロを勝手に踏み荒らされたくないでしょうし。カギは僕が管理していますので、頼めばいつでも出入りできるようにしてあげますよ」
　シロウサギは少し間をおいて、嫌みったらしく微笑む。
「アリスがちゃんと回収をしてくれたらの話ですが、ね」
　心の隅に寄せていた、先程のモヤモヤが再び湧き上がってくる。そんな感情をぐっとこらえ、別の質問をしてみる。
「ここに来る前に会った、あのネコのような生き物は何？　案内人って言ってたけど」
「……チェシャ猫の事ですね。アナタの仰るとおり、もう一人の案内人です。先程会ったのならば説明は不要でしょう。見ただけで反へ吐どが出る、胸糞の悪くなる野郎ですよ」
　この意見に僕は同意するように、小さく頷く。言葉が出ないのは、シロウサギの殺気が明らかに増して空間が歪みはじめたように感じたからだ。僕からすれば、どちらもそんなに変わらないとは思うのだが。
「この耳も、肌の色もアイツにやられましてね。趣味も合わないし、何もかもキライですよ。……今度会ったら、引きずり回して中のモノぶちまけてやる」
　そのままぶつぶつと、呪文のように何かを呟き続ける。僕はシロウサギから数歩離れた。気に障さわることを少しでも言おうものなら、僕が引きずり回されるのではないか。
　しばらく様子を伺っていたら、スッキリしたのか、それとも飽きたのか……シロウサギは眠そうに大きなあくびをした。そのまま寝てしまうのではと不安になったが、こちらにもう一度手招きをする。僕はおそるおそる、再びシロウサギの傍そばへと寄っていった。
「あと一つ、質問できますがどうします？」
　……イラつきの方はまだ少し残っているようだった。
「えっと……じゃあ、シロウサギさんは何が好きですか？」
　無難な方へ逃げようと咄嗟に出た質問だったが、失敗した、と思った。自分の事について回答をするほど面倒な事はない。
　自分の顔からさぁっと血の気が引いていくのを感じながら、シロウサギの顔色を伺ってみたが、特に不快そうに感じている様子はなかった。
「……僕、ですか？　案内人、という他にはそうですね……子供が、好きですかね」

シロウサギに示された扉を慎重に開ける。扉の向こうは暗あん澹たんとしていて、何も見えなかった。
「……まあ、いずれ明かりは点きますよ。ただ、アイツには気をつけて下さいね」
　シロウサギは元の位置から一歩も動く事なく、今度は早く行ってくれとでも言いたげにシッシと手を振る。少しだけむっとしたが、このままここにいても何も変わらないだろうと、扉の奥へと進んだ。
　暗闇の先にあるのは階段のようだった。手すりをつたいながら、一段ずつ確認していくように上っていく。ようやく上りきった所で、突然目の前が真っ白になり、思わず目を閉じてしまった。
「……やあ！　元気にしてたかい？　私は絶好調だぜ」
　背後からそんな声がして、ぞくっとする。振り向かなくても声の主がわかる。
　まだ視界はぼんやりとしていたが、無視して前に進もうとする。その瞬間、先程まで僕の背後にいたはずのチェシャ猫が、目の前でニヤリと笑っていた。
「暢のん気きにお散歩かい？　いや、探し物かな？」
　チェシャ猫は前足の爪に、カギのようなものを引っ掛けてくるくると回していた。
「カギ？　そんなものは知らないな。まあ、盗んだのは俺だが、別のヤツに頼まれて盗んだんだよ。ほんとだって！」
　ベラベラと、よく口が回るネコだ。それよりも、誰かに頼まれたというのは本当だろうか？　本当だとしたら、それは誰の事なのだろうか。また帽子屋や三月ウサギなんてのが出てくるんじゃないだろうな。もし出てくるのなら、今度こそまともな人物であってほしい。
「誰かは教えないけどな！　俺は嘘はつくが、味方にはつかない性格なんでね。まあ、私もあくまでも案内人……ヒントくらいはやるさ」
　そう言ってその場でくるりと回る。先程まで弄もてあそんでいたカギはいつの間にかネコの手から消失していた。
「そいつは、一つのセカイに一つずつばら撒いていったよ。アイツと同じくらい面倒なことをするよな」
　チェシャ猫は爪を一本立てて、愉快そうに僕に説明をする。
「……他に、カギを開ける方法って無いの？」
「ああ、無い事はないさ！　オマエが、母親の旧姓や昔飼っていたペットの名前を答えられるなら……おっと、記憶が無いんだっけ！」
　聞くんじゃなかった、と僕は思うと同時に、アイツとは、シロウサギの事だろうか、と考える。シロウサギもチェシャ猫の事をアイツと呼んでいた。
「その通り。中々賢いガキだな、オマエ。名前を口にするとネコ肌が立つんでね。このフードの中も、アイツにぐちゃぐちゃにされちまったしな」
　そう言いながら、フードの中に自分の前足を突っ込む。中からは、ねちゃねちゃとおぞましい音が漏れ聞こえ、思わず目を背そむけてしまう。音から察するに、フードの中身がちゃんとした輪郭を描いてい

るようには思えなかった。
「……見てみるかい？　お子様にはちょいとグロテスクだぜ」
　僕は無言で首を横に振った。興味がないわけではなかったが、なによりもこれ以上チェシャ猫と話を続けたくはなかった。
「おおっと、時間切れだな。そんじゃ、幸運を祈るぜ。ああ、最後に……ヒトのココロ覗くべからず。気をつけな！」
　ねっとりとした笑みを浮かべ、身を翻すと同時にチェシャ猫はその場から消える。
　……なんだかやる気が失せてしまった。しかし、あのシロウサギを待たせるのも面倒な事になりそうで怖い。
　重たくなった足を無理矢理前へと押し出す。目の前には扉が五つ、等間隔で並んでいた。シロウサギが説明していた、セカイへと繋がる扉だろう。
　一つ目の扉に、ゆっくりと近づき、ドアノブに手を掛ける。……この先に、何があるのだろう。何故か開ける事が躊躇われた。
　陰いん鬱うつとした何かがつま先から這い上がり、足へと絡みつく。得体の知れない恐怖心が背中をなでる。扉にかけた手は、いつの間にかカタカタと小刻みに震えていた。
　頭を大きく振り、気を持ち直す。大丈夫、これは夢なんだ。いい夢だったとしても、悪い夢だったとしても、覚めたら終わり。全て、夢の中での出来事だ。
　そうだ、これは夢だから大丈夫──。
　大きく深呼吸をして、自分を落ち着かせる。
　そして、ゆっくりとドアノブを回し、セカイへの扉を──開けた。

5

「……君もついてくるのかい？」
　ドアノブに手を掛け、背後にいる影に振り返らずに語りかける。
「何か問題でも？」
　あざ笑うかのような声で、その影は返事をした。
「いいや、ついてくるなとは約束をしていないからね。……ただ、約束した事はちゃんと守ってもらうよ」
「ああ！　大丈夫さ。なんたって、俺は嘘なんかついた事ないからね」
　背後で楽しそうな足踏みが聞こえる。何がそんなに面白いのだろうか……なんて、まともに考えてしまっては、ここの住人とは付き合えない。すぐにその思考を放棄する。
　もう一度、自分の手に収まるドアノブを見つめる。このドアノブを捻るのも、何年振りになるのだろうか。
　なるべく早く終わらせなければいけない。もう一度強く決意し、ドアノブを勢いよく捻り、僕は目の前の扉を開けた。

第二章　ふたりぼっち

1

　扉を開けたその先にあったのは、見慣れた誰かの部屋だった。隅っこに、色違いのベッドが二つ、仲良く並べられている。

「あっ！　アリス！　起きたのね？　おはよう！」

　部屋の中心で、僕のよく知っている人物が無邪気に笑い掛けてくる。瞳より少し暗めの赤紫色のメッシュが入った、ゆるいウェーブのかかった白髪。そこにいたのは、レティだった。なぜ、彼女がここに──？

「ねえ、ねえねえねえ！　アリス。私ね、今すっごく退屈なの！　一緒に遊びましょう！　遊びましょう！　遊びましょう！」

　僕の答えも待たずに、両手を掴み上下に大きく振る。あまりの勢いに、先ほど抱いた微かすかな疑問など吹き飛んでしまう。

「遊びましょう！　遊びましょう！　遊びましょう！」

　この遊びの誘い方は確かにレティ……のはずだが、言い知れぬ違和感に襲われる。何かが、おかしい。

「遊ぶ？　そう！　何して遊ぼっか！　うーんとね、えっと……あっ」

　僕の回答を待たずに、ぐるん、とありえない角度にまで首を傾斜させる。僕は、ひっ、と小さな悲鳴を上げた。

「クローゼット、開けちゃう？」

　無邪気な顔をしたまま、普段より高めの声で僕にそう問い掛けてくる。大きく振られていた両手はいつの間にか停止しており、じんじんとした痛みが両腕を支配していった。

　僕はレティから逃げるようにクローゼットへと走る。僕の部屋に置かれているものと、同じデザインのクローゼット。……開けてしまってもいいのだろうか？

　おそるおそる、もう一度レティへと振り返る。首の位置は元に戻っており、いつもと変わらないニコニコとした笑顔をこちらに向けている。その姿を見て、僕は何故かほっとしたように息を一つついた。

　そのまま軽い気持ちで、クローゼットを開けてみる。レティのクローゼットには確か沢山の玩具が入っていたはずだ。今日は何をするのだろう？　人形遊びかな、それとも──。

　その瞬間、僕の体はクローゼットの中へと引きずり込まれる。正確には、魂だけが抜き取られていくような感覚だった。鋭く、不快な金属音が耳を劈つんざく。

　僕はそのまま、意識を失った。

　次に目が覚めた時、僕はまたベッドの上にいた。だけど、そこは僕の記憶にないベッドだった。

　枕は石のように硬いし、毛布はボロボロで埃っぽい。少し体を揺さ振るだけで、ギシギシと大きな音を立てる。眠る事ができるのか不安

になるほど粗末なベッドだ。
　起き上がり、周囲を確認してみる。木造の壁と床は、所々腐敗して黒ずんでいる。部屋の隅には名前の知らないキノコが生えていた。掃除をしていないのだろうか、一歩足を進むたび埃がふわりと舞う。空気は少しじめじめとしていた。
　ここがシロウサギの言っていたセカイだろうか？　先程まで居た場所よりはずっと現実世界寄りに感じるが、全く見覚えのないその部屋が『僕のココロを具現化した世界』というのは、少し不思議な気がした。……事故で記憶を失ってしまったから、そう感じるのだろうか。
　何か思い出せるかもしれない、と近くにあった小さなタンスを開けてみる。中には、小さな木の実や枯葉が大切そうに並べられていた。枯葉の一枚を手に取り、裏返してみると小さく文字のようなものが書かれている。だが、字が汚くてなんと書かれているのか、解読することは出来なかった。
　一通り部屋を調べてみたが、結局何も思い出せなかったし、カギらしいものも見つからなかった。少し疲れてしまい、ため息を吐く。
　外の景色を確認してみようと、窓に近づいた。外は、沢山の木に囲まれていて空を完全に覆い隠している。この家は森の中に建っているのだろうか。窓を開けようと、手を添えて前に押してみる。
　──パリン！
　僕の手だけが前へと押された。窓のガラスは割れている。軽く押したつもりだったのだが……力の加減が出来ていなかったのだろうか？
　慎重に手を引き抜くと、小さな破片が数箇所、手のひらや手首に刺さっていた。一欠片ひとかけらずつ丁寧に取り除いたが、傷口からは血が滲み、やがて小さな球体となって僕の手首から零れ落ちた。
　不思議と痛みは感じなかった。いや、夢の中なのだからこれが当たり前なのだろうか。確かに僕の手首のはずなのに、まるで他人の手首を見ているかのような感覚だった。
　しばらく呆然と見ていたが、カギの事を思い出し、部屋を移動しようと扉へと向かう。
　扉に近づき、開けようとドアノブを回してみたが、押しても引いても微動だにしない。何度か確かめてみたが、鍵穴やつまみなどは付いていない。少し乱暴にガチャガチャと回し続けていたら、ガチャリ、と大きな音を立てやっと開いた。
　そのまま扉を開けて進もうとした瞬間、こめかみに電流が走ったかのような、小さな痛みを感じて立ち止まる。ガラスで怪我をした時にはこんな痛みを感じなかったのに──。

『──とある森の奥に、小さくてボロボロな家がありました』
『小さくてボロボロな家には母親、父親、そして一人の少女と少年が住んでいました』
『生活はとても貧しかった。しかし、母も父も優しく接してくれる。少女はいつも空腹でしたが、頑張って我慢していました』

耳鳴りと共に、まるで絵本を朗読するかのような声が頭の中に響く。
その間もなお、こめかみはズキズキと痛んだが、シロウサギを待たせている以上、あまりグズグズしているわけにもいかない。不快に鳴り続ける金属音を無視して、開きかけていた扉を押し、奥へと進む。
奥の部屋はダイニング兼寝室のようだった。
部屋の中央には木造のテーブルがあり、椅子が三脚、テーブルを囲むように並べられている。いま入ってきた扉の横には大きなタンスが置かれ、その向かい側、部屋の隅にはベッドが二つあった。なかなか広い部屋だ。
室内は先ほどと同様に埃っぽいが、僅わずかに美味しそうな匂いが漂っている。テーブルに置かれた鍋の中を覗いてみると、木の実のスープが少量残っていた。テーブルの奥にはもうひとつ扉があり、時折、カタカタと音を立てる。おそらく外に繋がっているのだろう。外は風が吹いているようだが、暖炉で薪が燃えているおかげて、室内はとても暖かい。
──先程まで、誰かいたのだろうか？
家主がいたとして……見つかったらどうなってしまうのだろう。
「ヒトのココロ、覗くべからず……」
ここに来る前にチェシャ猫に言われた言葉が、やけに気になっていた。
ウサギはココロがセカイになると言っていた。つまりチェシャ猫は「セカイに入るな」と忠告していたのかもしれない。
……わからない。何を信じれば良いのか。
ふぅ、と知らないうちに詰めていた息を吐き出す。これ以上考えても答えは出ないだろう。今はカギを探す事に集中しようと、扉のすぐ横に置かれた大きなタンスへと向かう。
そういえば、カギを見つけたとしてどうやってあの場所へ戻れば良いのだろうか。
もう一度、布団に潜り込めば帰る事が──。
「……ソコ、チガウ」
「えっ？　……うわっ！」
突然聞こえてきた「誰か」の声に反射的に後ずさり、尻もちをついた。よく見れば、目のようなものが僕より若干上の位置に浮遊している。
……ここは夢の世界だ。何が喋ろうと驚かないつもりでいたが、まさかタンスが喋るなんて思いも寄らなかった。
「……ねえ、カギ知らない？」
先程は片言ではあったが、そこは違う、と言っていた。もしかしたら、このタンスはカギの在り処かを知っているのかもしれない。そう思って、尻もちをついた体勢のまま問い掛けてみたが、タンスはこちらの言葉を無視して必死に目をギョロギョロとさせている。
「……メダル、ナイ、ナイ……」
どうやら「メダル」を探しているらしいが、話が通じないなら仕方

ない。こちらも無視をして立ち上がり、タンスの目の上、一番上の引き出しに手をかける。ところが、開けようとした瞬間、耳をつんざくような甲高い雄たけびをあげられてその行動を拒否されてしまう。

「メダルを見つけたら、引き出し、開けてもいい？」

「…………メダル」

　少し沈黙してから、ギョロギョロさせていた目をこちらにぴたりと合わせ、じっと見つめてきた。

　……これは、話が伝わったと思っても良いのだろうか？

　それからしばらく室内を探していた所、木造のテーブルの下に一枚のメモが落ちていることに気づいた。

「……みんなへ。金のメダルを知りませんか、寝る前はポケットに入れておいたんだけどな……見つけたらタンスの一番上の段、左側の引き出しに入れて置いて下さい……父より」

　ここに住んでいる人によるメモだろう。ゆっくりと音読してみる。

「寝る前にポケット、なら……あのベッドかな」

　この部屋の隅に並べて置かれた二つのベッド。それは前の部屋のものと変わらず粗末なもので、上に乗ると、ギイ、と大きな音を立てて沈み込む。

「あった」

　ベッドと壁の僅かな隙間に手を突っ込んで探ると、床とは違う、ひんやりと冷たく硬いものが手に当たる。指先の感覚に頼り慎重に摘み上げると、それは知らない建物の絵が彫られた金色のメダルだった。あのタンスが言っていたのは、これのことだろうか。

　袖についた埃を払い、メダルを渡すためにタンスの元へ向かう。先程のメモに書かれていた通り、一番上の左側に入れてあげるとタンスは目を細めて嬉しそうな声を上げた。どうやら、このメダルで合っていたようだ。

　それから全ての引き出しを調べさせてもらったが、カギらしいものは見つからなかった。どうやら無駄足を踏んだみたいだ。

「……メダル、アリガト。チチ、ヨロコブ」

　ふいに、タンスが僕にお礼を言った。

　……お父さん。

　ここに来てからは、カギを探すのに夢中で、両親の事を考える余裕など無かった。再び、えも言われぬ虚無感に襲われる。この家でも、お母さんやお父さん、その子供が一緒に、この木造のテーブルを囲んで一緒に食事をしたりしていたのだろうか。ベッドや椅子の数から察するに、おそらく三人家族だろう。

「…三人家族？」

　小さな違和感。ここに住んでいるのは……。

「チチ、ハハ……ムスメ、リック」

　タンスが僕の呟きに反応をしたように、そう答える。ムスメ。そし

て……リック？

「ムスメって……レティのこと？」

「レティ、リック、レティ、リック、レティ……」

　タンスは繰り返し、そう呟き続ける。その言葉を聞いているうちに、徐々にこの家に訪れる前のことを思い出していった。僕は、ここで目を覚ます前に──レティに会っている。

　シロウサギは「アリスのココロの裏がセカイになる」と言っていたが、なぜレティはあそこに居たのだろうか。それに、僕のココロが生んだセカイなら、僅かなりとも見覚えのある景色があっても良いはずだ。全てが見たことのない、よそよそしい景色なのは、おかしい。小さな疑問が次から次へと浮かんでは消える。

　……もしかしたら、アリスって、僕だけの事じゃないのか？

　だとすると、このセカイはレティやリックのセカイなのかもしれない──そう考えた僕は、レティ達を探すため、この家から出る事にした。どの道、この家の中にカギは無さそうだ。

　入ってきたのとは別のもう一つの扉のドアノブを回すと、鈍い音を立てるだけでなかなか開かない。ドアノブを捻り、体重をかけながら強引に扉を前へと押し出すと、今度は勢いをつけすぎてしまい、そのまま地面へ体が放り出されてしまった。

「……」

　ひとつため息を吐いてから体を起こし、土を払い落とす。

　辺りを見回すと、家の周りをおびただしい数の木が囲んでいて、風が吹く度に不気味な音で囁ささやく。……やはり、ここは森の中のようだ。

　唯一、森を貫くように残っていた道を、早歩きで進んでいく。不思議な事に、道は一本に真っ直ぐに伸びていて、迷うかもしれない、という不安もいつの間にか消えていた。まるでどこかに導こうとしているかのようだ。

　僕はただ素直に、その案内に従った。

　道を進んでしばらくすると、大きな看板と、それに寄り添う小さな人影が見えた。もしかして……と走って近づいてみると、そこにいたのはやはりレティだった。レティは、こちらに気づいているのかいないのか、ぼんやりとどこかを見つめたまま身を縮めている。

「大丈夫、レティ？」

「……のど、渇いた……リック」

　肩を掴んでそっと揺さ振ってみたが、こちらに気づく様子は無い。のどが渇いたと、しきりに呟いている。先程の家まで引き返せば、水があるかもしれない。確信は無かったが、このままレティを放ってはおけないと思った。

「レティ、ここにいてね。水、持ってくるから」

　レティからの反応は無い。ただ、何かに怯えているようで、腕の小

さなリボンは小刻みに揺れている。僕はレティの頭をそっとなでた後、来た時よりも早足で、今来た道を戻った。
　数十分前に後にしたあの家まで戻ってくると、先ほどは気づかなかったが、鬱うっ蒼そうと茂る草木に隠れるようにして井戸があることに気づいた。恐る恐る覗いてみると、透明な水が底の方で静かに揺らいでいるのが見える。
　井戸の傍に置かれていた釣つる瓶べを手に取り、慎重に水を汲くむ。思いのほか早く水を手に入れられたことに、ほっと安堵したのも束の間。
「……このままじゃ、持っていけないな」
　井戸にしっかりと固定されている釣瓶を取り外すのは、おそらく無理だろう。家の中に、この釣瓶に入った水を汲んでレティの所まで持っていけるようなものはあるだろうか。
　先ほど閉めるのを忘れてしまっていた扉をくぐり、家の中へと入る。少し探したら、所々がひび割れた小さなコップを見つけた。底に何か文字が書かれていたが、ミミズのようにぐにゃっとしていて解読する事はできなかった。
　ほかに良い方法がない以上、この際多少のことには目をつぶろう。とにかく、早くレティに水を届けないと……と、釣瓶に汲んでいた水をコップに少しだけ移し、こぼれないように気をつけながらレティの元へと戻った。

⚷

　レティは先程とほとんど体勢を変えず、ぼんやりとどこかを見つめたまま小さく震えていた。水を汲んできたコップを、レティの手元にそっと差し出してみる。
「……お水！」
　するとレティは、ぱしっ、と音を立てて僕からコップを奪い取り、全ての水を自らにと注ぎ込んだ。
「あっ……アレン！　アレンが、お水持って来てくれたのね。のどが、カラカラだったの。……ここ、誰もいないし」
　水を飲んでようやく落ち着いたのか、僕の顔を見て嬉しそうに笑ったレティだったが、その後、急に不安げな表情になった。
「ねぇ……アレンは、ここがどこで、何でこんな所にいるのか、わかる？」
「えっ？　えっと……多分、ここは夢だと思うよ」
「……夢？」
　僕自身、まだわからないことだらけだったが、しょんぼりとした彼女を見て、とっさに夢だと言ってしまった。レティは驚きながらも、少し安心した表情を浮かべる。
「そっかあ、夢なんだ。私が住んでいた所に、そっくりだったからびっくりしちゃった。このコップも、私のお家にあるコップなのよ。ホラ、名前書いてあるでしょ」

レティはそう言って、僕にコップの底を見せる。これは名前だったのか。そういえば、ここで目が覚めた部屋にあったタンスに、大事にしまわれていた枯葉にもこの模様のようなものが書かれていた気がする。
「レティ・エーメリー、って書いてあるのよ。お母さんが名前の書き方、教えてくれたんだけど、この時はまだ上手に書けなかったの」
　照れくさそうに、首を少し傾ける。またぐるん、となるかと思いヒヤッとしたが、今目の前にいるのは僕の知っているいつものレティだった。
「じゃあ、遊びましょう！　夢の中って、いっつもリックと遊んでたから、他の子と遊ぶのはじめてなの！」
　ぱあっ、と顔を明るくして、僕の両手を掴む。
「……そうだ、リック。リックも探さなきゃ。今頃ひとりぼっちで寂しがってると思うわ。それに……ここには居たくないの」
　またいつものように腕を上下に振られるかと思ったが、レティはしゅん、と俯いてしまった。
「……ひとりにしないで、ね？」
　ぽつりと呟くレティの小さな手を、僕はしっかりと握り返した。少しだけ、温かい。
「一緒に探そう。僕も、ちょっと探し物があるんだ」
　落ち込んでいるレティを励ますように、そうゆっくりと呟く。その言葉にぱっと顔を上げたレティは、少し戸惑ったような表情を浮かべていたが、やがて小さく頷いた。
　僕はレティの表情が少しずつ綻ほころんでいくのを見て安堵し「行こう」と声を掛け、そっと手を引く。しかし、大きな看板を越えた先の道は、ここまでの真っ直ぐな道とは打って変わって、今は木の枝のようにわかれ、森の中をヘビのようにぐねぐねと迂う曲きょくしていた。
　どうしようかと足を止めた瞬間、またこめかみに小さな痛みが走る。

『──突然の事でした。母が、人が変わったように少女に冷たく接しはじめたのは』
『父が出かけたすぐ後に、無理矢理森の奥へと連れて行かれ、少女は母からこう言われました』
『お前の分の食料も、もうないんだ。家に、帰ってくるんじゃないよ』

「アレン、大丈夫？」
　レティの心配そうな声で、はっと意識を取り戻す。また、頭の中でまたあの声が聞こえた。レティの怪訝そうな表情を見るに、どうやら声が聞こえたのは僕だけのようだ。
「……大丈夫だよ。行こう、はぐれないようにしないとね」
　痛みに耐えようと無意識に自分のこめかみに添えていた手を離し、

レティの手を握り直す。僕達は曲がりくねった道を、直感を頼りに進んでいった。

「……私のお家ね、この森の奥にあるの。動物もたくさんいるし、空気もおいしいのよ。毎日お腹はすいてたけど、それでも大好きだったわ」
　ふいに、レティがそんな事を話し始める。
「……それって、傍に井戸があるお家？」
「そう！　それが、私のお家。そこにお母さん、お父さん、そして私とリックが住んでるの。……でも、お母さんは、本当のお母さんじゃないわ」
　タンスが話していたとおり、あれはレティの家族が住んでいた家だったのか。なら、やはり何かがおかしい——。違和感の正体が掴めずに、モヤモヤとする。
「本当のお母さんは、病気で亡くなったんだって。お父さんが言ってたの。それにね……いじわるをするから、今のお母さんはキライ」
　レティは酸味の強いグレープフルーツを食べたような、しかめっ面をした。
「前は、優しかったのに。急にいじわるになっちゃった。きっと、呪いをかけられて魔女になっちゃったんだわ。無理矢理私の手を引っ張って、暗い森の奥に置いていくもの。初めて置いてかれた時も、あそこでのどが渇いて、しようが無かったの」
　少しだけ、レティの手から温度が抜けて落ちていくように感じた。看板のところで蹲うずくまり震えていたのも、その時の事を思い出していたのかもしれない。
「でもね、辛い時、寂しい時、いつもリックが傍にいてくれて、お話ししてくれた。おはようからおやすみまで、ずっと傍にいてくれるのよ。いじめられたら、リックが私の仕返しをしてくれるし、とっても、とっても強い子なの」
　そう言った後に、レティが立ち止まり一点を見つめる。僕も足を止めてレティの視線を追うと、その先には手の届きそうな低い枝で休む一羽の白い小鳥がいた。
「鳥さんだ！」
　そう言うや否いなやレティは僕の手をぱっと離し、そちらに向かって駆け寄った。小鳥は逃げずに、大人しくレティに頭をなでられ気持ち良さそうに目を閉じている。僕もゆっくりとレティと小鳥に近づいた。
「あっちは同じ。でも、そっちは違う」
　……小鳥が喋った。しかし、タンスの時よりは意外性が無かったからか、今度は特に飛び跳ねて驚いたりしなかった。
「ん？　そうね、私はレティで、この子はアレンだから、違うね！」
　レティも夢の中の出来事と割り切っているのか、特に違和感はない

ようだ。そのまま小鳥と会話をしている。
「皆違うんだ。皆違って皆良い。でも、皆同じになりたがるよ。結局、同じになんてなれないのにさ」
　小鳥はそんな、よくわからない事を言った。レティも不思議そうな顔をしている。
「そう、同じ人間なんていない。似ていても、良く見ると違うんだ。でも、君は同じだね。不思議。……なんで？」
「……私？」
　今まで閉じていた目を見開いて、小鳥はレティへと問いかける。真っ黒でくるくるな瞳は、ずっと見つめていると段々と不気味に感じてくる。小鳥はそのまま、レティの手のひらから飛び立っていった。
「あっ、待って！」
　レティが慌てて小鳥を追いかけていく。……しまった、手を離してしまっていた。見失わないように僕も急いで後を追ったが、レティの方が足が速く、影は森の木々に紛れてどんどん小さくなってゆく。
　草木の揺れる音をたよりに進んで行くと、ようやく影が立ち止まっているのが見えた。僕も少しだけスピードを緩めて影へと近づく。
「……レティ？」
　━違う。
　目の前に立っていたのは、レティではなくリックだった。僕は確かに、レティの影を追っていたはずだったのに……。僕の中でぼんやりと生まれたひとつの仮説が、確信へと変わっていくのを感じた。
「どうしたの？　アレン、こんな所で」
「……レティはどこ？」
「レティなら、今おやすみしてるよ。この辺りは、木が多くて真っ暗だから。レティは暗い所、苦手なんだ」
　いつもと変わらない、淡々とした態度で僕の質問に答えるリック。
「レティと、君が隣に並んでいる所を見た事がない。レティはいつも一緒だっていってた。でも……あの家にはベッドは三つしかなかったよ」
　リックは、その質問には答えず黙り込む。違和感の正体が、やっと明確になる。
　━両親とレティ、リックが住んでいるなら、あの家にはベッドは四つ必要なはずだ。一つのベッドに二人で寝ていた可能性もあるが、あの大きさでは、子供二人でも厳しいだろう。
「うん、そうだよ。それであってる。……僕がこっちにいる時は、レティは僕の心の中でおやすみをしているから。反対の時も、そうだよ」
「……どうして？」
「レティは痛い事や、暗い所、色々苦手な事があるんだ。でも、僕は全部苦手じゃないから。だから変わりに、全部引き受ける。……きっと僕は、そのために生まれたから」
　俯いて、唇をギュッと噛み締める。リックが感情をここまで表情に出したのは、初めて見たかもしれない。……つまりレティとリック

は、別人ではなく、別人格だったのだ。
　しかし、施設にあるレティとリックの部屋には、しっかりとベッドが二つ置かれていた。その矛盾が、僕をモヤモヤとさせていたのだ。
「全部、あの魔女が悪い。全部全部全部……レティをいじめる、魔女に復讐をしないと。さっき先生に会った時、大人しくしてろって言われたけど。……それじゃ、ダメだ」
「リック？　……先生？」
　何かをしきりに呟き続きながら、リックの肌が、瞳が、紫色に滲んでいく。先生に会った、という事はここに先生もいるのだろうか？
僕はリックの肩を揺さ振って、もう一度話を聞こうとしたが、その手はあっさりと跳ね返されてしまう。
「……レティには、内緒だよ」
　もはやパーツもわからないほどにその顔は澱よどんでいたが、どこからか発せられたその強く、優しい声は、確かにリックのものだった。そのまま、おぼつかない足取りで、リックは森の中へと消えていく。

──追いかけないと。
考えるよりも先に、足が動いていた。夢の出来事のはずなのに、夢が覚めてもリックの顔があの紫色で澱んだままのような気がして。
心臓の音が速くなる。それに伴って、息も上がり、不安も大きくなっていく。
リックが魔女の元へ辿りつく前に、止めなくてはならない。早く、

早く、早く……！

「きゃっ！」
　森の道をがむしゃらに走り続けていたら、誰かにぶつかりその人物の悲鳴が聞こえる。リックに追いつけたのかと一瞬思ったが、目の前に倒れていたのはレティだった。
「あっ、アレン！　ごめん、鳥さん追いかけて、ひとりになっちゃって……ごめんね、大丈夫？　すっごく、つらそうだけど……」
　そう言ってレティは、膝に手をつき息を切らしている僕の頭を、座ったままなでてくれる。その瞬間、胸を締め付けられるような感覚に襲われた。……この気持ちは、なんだろうか。
「……リックもね、見つからないんだ。最近、ずっと、少しだけ、悲しそうにしてた。お話してる時は、楽しそうにしてるのに。……どうしてだろう」
　レティは、またしょんぼりして僕の頭に乗せていた手を自分の膝へと持っていく。
「ねえ、アレンには大切な人って、いる？」
　唐突に、僕に質問を投げかけてくる。その質問に答えようと、記憶を手繰り寄せてみるが、明確な答えを見つけることは出来ずに、そのまま黙り込んでしまう。
「……あっ、そうだ、アレン記憶が無くなってるんだっけ。……ごめんね、悲しい事、聞いちゃった。ごめんね……」
　申し訳なさそうに、再び僕の頭をなでる。ひとりの時は、絶え間なく湧き上がる虚無感に、ひたすら耐え続けているだけだったが、今はレティが傍にいて頭をなでてくれている。この光景にどこか懐かしさを感じて、僕は心に少し安らぎを得た。
「いいんだよ。ありがとう、レティ。……リック、探しに行かなくちゃね」
　僕がそう言って手を差し出すと、レティも大きく頷いて僕の手を取った。その手の温度は、最初に繋いだ時よりも随分と冷たく感じる。
「探し物かい？」
　唐突に、背後からそう囁かれた。悪寒が背中を走る。
「アレン、何か言った？」
「こっちだよ、こっち！」
　突然目の前に、フードをかぶった二足歩行の猫が現れる。
「君とは初めましてだね。ハロー、アリス。私はチェシャ猫だ。ご機嫌はいかが？」
「……？　私の名前は、レティよ。アリスじゃないわ」
　レティはチェシャ猫の言葉に小首をかしげながら、不思議そうに返答している。
「いいや、君はアリスさ。そっちの君もね。僕がそう言うんだか

ら！」
　チェシャ猫はそう言って、不気味な笑い声をあげた。
「君の探し物、さっきあっちで見掛けたぜ。随分美味しそうにしてたから食っちまいそうだったよ。だがまだ食べ頃じゃあないからな」
「私の探し物はリックよ？　リックは、食べ物じゃあないわ」
「そうだろうさ！　しかしそれは君達の話だ。しかも、二つ分あるなんてな。ワンロックトゥーバードって言うの？　こういう時ってさ」
　この猫は人を不愉快にさせる天才なのだろうか。僕はレティの手を半ば強引に引っ張って、チェシャ猫の横を通り過ぎた。
「おおっと、冷たいなあ。寒いなら、暖炉の前をオススメするぜ。シシシシ！」
　背後でチェシャ猫の笑い声が、森の木々を跳ね返ってこだまする。その声が聞こえなくなるまで、僕はレティの手を引き、足早に道を進んでいった。

「甘いにおいがする」
　しばらくして、レティがそんな事を呟いた。鼻先に意識を集中してみると、確かにお菓子のような、甘いにおいが僅かながら漂っている。
「こっちだ！」
「あっ、レティ！」
　僕の制止も跳ね除のけて、再びレティは駆け出してしまう。今度は見失わないように、こちらも全力で走った。長く走り続けられていたら最後まで追えるか不安だったが、意外にも目的地はすぐに近くにあったようだった。
「……お菓子の家だ……」
　レティは目を輝かせて、そう呟いた。目の前には、童話の『ヘンゼルとグレーテル』の中に出てくるような、全てがお菓子で出来た家が建っていた。先程よりも甘いにおいが強く漂っていて、自然と涎よだれが出てくる。
　レティはのどをごくりと鳴らして、真っ直ぐ進んでいく。僕もその後を追い、異様な存在感を放つその家にゆっくりと近づいていった。
　家の扉はチョコレートで出来ているようだった。手を乗せると、その温度でどろっと溶け始める。レティはそれを不思議そうに見つめながら、指についたチョコレートを舐なめている。僕はビスケットで出来たドアノブに手を掛け、家の扉を開けようと試みる。
「……あれ？　開かないの？」
　このセカイに来てから、どの扉もがそうだったように、一度ドアノブを回したくらいでは扉は開かなかった。ならば、とまた乱暴に開けようと考えたが、お菓子で出来た家は、普通の家よりも全体的に繊細なつくりをしており、なかなか思い切りがつかない。そうこうしているうちに、レティが僕に代わりドアノブに手を掛けて回す。扉はガ

チャリ、という音を立て、いとも簡単に開いてしまった。
「なんだ、開いてるじゃない！　ねえ、早く中に入りましょう！　ちょっとだけなら、食べたりしてもいいかな……」
　頬を緩ませて、何を食べようか、なんて声を弾ませるレティは、そのまま家の中へと飛び込んで行った。ここに来てから、彼女はずっと悲しそうな顔をしていたから、ここで少し休憩をしても良いかもしれない……。
　なんて、お菓子のように甘い事を考えていた時だった。
　レティが、ぴたりと立ち止まり、体を硬直させた。一体どうしたのかと横から覗き込むと、彼女の大きな目はさらに大きく見開かれ、小さなリボンは、また小刻みに震えだしていた。レティの視線の先を追うと、そこには、頭からつま先まで真っ黒な、人間のような「何か」が暖炉の前で、燃え盛る炎をじっと見つめていた。
「……なぜ、帰ってきてるの？」
　その黒い物体は、微動だにせずに、低い声で囁く。
「いつも、あなたが知らない道の奥へと置いていくのに。ここにいたって、私は貴方を大切にしないし、傷は増えるだけじゃない。なのに……どうして帰ってくるの？」
「ヤ……ヤダ、リック……た、たす……」
　リックの名を途切れ途切れに呼ぶレティの顔は蒼白で、目の前の「何か」にひどく怯えている様子だった。
　その黒い物体が、ゆっくりと振り返る。真っ黒だと思い込んでいたが、黒い塊かたまりの中心には、年老いた女性の顔のようなものが不気味に浮遊していた。
「また、その名前。リック、リックって。貴方はいつも、誰と会話をしているの？　ここには私と、夫と、貴方しかいないのに」
　年老いた女性は、目を細めてこちらを睨みつけると、最後に声を更に低くして「……気持ち悪い」と吐き捨てるように呟いた。
「！　……いるよ！　リックは、ちゃんと……なんで……どうして……」
　レティは膝から崩れ落ち、ガタガタと大きく震え始める。僕がレティの体を支えようと、背中に手を伸ばした瞬間、ピタリ、とレティは震えを止めた。
　──レティの肌が、瞳が、紫色へと澱んでいく。
　僕の体は、自然とレティから離れていった。
「……悪い魔女め。いつも、いつもいつもいつも、どうしてこんな事を！　レティは……僕が、守る！」
　目の前で立ち上がったのは、たしかに見た目はレティだったが、その声や口調はリックそのものだった。……レティを守るために、リックは助けにきたんだ。
「……！　このッ！」
　魔女、と罵ののしられた女性が大きなナイフを握った手を振り上げ、リックに向かって振り下ろす。僕は咄嗟にリックを押し退け、魔女の体を暖炉に向かって押していた。

炎が、魔女と一体化して大きく、赤く膨ふくれ上がる。
　鼓こ膜まくが破れそうなほどの金切り声が、耳を劈いた。耳を両手で塞いだが、その声は耳以外からも僕の体へと侵入してくるようだった。
「……リック？　……オ、オカア……サッ……」
　紫色に澱んだレティが、魔女の後を追いかけるように暖炉へと近付く。炎は、その勢いをさらに増しているようだった。レティが危ない、そう思い手を伸ばした瞬間、大きな頭痛が僕を襲った。

『──森は暗く、帰り道もわかりません。少女は、ゆっくりと目を閉じて考えました』
『どうして？　私が、弱いからかな。だから、私の分のご飯はないのかな』
『そう、ゆっくり呟くとひとりの少年が少女に話しかけました』
『──僕が強くなるから、君は弱くていい──』
『少女はたいへんおどろきました。そして、そう、そうなのねと言って、そのまま眠りにつきました』
『──少女は、自分と向き合う事を放棄しました』

　──気がついた時には、魔女も、レティも、リックもいなくなっていた。
　ただあるのは、僕の目の前でまるで水を得た魚のように飛び跳ね、大きな唸り声をあげる炎だけだった。
「なんで……」
　状況が飲み込めずに、ただ呆然と立ち尽くす。僕の足元に、何か小さなものががキラリ、と炎の光を受け赤く輝いていた。よく見ると、それはカギの形をしている。
　探していた時にはあんなに見つからなかったのに。憎悪に似たような感情が心の内から湧き上がってくる。炎が暖炉から溢れ、やがて甘いお菓子の家を──全てを焼いていく。
　夢ならば覚めて欲しい。そんな事を祈りつつ、僕は足元に落ちていたカギに触れた。

『──あら、アレン。また寝室に、本を持っていくの？』
『うん、すごく気になる所で今止めちゃってるんだ。このままじゃ、眠れないよ』
『あらあら、うふふ。でも、早く寝ないと朝起きれないわよ。……おやすみ、アレン』

　──次第に意識が吸い込まれていき、僕は再び暗闇に全身を放り出されていた。今のは、僕の記憶なのか？　おやすみと言って、僕の額にキスをしてくれた女性を僕は知っている。

そうだ、あの人は、僕の━。

　2

　ここにも、夢を壊すヒントはなさそうだった。焦げ臭いにおいが鼻につく。
「……ここは、彼女と初めて出会った時の記憶かな」
　先程までいた場所は、ここよりも過去のセカイらしかった。下手に触れればあの光景をもう一度見せてしまうことになる。彼女はまだ幼い子供だ。あの過去とはまだ、向き合う事は出来ないだろう。
　彼女……レティ・エーメリーとの出会いは、この森の中だった。
　その日、僕は恩師、リーヴィス先生の家を訪ねるためにこの森の道を歩いていた。やけに焦げ臭いにおいがして辺りを見回すと、前方に黒煙が立ち上っているのが見えた。いつもは静かな森が、異様にざわめいていたのを覚えている。妙な胸騒ぎを感じて、僕はその黒煙が見える方向へと急いで向かった。
　その煙が徐々に濃くなりはっきりと見えるようになるにつれ、誰かの泣き声も段々と大きくなっていく。黒煙を発している根本を見つけたと同時に、泣き崩れている彼女を発見したのだった。
　彼女の目の前で、一軒の家がおぞましい音を立てながら炎に飲み込まれていた。火は周りの木にも燃え移り、段々と侵食していっている。このままでは彼女もいずれ飲み込まれてしまうかもしれないと考えた僕は、彼女に声を掛け、一時的に施設へと連れ帰る事にした。
　施設で警察や消防署に連絡をした後に、リーヴィス先生には『数日はそちらに伺えない』と一報を入れた。
　後日、警察から聞いた話によると、彼女はあの家に住んでいた夫婦の一人娘らしかった。しかし、焼け跡からは誰の遺体も見つからなかったとも聞いた。ならば、夫婦はどこへ消えたのだろうか。
　彼女に話を聞こうとしたが、まだ自分が今どんな状況に置かれているかを飲み込めていないのか、とても話ができる様子ではなかった。
　しかしその日の夜、彼女の様子を見に行った時、彼女は昼間とは違う雰囲気を纏まとっていた。話し掛けてみると、僕は彼女とは違う人物だ、と答える。
「……レティは、暗い所が苦手だから。そういう時は、レティをおやすみさせて僕が交代してこっちに来るんだ」
　この時に、彼女の名前、そし彼のリックという名前を聞いた。リック君は僕の質問に、丁寧に答えてくれた。話してくれた内容から察するに、リック君は、母親の虐待から自分の身を守るために、レティ君が作り出した別の人格なのだろう。
　ただ、レティ君にその事を確認すると、彼は別の人物で、ちゃんとここにいるんだ、と強く否定されてしまった。
「……お母さんがいじめる時は、リックが守ってくれるの。でも、リックがおやすみをしている時に森に連れて行かれたわ。一回目は、リックがお家まで送ってくれた。二回目は……リックがいなかった

の。お日様が昇り始めたから、今度は私がリックをお家まで送る事にしたわ。でも帰ったら……お家、燃えてた」
　ゆっくりと僕に話をしてくれたが、その時の光景を思い出してしまったのか、また顔が強張り、恐怖に支配されてゆく。震えだす体をそっと抱き寄せてあげたら、彼女は安心したように瞬まばたきをした後、また僕にゆっくりと話し始めた。
「一回目に置いていかれて、お家に帰った後にね、お家にあった物がどんどん無くなっていったの。私やリックの物は、とられたりしてなかったけれど」
「……それは、大きな物かい？　それとも、小さな物？」
「どっちも。食べ物とか、指輪とか、フライパンとかも」
　彼女の家は、随分と貧しかったようだった。
　──いらない物を売ってお金に換え、それで食い繋いでいたのだろうか？
　しかし、彼女やリック君から聞いた話をまとめれば、子を捨てて夫婦で夜逃げをした、と結論付ける方がいくらか辻つじ褄つまが合う。
　ただ、レティ君曰く、母親も以前までは実の子でもない彼女に優しく接してくれていて、急に人が変わったように態度が冷たくなった、という。なんのきっかけも無く、突然態度が変わる事などあるのだろうか。違和感が残る。
　──それとも、以前から彼女に対して不満を抱いていたのだろうか。
「そうだ……笑い声、ヘンテコな、笑い声が聞こえた気がするの。ウッシッシみたいな」
　……笑い声？
「少しだけしゃがれたような、頭に焼きつくような声だったかい？」
「うん、そんな感じ。その笑い声は、覚えてるわ」
　ぼんやりとしたまま、彼女はそう答えた。そのまま眠そうにあくびをしたので、昼寝をして良いよ、と僕のベッドを貸して寝かせる。
　……こんなタイミングの良い事があるのだろうか。しかし、どこか躊躇いのようなものも僅かながらにある。僕は、どうするべきなのだろうか……。

⚷

「先生！　手帳書いた！」
　ある日、そう言って背後から彼女が僕に飛びついてくる。勢いをつけて飛び込んできたので、小さく唸り声を上げてしまった。
「……リック君のはどうしたんだい？」
「あっ！　あれ？　んーと……あった！　ポケットに、入ってた！」
　そういって彼女は、赤紫色の手帳を二つ、満面の笑みで僕に手渡した。
「ありがとう。もうすぐ寝る時間だから、あんまりはしゃぎすぎないようにね」
「わかったわ！　先生も、早くおやすみしないとダメよ！」

ぱたぱたと、軽やかな足音を立てながら僕の部屋から出て行くレティ君の後ろ姿を見送る。あの後、両親も見つからず他の親族からの連絡もない、という報告を受けた僕は、結局レティ君をそのまましばらくこの施設で預かることにした。レティ君の方は少しずつではあるが、元気を取り戻している。だが、リック君の方は手帳の内容から、随分と思い詰めている様子だった。

　わたしね、しってるの。おかあさんも、おとうさんも、おうちも、どうしてもえたのか。でもね、わたし、いわないわ。リックが、もっとかなしんじゃうから

　レティ君の手帳の一番新しいページには、こう書かれていた。少しだけ紙が歪み、文字が滲んでいる部分がある。彼女の両親はあの家と共に燃えた訳ではなく、行方不明なのだという事は未だ伝えていない。
　……まだ、伝える訳にはいかなかった。
　レティ君は、リック君が自分の代わりに復讐をしたのだと、あの魔女を家ごと燃やしてくれたのだと、一度僕に話をしてくれた。しかし、リック君に話を聞いた時、彼と彼女の間では色々と行き違いが生じていることに気がついた。
　彼は二回目の置き去りの時に、夜に目覚めて一度家に戻っており、その時すでに、家の中には誰も居なかったそうだ。彼女がここで目を覚ませば、自分が両親に捨てられたとのだと否が応でも知ることになる。そうなってしまえば、彼女自身が一番悲しむだろうと思い、火を放ち全てうやむやにしてしまおうと考えたのだという。
　この話を聞いた時に、彼女の両親は彼女を捨て、どこか遠い場所へと夜逃げをしたのかもしれない、という仮説が僕の中で確信に変わった。そして、そうなるように仕向けたのはきっと……。

　舗装されていない、でこぼこな道を転ばないように慎重に歩いていく。これ以上、他に何か出来そうな事は無かった。ちょうど目に入った切り株に腰を下ろす。
　リック君は、彼女を母親の虐待から守るために生まれた。だが、その母親はもう彼女の傍にはいない。彼の心が壊れ始めた原因は、きっとそこにあるのだろう。
　彼の手帳の、一番新しいページを思い返す。

　ぼくがぜんぶひきうければ、あのこはずっとわらってます。ぼくは、あのこがすきです。でも、ぼくはなぜうまれたのですか。
　先生は、ベッドもふたつ、ぼくのふくもよういしてくれました。でも、これでただしいのですか。ぼくがいるから、いけないのでしょうか。

先生、あのこはあのこだけど、ぼくはだれなのでしょうか？

「……何と答えるべきたったんだろうな」
　きっと彼は、自分がいる事によって彼女が自分と向き合おうとしなくなる事を危き惧ぐしていたのだろう。自分の髪の毛をくしゃっと掴む。無事に帰れたら、ちゃんと返事をしてあげなくてはいけない。そうだな、もし……。
　思考を巡らせていると、突然獣のうめき声のような地鳴りが響いた。
「……何だ？　セカイが……崩壊し始めている？」
　おかしい、セカイが壊れるという事は、このセカイを作り出した主が壊れてしまったということだ。僕はここに来る前にリック君に会い、その時「ここから動かないでくれ、あまり動き回ると君も彼女も危ないから」と伝えた。彼は約束を破るような性格ではない。ならば何かの拍子で人格が彼女に代わってしまい、あの光景を再び見てしまったのだろうか？
　地面が割れ、そこから黒いモヤが溢れ出し僕の足を引っ張る。されるがままに、そのモヤへと体を預ける。彼の……彼女の崩壊を止める事が出来なかった。
　そのまま僕は、暗闇に沈んでいく。その内、意識ごと飲み込まれていった。

　３

「おや、無事に帰ってこれたんですね。……どうして泣いているのです？」
　そんな事を聞かれたって、僕にもわからなかった。この感情が、何という名前を持っていたのかさえ忘れてしまっているような気がした。
「ちゃんとカギの回収も出来ているようですね。お疲れ様です。あれ……回収できたのはこのひとつだけですか？」
「……チェ……いや、アイツが、一つのセカイに一つずつばら撒いたって言ってたよ」
　チェシャ猫、という名前を口にしようとした所でシロウサギがまるで刃やいばを向けるように僕を鋭く睨んできたので、慌ててその名前を伏せる。
「一つのセカイに一つずつ……また面倒な。何故、こんな時間の掛かるような事を……」
　僕の回答を聞いたシロウサギは、鬱屈そうに目を細めた。
「……いえ、一つ回収できただけでも良しとしましょう。次の扉のカギも開けておきますね」
　どこかから、ガチャリ、と解錠音が聞こえた。また僕に、あんな所へ行けというのか。その場に踏み止まっていると、シロウサギが僕を

急せかすようにコツコツと靴を鳴らす。

「……大丈夫ですよ、夢なんですから。覚めたら元通りです。その感情も、先程見た光景も全て幻まぼろしですよ？　貴方だって、最初にそう思っていたでしょう」

　僕との距離を縮めず、今までに聞いたなかで一番優しい声で、シロウサギは僕にそう語りかける。夢だとは思っていたが、湧き上がる感情や、あの炎の情景などがやけに生々しく記憶に焼き付いている。夢とはこういったものだっただろうか。

　しかし、あのカギに触れた瞬間に少しだけだが、僕はあの日の記憶を取り戻した。あの時、おやすみと言って僕の額にキスをしてくれたのは確かに──僕のお母さんだった。

　また別のカギに触れれば、僕はもう少し先の記憶まで取り戻せるかもしれない。そんな期待が、僕の足をセカイへとまた誘いざなおうとしている。

「そういえばシロウサギさんって、ここで何をしているんですか？」

　ふと、そんな疑問を口にしてみる。

「……僕は、ここで何もしていませんよ。それが普通です。だって、面倒じゃないですか。時や事は、決まった流れに沿って進んでいるんですから、わざわざ流れに逆らって何かをする必要もないでしょう」

　つまり、ずっと長い時間ここに留まり続けているということなのだろうか。そちらの方が色々と面倒で辛いのではないか、とも思ったが、そういえばここの住人はどこかおかしいのだと思い出す。

「それでは、次も宜よろしくお願いしますね」

　僕は小さく頷いて、また次の扉へと向かう事にした。

「セカイのルールってのはな、アイツが勝手に作ったんだよ。セカイを作ったヤツが潰れちまえば、セカイも壊れちまうとかな」

　二番目の扉を開けようとした瞬間、突然目の前にチェシャ猫が現れ僕に話し掛ける。危うくぶつかりそうになり、肝を冷やした。あの得体の知れない物体とぶつかる──考えるだけで背筋が寒くなる。

「俺はそんなモン作らないさ。でも、アイツはそれじゃ時間が掛かるとか言って！　勝手に、ルールを作りやがった！　ああ！　だが僕らはルールに従うしかない……」

　チェシャ猫が嘆くように、両前足で顔を覆う。しかし、その下では耳にまで届きそうなほど口が吊りあがっているのが手からはみ出して見えていた。

「じゃないと、罰が与えられるからな」

「……何か用？」

　制止しなければ、このまま延々と話し続けるのではないかと思い、湧き上がる嫌悪感を必死に押し隠し、やんわりとチェシャ猫に語りかける。

　僕から声を引きずり出せた事に満足したのか、チェシャ猫は目を丸

くして、さらに口角を釣り上げた。
「なんだい。たまには、こうして雑談したって良いだろ。ネコっていうのは、寂しいと死んじゃう生き物なんだぜ。……いや、ネコじゃなくてヒトだったかな？」
　おどけたような声を出し、僕の次の手を伺っている。どうせ真面目に何かを言った所で、またひらりと回避してさらにからかってきたりするのだろう。きっと、疲れるだけだ。
「随分と悲しそうだね。出会ってちょっとのヤツの事なんか、そんなに気にする必要なんてないぜ。いや……感情なんてモンも全部忘れちまってるのかな？」
　返す言葉も無かった。実際に僕の事を、僕自身が未だに理解しきれていないのだ。
「ああ、なんでわかるのかって？　そりゃ、俺が奪ったんだからな」
　突然、とんでもないことを告白し始めたチェシャ猫に、絶句する。
「あの日の事だって、その前の事だって全部知ってるさ。当然、返してやるつもりはなかったが……カギを見つけた時の特別ボーナスとしてつけてやったからさ。後は、わかるだろ？」
　段々と調子づいていくチェシャ猫とは対照的に、僕の調子はどんどんと暗い底へと引き込まれていく。アイツは、人がこうなっていく所を見て、楽しんでいるのだろうか。
「本当に、オマエの中は空っぽなのか？　……まあ、早々に潰れてしまわない事をオイノリしてやるぜ。そんじゃ、良い夢を！」
　気がついた時にはもう、目の前にチェシャ猫はいなかった。どっ、と汗が滲み始める。
　しかし、早く次へと行かなければ。シロウサギでもなく、チェシャ猫でもなく、僕自身が一番そう急かしているように思えた。
　あの日、あの時何が起きたのが。僕は何を見て、何を失ったのか。ただ、真実が知りたかった。取り戻したかった。これが本当に夢なのかどうかなんて疑問は、既に頭の片隅にへと追いやられていた。
　呼吸を整える。そのまま僕は、二番目のセカイへの扉を開けた。

わたしのおうちは、もりのおくにあります。
どうぶつもたくさんいるし、くうきもおいしいわ。とてもいいところなの。
かぞくは、おかあさん、おとうさん、あともうひとり。
そのこはいつもいっしょにいてくれる。おはようから、おやすみなさいまで。
でも、いっしょにおにごっことかしてあそべないのはちょっとざんねんね。

ぼくのかあさんは、ほんとうのかあさんではありません。
ほんとうのかあさんは、びょうきでなくなったとききました。
いまのかあさんは、よくあのこにいじわるをします。
だから、ぼくがそれをひきうけます。
つらいことはぜんぶひきうけます。
でも、たたかれたりすると、ぼくはあのこをまもれません。

あるひ、おかあさんがさんぽをしましょうって、いったの。
わたしはいやだったけれど、てをむりやりひっぱられてもりへつれていかれたわ。
いつものように、たくさんあるいてからおかあさんがきゅうけいしましょうっていったの。
あなたはここにいてね、っていわれたから、ずっとそこにすわってた。
くらくなってきた。こわい。まっくらになっちゃった。
こわい、こわい、だから、めをとじてそのことおはなしした。
なまえ、すきなたべもの、にがてなもの。
おどろいたわ、わたしとまったくにてないのね。

ここは、もりのおくか。
かえろう。ぼくはだいじょうぶだけど、あのこはくらいところはにがてだからな。
またきもちわるいっていわれるのかな。
あのまじょは、どうしてあのこをあんなにいじめるんだろう。
わるいまじょは、やっつけないとな。

おなかがすいたわ。おうちやおようふくが、あまいおかしになればいいのに。
そうすれば、かぞくみんなごはんがたべられるわよね。
・・・・・・ああ、でもチョコレートはすぐにとけちゃうわ。だめね。
ぜんぶ、もえちゃった。

ぼくがぜんぶひきうければ、あのこはずっとわらってます。
ぼくは、あのこがすきです。

でも、ぼくはなぜうまれたのですか。
　先生は、ベッドもふたつ、ぼくのふくもよういしてくれました。
　でも、これでただしいのですか。
　ぼくがいるから、いけないのでしょうか。

『先生、あのこはあのこだけど、ぼくはだれなのでしょうか？』

第三章　あかいろ

1

　二番目の扉を開けたその先にあったのは、また見慣れた部屋だった。どうやらセカイの扉の先は、あの施設にある部屋を模した場所に繋がっているようだった。既視感のある大量のクマのぬいぐるみが、僕を見つめている。
「……あ、あ……アリス君？」
　狂気的な量のクマに目を奪われてしまっていたが、部屋の中心に佇たたずむ人物に呼び掛けられ、そちらに視線を移す。赤いポンチョとふんわりとしたバルーンスカート。白いフリルのついたエプロン。明るめの茶色の髪を二つに結ぶ真っ赤な丸い髪飾り。──目の前に立っていたのは、チェルシーだった。
「……あ、あ……」
　何かを言いたそうにしているが、続けて言葉を発する事が出来ていない。いつも以上に口下手な印象を受ける。
「一緒に、遊ぶ？」
　何を言おうかと考えあぐねているチェルシーに、僕から遊びに誘ってみる。チェルシーは僕の声に驚いて、いつも以上に甲高い声で小さな悲鳴を上げた。
「えっ、えええええと、えと、……うん。えっと」
「何して遊ぶ？」
「……クローゼット、開ける？」
　レティの時と同じ返事が返ってくる。僕は「いいよ」と返事をし、彼女をじっと見つめてみる。その目は、異常なスピードでぐりぐりと回っていた。
　僕は彼女から急いで目を逸らすと、クローゼットへと視線を移す。扉の隙間から、花のようないい香りが漏れ出している。その香りは、僕の気持ちを少しだけ落ち着かせた。
　扉に手を掛けると、僕の心はそのまま、クローゼットの中へと引きずり込まれていった。

　布団の温度が、とても心地良い。窓からは日が差し込んでいて、さらにその温度を高めている。このまま眠りについてしまおうか、なんて考えが頭を過よぎったが、頭を振って無理矢理体を起こす。今は夕方なのだろうか、部屋は綺麗なオレンジ色に染まっていた。
　部屋には先程までいた施設内のチェルシーの部屋ほどではないが、多くのクマのぬいぐるみが行儀よく座っていた。抱き上げてみると、ふわっとしていてとても軽い。どうやら手作りのぬいぐるみのようだった。
　抱き上げたクマを元の場所に丁寧に戻してから、部屋を一通り探索してみたが、特に気になるものは無かった。ぬいぐるみから察するに、おそらくここはチェルシーのセカイだと思うのだが、彼女がいる

気配もない。
　部屋の扉へと近づき、ドアノブを回してみる。レティのセカイでのことを思い出して少しだけ身構えたが、軽く回しただけでガチャリと解錠音が鳴ったので、拍子抜けしてしまった。
　扉の向こうは、ダイニングルームのようだった。森や花を思い出させる、良い香りがする。横を見ると、今までいた場所の隣室に向かう扉があった。隣室は後で調べることにして、そのまま部屋の隅に視線を向けると、狩猟の道具だろうか。弓矢や銃が、異ような存在感を放ちながら立て掛けられていた。強そうだ……。
　反対側の隅に置かれているタンスを調べてみる。引き出しを開ける前に、叩いたりつついたりしてみたが特に反応をする様子は無い。このタンスは喋ったりはしないらしい。
　引き出しの中には、何通かの手紙が仕舞われていた。その内の一通を手に取り、少し気が咎とがめたが、どうせ夢の中の出来事だ。見たところで何も問題ないだろう。そう思い直して、封筒の中身を取り出す。その内の一通を手に取り、中の便箋を取り出す。

『おてがみ、ありがとう。おかあさんは、だいじょうぶかな。きみも、あまりむりをしないように。こまったことがあれば、おとなをたよってください』
『おかあさんには、おせわになったから。よければ、またごあいさつができればうれしいです。それじゃあ、おかあさんによろしくつたえておいてね』

　その便箋には優しい口調で、文は丁寧に一文字ずつ大きく書かれていた。最後の挨拶の下には既視感を覚える奇妙な物体と、なぞなぞのようなものが書かれている。
　他の手紙も、同一人物とやり取りをしているものばかりだった。一番新しい手紙の内容ではお母さんに会いにこの家に来る、という約束がされていた。ここがチェルシーの家だとすると、「お母さん」とはチェルシーの母親の事だろう。—カギ探しには関係は無さそうだと判断し、便箋をそれぞれ元の封筒へ戻してから、引き出しの中へ仕舞った。
　先程までいた部屋の隣室に繋がる扉へと向かう。この部屋の扉も、悩まされたりするような事は無くすんなりと僕を受け入れてくれる。レティのセカイでは、無理矢理こじ開けなければ入れなかった。—この違いは何なのだろうか。
　扉を開けた瞬間、強烈なにおいが一瞬にして鼻孔から全身へと駆け巡る。こんなにおいは、僕の記憶のどこにも存在しない。反射的に、僕は片手で自分の鼻をつまんだ。あまりの衝撃に、今さっきまで考えていたことも、たちまち消えてしまった。
　部屋の奥を見ると、一人の少女が小さなテーブルに向かっていた。少女の背中越しでは、何をしているかまでは確認が出来ない。ゆっくりと、テーブルに近づいて行く。一歩進むたび、そのにおいはさらに

過激さを増していた。
「チェ、チェルシー……うっ、な、何してるの？」
　話しかけた瞬間、口からもそのにおいが体へと入り込んできて咽むせてしまう。テーブルに向かっていた少女──チェルシーは、話し掛けるまで僕の存在に気がついていなかったらしく、勢いよくこちらを振り返ったと同時に椅子から転げ落ちてしまった。
　慌てて起き上がろうとするが、よほど混乱しているのかその手足は空を切るばかりだ。僕が手を差し出すと、彼女はかあっと頬を赤く染めて、おそるおそる僕の手を掴み、ようやく体を起こす。その時に何かぽつり、と呟いたが声が小さくて聞き取る事は出来なかった。もしかしたら、ありがとう、と言っていたのかもしれない。
「チュウ……」
　どこからか小さな鳴き声がした。声の方向へ視線を落とすと、机の上で小さなネズミが弱々しく鳴いている。その隣には、薬品のようなものが入ったビンが、いくつか置かれていた。
「……動物実験？」
「あっ、ちっ、違うのアレン君。この子、お腹が痛そうだったから、腹痛に効くお薬を作ろうと色々混ぜてたんだけど……上手くいかなくて……」
　室内に充満している謎の刺激臭は、チェルシーが調合したという薬品が入った真ん中の容器から発生していたようだ。容器の中の液体は名状し難い色をし、ぶくぶくと怪しげな気泡も多数生じていた。
「これ、飲ませるの？」
「こっこれは失敗したやつだからダメ！　飲んだら、爆発しちゃうから！」
　チェルシーが慌てた様子で、両手を必死に振る。そんなに否定しなくても、この見た目では飲むには少し……いや、かなり躊躇うだろう。ネズミが人間と同じ判断をするかまでは、僕にはわからないが。
「こ、これ、捨ててくるね。ずっとここに置いてたら、お部屋が変なにおいになっちゃうから」
　そう言って、チェルシーは僕の手から謎の液体を奪い、そのまま部屋を出て行った。
　先程から気になっていたが、チェルシーはこのにおいは平気なのだろうか。……慣れてるのかな？
　においを発していた根源が消えても、既に部屋中に広がっていたにおいは相変わらず僕の鼻を刺激してくる。においを追い出そうと、窓の方へと近づき外を見てみると、ぞっとするくらい真っ赤に染まった空が広がっていた。今度は割らないように、慎重に窓を押す。生暖かい風が頬を掠かすめて部屋の中へと入り込んでくる。
　やがて部屋に居座っていた刺激臭は、いつのまにかやわらかい花の香りと入れ代わっていた。そのまま無心で風を受け止めていたら、チェルシーがぱたぱたと足音を鳴らしながら戻ってきた。
「ふう……あれ、アレン君どうしたの？　窓、閉め切ってたから暑かった？」

「ううん……なんでもない。それより、薬を作らなきゃいけないんでしょ」
　ぼーっとしていた姿を見られてしまい、少しだけ恥ずかしい。誤魔化すように慌ててチェルシーの方を振り返って、返事をした。
「あっ、そう……ネズミさんの。お腹のお薬はね、この透明なお薬に三つの色のついたお薬を混ぜるんだけど、おばあさんのメモ、難しい字で書いてあって読めなくて……」
　チェルシーから一枚のメモを受け取る。そのメモには、癖のある字で薬を作るための手順が記されていた。
「合ってるかは不安だけど……青色、黄色、赤色の順番かな」
　何とかメモを解読して、チェルシーに伝える。彼女は顔をぱあっと明るくして、僕にお礼を言って机に向かう。そして僕が伝えたとおりに、透明な液体に色のついた薬品を投入していった。
「おばあさんの字、読めないの？」
「んん……えっと、いつもは隣で教えてくれるから……字、まだ読んだりするの私苦手だから、一人の時はあんまりお薬に触っちゃいけないよって言われてるの」
「……今は、いいの？」
「ダメって言われたけど……やらないと、ネズミさんがかわいそうだから」
　少しだけ複雑そうな面持ちで、薬を慎重に混ぜる。先程「飲んだら爆発する」なんて言われたが、今この瞬間もチェルシーの手元が狂えば粉こな微み塵じんにされてしまうのだろうか。そう考えると、くるくると回るチェルシーの手元を見ているだけでなんだかドキドキしてきてしまった。
「出来た！　ああ、良かった。ネズミさん、このお薬を三回に分けて飲んでね」
　ネズミはこくり、とその青い顔を小さく上下に振り、小さな容器に移された薬を受け取る。三回に分けて飲まなければ、このネズミはどうなるのだろう……僕の頭は、ほぼそんなくだらない心配事に支配されていた。
「ああ、ありがとう。すっかり良くなったよ。おばあさんのお薬は、すごいね」
　目の前のネズミは当たり前のような顔をして、僕らと同じ言葉でお礼を言った。僕は驚きはしなかったが、チェルシーは目を大きくして僕の後ろへと隠れてしまった。
「じゃあ、僕も自分のお家に帰るね。ばいばい」
　そう言って、ネズミは机から飛び降りそそくさと何処かへ消えてしまった。
「な、何だったのかな……ネズミが喋るなんて、絵本か夢の中のお話だよね」
「これは、夢じゃないの？」
「えっ？」
　チェルシーは驚いた顔をして、僕をじっと見つめた。

「夢だよ。だから、大丈夫」
　僕は自分自身にも、そう暗示させるように呟いた。実際にどうなのかは、わからない。しかし、その疑問も今の僕にとってはあまり大きな問題では無くなっていた。彼女も納得したようで、徐々に体の強張りを解いていく。
「そっか……ここね、私のお家なんだ。少し違う所もあるけど、タンスの中身も、ベッドの温かさも同じだったから、帰ってきたのかと思っちゃった」
　緊張が解けると、今度は急に恥ずかしくなってきたのか、僕の背中からそっと距離をとりつつ、彼女は小さな声でそう言った。
　そういえば、レティも先ほどのセカイで似たようなことを言っていた……そんなことを考えていると、再び窓から柔らかな風が吹き込み頬を撫でた。
「……ここの窓から入ってくる風は温かくて、とても気持ち良いな」
　ふと零した僕の言葉に、チェルシーはぱっと顔を輝かせる。
「あっ、この時間ね、窓からお日様の光が入ってきてとても温かいの。お部屋もオレンジ色になって、綺麗だよね」
「うん、そうだね。……ほんのりと甘く感じるこのにおいは、花の香り？」
「そう！　お家の近くにね、お花畑があって、色々な種類の花が沢山咲いてるの！　えっと……一緒に、見に行ってみる？」
　チェルシーは遠慮がちに、僕を外へと誘う。この部屋にカギがあるかどうか、まだあまり調べていなかったが、僕はひとまず彼女の誘いに応じる事にした。花畑は近くにあるそうだし、必要であれば、またここまで戻ってきて調べればいいだろうと考えたのだ。
　ダイニングルームを経てチェルシーと外へと繋がる扉に向かう。僕が扉を開けようとドアノブを捻ると、少しだけ掠れたような音を出すだけで開かなかった。何度か軽く捻ってみたが、同じような結果だった。レティのセカイでは、ほとんどの扉がこの調子だったが、このセカイで扉が開かないのは初めてだ。
「あれ？　……開かないの？」
　力任せに開けるべきか悩んでいると、チェルシーが僕に代わってドアノブを捻る。すると、まるで彼女を待ち構えていたかのように簡単に扉は開いた。隙間からは、生暖かい風と共に先程よりも強い花の香りが入り込んでくる。
「あれれ、開いてる……よね？　ちょっと壊れちゃってたのかな。私のお家、結構古くからここにあったらしいから」
　僕が驚いた顔でチェルシーの手元を見つめていると、彼女は特に気にした様子もなくそう言った。しかしここの扉以外は、どの扉も普通に開けることが出来ただけに、立て付けの問題ではないように感じる。……何か条件のようなものがあるのだろうか？
　首を捻っていると、チェルシーが袖を引っ張る。僕は考えを中断し、その催促に素直に従う事にした。
　外へ一歩踏み出し空を見上げると、太陽は想像以上に赤く光り輝

き、空全体がその光に包まれているかのようだった。
「今日のお日様はいつもよりちょっとまぶしいね」
　チェルシーもそんな事を呟きながら、目の少し上辺りに片手を当てながら空を見上げる。彼女の幼い横顔は深い赤い色に染められ、白いエプロンがついたバルーンスカートもいつも以上に赤い色を際立たせていた。
「……この色のお空は、キライかな」
　しかめっ面をしてそう言うと、チェルシーはすぐに目線を落とす。それから「早く先に進もう」とまた僕の袖をぐいぐいと引っ張った。
「あれ、野菜？」
　ふと視界に入った畑が気になり、袖を引くチェルシーの手を止める。
「えっ？　あ……うん、買い物は外の街にまで行かないとダメだし、街は遠いから食べるものはなるべく自分たちで育てようって、今は確か……きゃっ！」
　チェルシーが戸惑い気味に、今畑で育てている野菜を指差して説明をしようとした瞬間、彼女の指先に一匹のミミズが絡からみついた。
　小さく悲鳴を上げた彼女は咄嗟に僕の方へと倒れ込み、そのまま二人で尻もちをついてしまった。
「あっ……ご、ごめんアレン君！　手、握っちゃって、て、て……」
　しりもちをついた瞬間に、僕の手の上にはチェルシーの小さな手が置かれていた。少しだけ冷たい、その手を慌てて僕から離す。彼女はよほど驚いたのか、先程からずっと呂ろ律れつが回っていない。
　僕はチェルシーに放り出され地べたでうねうねとしていたミミズをそっと畑へと帰すと、立ち上がってチェルシーへと手を差し出す。彼女は振り回していた手足を一瞬止め、じっと僕の目を覗き込む。理由はわからないが、何かに怯えているような、緊張した面持ちだった。
「お花畑、行くんでしょ。早くしないと夜になっちゃうかもしれない」
　さすがに夜になることはないと思うが、わざと大げさにそれらしい理由をつけて、彼女の手を握る。躊躇う仕草を見せながらも、彼女は僕の手に促されて立ち上がり、自分の服や足についた土を丁寧に払った。
「……ここをね、ずっと真っ直ぐ行けばお花畑に着くから」
　そのまま後ろへ回り込んだチェルシーは、僕の服の裾を掴む。服の袖や、裾を掴むのはチェルシーの癖なのかもしれない。彼女に示された道を真っ直ぐ進んで行こうとしたその瞬間。
　あの時と同じ痛みが、あの時よりも強く響く。

『──とある花畑の近くに、白い家がありました』
『白い家には母親、父親、そして少女が住んでいました。父親は家に帰ってくることはほとんどありません』
『母親は年をとっており体が弱いため、少女はかわりに色々な事をしました』

「……ン君？　……アレン君、大丈夫？」
「えっ？　ああ、ごめん。大丈夫」
　気がついた時には、チェルシーが僕の背中をさすってくれていた。知らないうちに蹲うずくまっていたらしい。
「体調が悪いなら、無理して行かなくても大丈夫だよ」
「ううん。本当に大丈夫だから。行こう」
　僕は立ち上がると、二、三歩歩いてチェルシーを急かす。彼女は何がなんだかわからない様子だったが、もう一度名前を呼んで促すと、躊躇いながらもそっと僕の服の裾を掴んだ。
　僕たちは、二人で花畑へ繋がる道を歩き始めた。

⚷

「あっ、アレン君、あそこだよ！」
　しばらく進んだところで、チェルシーが嬉しそうな声を上げる。彼女が指差した方向へと視線を移すと、そこには、色とりどりの花が絨じゅう毯たんのようにぎゅうぎゅうに敷き詰められた花畑があった。ふわりと風が吹くと、様々な花の香りが一気に僕の体中をすり抜けていく。
「あれ？　このお花もこっちのお花も、今の季節には確か咲いてないハズなんだけど……そっか。夢だから、こんな事もあるんだね」
　そう言って、チェルシーは小さめの花を一輪ずつ丁寧に手た折り、輪になるように括くくっていく。しばらくその光景に見とれていると、気がついた時には彼女の手元にひとつの花はな冠かんむりが携えられていた。
「はい、アレン君。春から冬までに咲くお花を全部一つにできるなんて、ちょっと贅沢な感じだよね」
「えっ……僕に？」
　突然、甘い笑顔で花の冠を手元に差し出されて戸惑う。
「……僕がつけるより、チェルシーがつけた方が良いよ」
　一度花冠を受け取り、チェルシーの頭へとそっと乗せる。花冠は彼女の額辺りで留まった。
「えっ……えっと……に、似合う？」

少々困惑した様子で、僕にそう尋ねてくる。僕が花冠を頭に乗せるよりは、彼女の方が似合うだろう。いつもと違う雰囲気の彼女に微笑んで、僕は迷い無く首を縦に振った。
「そ、そっか。うん、ありがとう。……本当はね、このお花畑には寄り道をしちゃいけないって言われてるの」
　少しだけ気まずそうにしながら、チェルシーは花冠を頭から外し、

視線を手元に落とす。
「でも……もしね、ここのお花を摘んで、届けてあげたら喜ぶんじゃないかって……ダメだって言われたけど、そっちの方が良いって考えちゃった時ね。……アレン君なら、どうする？」
　そこまで言うと、チェルシーはおそるおそる僕へと視線を戻した。
「……ちょっとだけならって、少しだけ花を摘んで持って行くかも」
　そう答えると、チェルシーはほっと一息ついた。
「……そっか。アレン君もそうなんだ……うん、ありがとう。ごめんね、急に」
　言うと同時にさっと立ち上がったチェルシーは、もう一度花冠を自分の頭に載せてから、その手を僕へと差し出してくれた。女の子に手を差し出されるのは、僕が覚えている限りでは初めてだ。
　少しだけ躊躇ったが、なかなか手を取らない僕に不安になったのか、チェルシーの表情がみるみる曇り始めたので、慌ててその手を握った。そのまま引っ張り上げてもらうと、勢いをつけすぎたのか、チェルシーが後ろへ倒れそうになったので慌てて体を支えてあげる。
「大丈夫？　……次、どこ行こっか。一度、家に戻る？」
　顔を赤くして俯いてしまったチェルシーに、希望を聞いてみる。
　空は先程よりも赤黒く染まり始めている。じきに暗くなるだろう。そうなれば、カギを見つけるのはより困難になってしまう。外を調べるなら早めに済ませたいが、家の中も調べていない部屋がある。──少しだけ、焦りを感じ始めていた。
「えっ？　えっと……そうだ、アレン君とあそこで会う前にね、先生と会ったの。お家にずっと居ろって言われてたけど…探してみる？　このお花畑の先にね、おばあさんのお家があるから。またちょっと歩くけれど」
　……先生？　確かレティのセカイでも、リックが先生に会ったと言っていた。先生はセカイで何をしているのだろう。会えば、教えてもらえるのだろうか？
　少しだけ迷った後、僕は頷いて、背後にいるチェルシーが指差す方向へと向かっていった。森は燃えるような深い赤色に染まっている。その赤色は禍まが々まがしささえ感じさせるもので、僕の中に恐怖という感情を芽生えさせた。
　……このまま進んで行けば、またレティの時のような事が起こるかもしれない。でも、カギを見つけないと僕はずっと空っぽなままだ。それが何よりも耐え難かった。記憶があった頃の僕も、こんなにワガママな人間だったのだろうか。
「……お花畑に行くまでにも、結構歩いたから疲れちゃった？
ちょっと、休憩する？」
　いつの間にか立ち止まってしまっていたようで、チェルシーに心配された。僕は大丈夫、と答えたが彼女はあまり信用をしていないような目でこちらをじっと見つめてくる。

『──ある日、おつかいの途中で母親との約束を破ってしまい、少女は

花畑で花をつみました』
『その時出会ったやさしいヒトと、少女はおばあさんの家へ行きました』

　チェルシーの目を見つめた瞬間、またあの声が響き、痛みが僕を襲った。だが、ぐっ、とこらえて何も無かったかのような顔をする。
「……あんまり無理しちゃ、ダメだよ」
　そう言って、チェルシーはまた僕の少し後ろへと回り、手を伸ばして次の道を指し示す。これ以上何も考える事がないようにと、彼女の指先へと意識を集中し、再び足を動かし始めた。

　しばらく進んだところで、チェルシーの足がピタリ、と止まった。目の前には、大きな川が勢い良く大量の水を運んでいる。水は夕日を映して赤黒く染まっており、深さはわからないが、この激しい流れでは僕らの小さな体はあっという間に流されてしまうだろう。
「あれ？　お、おかしいな。ここに橋があってね、そこを渡ってもう少し進めばおばあさんのお家に着くんだけれど……これじゃ、行けない……ど、どうしようアレン君」
　チェルシーは困惑気味に僕の方を見る。なんとかしてあげられるものならしてあげたいが、残念ながら僕にもどうすればいいのかわからない。打つ手もなく、二人でただ目の前に流れる赤い色の濁だく流りゅうを見つめることしかできなかった。
「おや、おやおや！　お困りかな？」
　そのとき、突然背後から、背中をなでるような聞き覚えのある猫なで声が投げ掛けられる。またか……と思い、無意識にため息を一つ漏らしていた。
「ハロー、アリスに……おや！　こちらにもアリスが！」
「えっ……私？　えっ？」
　チェルシーが後ろを振り返り、僕もそれにならって仕方なくそちらを向く。そこにはチェシャ猫が愉快そうなポーズをしたまま、こちらを見つめていた。
「……あんまり見つめんなよ。死ぬぜ？」
　チェルシーが先程から不審そうな目で見ていた事が気に食わなかったのか、それとも面白かったのか、感情が読めないような声でチェシャ猫は警告した。チェルシーはビクッと肩を震わせて、僕の背中に隠れるように体をすっぽりと納める。
「冗談だって！　それよりさ、この川の向こうに渡りたいんだろ？　俺なら向こうまで連れて行ってやれるけど……どうする？」
「ほ、本当？」
　チェルシーが僕の背中から顔を少し覗かせて、チェシャ猫に問い掛ける。
「でも、タダじゃないんでしょ」

「ああ……俺と遊んでくれたらな！」
　僕の問いに、あっさりと返答をする。こいつと遊ぶなんて、とんでもなく危険な目に遭わされるか、それとも訳のわからない、僕達には到底不可能な事をさせられるか──どちらにせよ、簡単にできるものではないだろうと思った。
「いやいや！　僕はそんなにイジワルじゃあないぜ。見くびってもらっちゃ困るな」
　僕の考えを見通したように、チェシャ猫はすかした顔で返事をする。
「なんてことはない。なぞなぞ遊びさ。そっちのアリスは、得意だろ？」
　チェルシーの方を見つめて、ニヤリと笑う。
「なぞなぞ、出来たら向こうに渡らせてくれるの？」
「ああ！　約束だからな。私は、約束は破らない主義なんでね」
「……わかった、やる」
　チェルシーは僕の背中で微かすかに震えながら、チェシャ猫の条件をのんだ。その言葉を聞いたチェシャ猫は、嬉しそうにさらに口と目を歪ませた。
「全部で三問だぜ。制限時間なんてモンはないから安心しな。──まずは一問目。あるものをとられたのに、ソイツは笑っている。さて、何をとられた？」
「えっと……写真、かな。写真なら、とられても笑うから」
　数秒間を置いて、チェルシーは小さな声で答えた。チェシャ猫がいやらしく笑ったので、正解なのだろう。あまりにもすんなりと回答したので驚いた。
　そういえば、チェルシーの家にあった手紙にもなぞなぞが記されていたが、チェルシーはそういったものが好きなのだろうか。
「なら、次だ。何しようが、途中でほっぽり出してしまう道具ってなんだ？」
「…………………ホウキ。放棄する、と同じホウキだよね？」
　先程よりも長い間を置いたが、またチェシャ猫が愉しげに笑った所を見るとまた一発で正解したようだった。僕はそのままチェシャ猫とチェルシーの間を阻はばむ壁として沈黙を守りながら、成り行きを見守ることにした。
「正解だぜ。賢いガキってのは、俺はキライじゃあないぜ。なら、最後の問題だ」
　チェシャ猫が、今までで一番楽しそうな顔をしたのを見て、嫌な予感がした。
「……お前が大キライな色って、なんだ？」
　それはなぞなぞなのだろうか？　いずれにせよ、チェルシーがこの問いに回答できれば川の向こうへ渡ることができる。そう考えていたが、チェルシーは先程のようにすぐに回答をしなかった。
「……チェルシー？」
　後ろを振り返ると、チェルシーは先程よりも大きく体を震わせてい

た。彼女が指先で掴んでいる僕の服の裾から、僅かにその振動が伝わってくる。顔は青ざめていて、何か言葉を口にしようとしていたが形にならず、うめき声になってその小さな唇から漏れ出していた。
　この状態では、きっと回答をする事なんて出来ないだろう。チェシャ猫は、こうなる事を予測して先程の質問をしたのだろうか。何て嫌なヤツなのだろう。
「……赤色。チェルシーがキライな色は、赤色だ」
　ここに来る前に、チェルシーはあの赤く輝く空を見て、この空の色はキライだと言った。一番キライな色かどうかは賭けだったが、思いつく色は他には無かったのでチェシャ猫に向かって僕は半ば投げやりに回答をした。
「正解！　なら、約束通りに向こうに渡してやるさ。目、閉じてみろよ。閉じなきゃ今度は本当に死んじまうからな！」
　チェルシーの方へと顔を向けると、彼女は既に目をぎゅっと閉じて未だに小刻みに震えていた。僕も前を向き直し、目を閉じる。気が遠くなっていくような感覚に飲み込まれ、そのまま数分ほど暗闇を漂う嫌な体験をした。

　次に目を開けた時には、川の向こうにあった景色が目の前に広がっていた。チェシャ猫の姿はどこにも見当たらなかったが、どうやら本当に川を渡らせてくれたらしい。
「……あっ、これでおばあさんのお家に、行けるね。……先生、いるかな」
　見ると、チェルシーも目を開けていた。体の震えは収まっているようで、少しだけ安心した。赤色の服を着ているのに、なぜ赤色がキライなのだろうか。気にならないと言えば嘘になるが、触れて欲しくない部分だろうと思い、僕は唇をぎゅっと引き結んだ。
「……おかあさん、大丈夫かな。施設で暮らし始めてから、ずっと様子がわからないから心配なの。おばあさんは、治るって言ってたけどいつか目を覚まさない日が来る、なんて考えたら……あれ、考えてた……よね？」
　僕の服の袖を掴んで、俯き気味に呟いていたチェルシーは、最後には自問自答をはじめた。記憶が混乱しているのだろうか。
「アレン君には、守りたい人って居る？」
　ふいに、質問を投げ掛けられた。セカイを巡り、少しずつ記憶のカケラを取り戻す事が出来たが、まだ全体は霧がかかってぼんやりとしている。守りたい人を思い出すのは、まだ今の自分には難しかった。小さく首を横に振る。
「あっ、そうだアレン君、記憶が無くなっちゃったんだよね。……そんなつもりじゃなかったの。ごめんね」
　チェルシーは僕以上に悲しそうに目を潤うるませ下を向いてしまった。

僕は「大丈夫」と言って、優しい心をもつ彼女の背中をそっと撫でた。チェルシーは少しだけ顔を上げて、こちらの目をじっと見つめる。僕が少しだけ微笑むと、ようやく彼女もほっとしたように頬を綻ほころばせた。
　……良かった、今度はちゃんと表情をつくる事が出来ていたようだ。

　そのまま道を真っ直ぐに歩いていくと、青レンガの家が見えてきた。その家の前には大きな畑があり、名前の知らない植物がたくさん生えていた。
「これはね、おばあさんが育ててる薬草なんだって。おばあさん、お薬を作って売るお仕事をしてるって言ってた。これから、色々なお薬を作る事ができるんだって」
　畑をじっと見つめていたら、チェルシーが丁寧に説明をしてくれた。
「……どんな薬を作ってるの？」
「えっと……色々。最近は、どこかの村で流行していた病気のためのお薬とか、後は……夢の病気？　のお話とかも、誰かとしていたよ」
　夢の病気？　その言葉が、記憶のどこかで突っかかる。確かどこかにあった新聞か何かで、その病気に関する記事を見たような気がする。
　施設には新聞もテレビも無かったから、今、外でどのような事が起きているのかは先生から聞く話でしかわからなかった。それも、そんなに重要なものでもなく、平和な話ばかりだったけれど。
「行こっか。先生、いるかな」
　チェルシーは僕の服の袖を引っ張り、家の前へと誘導する。ところが、チェルシーが扉を開けようとドアノブを捻っても、鈍い音を立てるばかりで扉は開かなかった。
「あれ？　おかしいな……折角、ここまで来たのに」
　残念そうな顔をしながら、チェルシーはまた何度かドアノブを捻ってみている。
「あら、おかしなお嬢さん。そんな事を続けても開くわけないでしょうに」
　足元から甲高い声が聞こえた。反射的にその声の方向へ視線を落とすと、小さな白いネズミがこちらの顔を覗いていた。
「えっ？　また、ネズミが喋って……？」
「なあに？　私が喋ったら、おかしいの？　失礼な子ね！」
　白い小さな顔を少し膨らませて、体を震わせる。怒っているのだろうか。
「ねえ、白ネズミさん。この扉を開ける方法、知ってる？」
「ええ、知ってるわよ。でも、タダって訳にもいかないわね」
　チチチ、と小さな鳴き声と共に白ネズミは鼻を鳴らす。

「えっと……何をすればいいのかな？」
「そう！　そうね。アナタの頭に乗ってるその綺麗な冠。それ、私に下さらない？」
　チェルシーの頭の上には、花畑で作った花冠が乗っている。作った時よりも、時間が経ち今は少しだけしぼんで、悲しそうな表情をしている。
「これ？　これでいいの……？　はい、どうぞ」
　チェルシーは花冠を両手で丁寧に頭から離し、崩れないように白ネズミの前へと置いた。ネズミは嬉しそうに鼻を鳴らした後、なんとその花冠を頬張り始めた。
「ふう！　ありがとう。お腹がすいていたのよ。私が大キライな、トゲのあるあの花も無かったし、最高な気分だわ！」
　そう言った後、白ネズミは甲高い笑い声を上げた。少しだけ、頭に響く鳴き声だ。
「トゲのある花、キライなの？　……綺麗な花が多いと思うんだけどな」
「そうね、綺麗な花にはトゲがあるの。皆、自分を飾るために多少傷ついても、と綺麗な花を選ぶのよ。そうして、散々傷ついた後に、この花はダメね、と捨てるのよ」
　白ネズミはその甲高い声で、何だかよくわからない事を呟いた。
「トゲがある事、最初から知ってたのにね。……アナタも、知ってたんでしょう？」
「えっ？」
　確かにチェルシーの目を捉えて、白ネズミは言葉を投げ掛けた。チェルシーはどう言葉を継げばいいのかわからずにオロオロとしている。
「ほら、約束のものよ。これで扉を開けられるわ。重いから、気をつけなさいな」
　白ネズミは斜め横の方向へその鼻を鳴らす。そちらを見ると、立派な斧が切り株に立て掛けられているのが目に入った。
「……えっ？　わ、私あんまり重たいもの持てないから……任せてもいい？」
　チェルシーを見つめると、ビックリしたように両手を横に振る。僕は頷いて、斧を手に取り扉へと大きく振りかぶる。痛々しい音を立て、扉は前に小さな隙間を空けた。
「アレン君って……結構大胆だよね」
　これは褒められているのだろうか。とりあえず「ありがとう」と言って扉をさらに前へと押して、家の中へと入った。
　家の中に入った瞬間、生臭いにおいが鼻から体の中へと入り込んできた。そのにおいは、胃から何か酸っぱいものを押し上げてきて、僕の体から出て来ようとする。僕は下を向いて、それを必死に押さえ込んだ。
「アレン君どうした……あっ……！」
　チェルシーが突然、悲鳴を上げた。気持ちの悪くなった胸の中を両

手で支えながら、顔を上げてみる。
　荒々しくぶちまけられた謎の薬品に混じり、赤くどろどろとした液体のようなものが部屋中に飛び散っている。隅に置かれたベッドには、人のような形をした何かが横たわっており、目の前には獣だろうか……毛むくじゃらの物体が低い唸り声を上げながらベッドを見つめていた。
「ア、アレ、アレン君、にに、逃げ……」
　チェルシーが外に出ようと扉の方へと後ろ歩きで向かう。しかし、先程確かに斧で壊したはずの扉は元通りになっていた。チェルシーが何度か荒っぽくドアノブを回すが、カラカラと音を鳴らすのみでビクともしない。
　ドアノブを開けようとした音で獣はこちらに気付いたのか、そのずんぐりとした体をこちらへ向けた。口から唸り声と共に漏れる獣のにおいが、さらに僕の胸の中を掻き混ぜる。しかし、獣は僕ではなくチェルシーの方ばかり睨んでいた。
「あっ……！　違う、違う違う！　それはおばあさんじゃない！　やめてよ、もう見たくないのに。二回も見たくない！　二度としないから……良い子になるから、ゆるして……ゆるしてよ……夢ならさめて……」
　チェルシーは嗚お咽えつの混じった声で呟いた後に、膝から崩れ落ち両手で顔を覆った。獣はその時を見計らっていたかのように、素早い動きで僕の横を一気に通り過ぎ、チェルシーに襲い掛かろうとする。
「危ない！」
　咄嗟に、先程扉に向けてしたのと同じように、手に持っていた斧を獣へと大きく振りかぶった。野太い雄たけびに似た何かが獣の口から漏れ出す。
　同時に、何とも言い難いにおいが部屋中に充満し、赤くどろどろとした液体が部屋中に重ね塗られた。
「チェルシー……」
　獣は、雄たけびを吐き切った後、そのまま倒れて動かなくなった。震えているチェルシーに手を差し出してみたが、彼女は俯き、自分の顔を両手で覆っている。
「やめ……て……あかい、いろは、キライ……おとうさん……」
　しきりに、そんな事を呟いている。僕は膝をついて、彼女の目線に合わせる。
「……め、とじるから。それで、なにもみえないから。おねがい……て、にぎって」
　そう言って僕には目を合わせてくれないまま、小刻みに揺らぐ手を僕に差し出した。僕はそっと、その手を両手で包み込む。その瞬間、彼女の手から冷たい温度と共にあの声が体中に響き渡った。

『──少女が薬を取りに行った後、部屋へ戻るとおばあさんはオオカミに食べられていました。少女はひどく恐怖し、その場から動けませ

ん。そしてオオカミは、少女へ近づきました』
『オオカミが少女へ手をのばしたその時、オオカミはまっぷたつになりました。オオカミの後ろにいたのは、斧を持った自分の父親でした。まっぷたつになったオオカミと、真っ赤になった父親をみて、少女は震えました』
『その後、少女は走って自分の家へと帰り、部屋にこもりました。父親の声が聞こえます。少女の声も聞こえます』
『──お父さんが、ヒトをころしてしまった。でも、一番悪いのは私じゃないの？　あれは、お父さんだった？　ヒトだった──？』
『考えるほど、あの時の光景が頭の中をぐちゃぐちゃにしていきます。だから、もう考えないようにしました』
『──少女は、認める事を放棄しました』

　──もう一度目を開いた時には、チェルシーは横たわっていた。彼女の近くの血溜まりの中に、何か光るものが沈んでいた。チェルシーの手から自分の手をそっと離し、それに──カギに触れる。
　その瞬間、また懐かしい声が僕の中から溢れ出て来る。

『──なんだ、アレン。また図書館に行くのか』
『うん、もう読み終わったんだ。早く、別の話が読みたくて』
『そうか、今は眠ったまま起きない病気が、子供達の中で増えているらしいが……アレンは、本が読みたくて飛び起きる子だから大丈夫だろうな、ははは』
『最近夜更かしが多いのよ、アレンってば。お父さんもちゃんと言って頂戴な』
『好きなものがあって、夢中になれるってのは良い事さ……いってらっしゃい』
　──暗闇の中で、あの時の光景が段々とハッキリ蘇よみがえってくる。これも、僕の記憶なのだろうか。あの時、僕の頭をなでて微笑んでくれた男性を僕は知っている。
　……僕は、あの時──。

2

　この辺りは森林の伐採が進んでいて、空が良く見える。同時に、日差しも容赦なく僕の頭上から降り注いでいた。
「ここも、彼女と施設で暮らし始める前の記憶か……」
　この景色は、リーヴィス先生の家へ向かう道と寸分も違いは無かった。
　リーヴィス先生から手紙を貰ったのは、レティ君を施設で保護し、様子を見始めてから数週間が経ったある日の出来事だった。
　──ある出来事がきっかけで、娘が部屋に篭こもったままあまり話を

してくれなくなった。施設で子供を保護してカウンセリングをしていると聞いたが、娘の事も一度見てくれないか、との内容だった。
　リーヴィス先生の一人娘、チェルシー君とは以前から手紙のやり取りをしていた。先生が病気がちになり、その世話を献身的に行っているというチェルシー君のことが、気がかりだったのだ。なぞなぞ付きの手紙を送ると喜んでくれたのを覚えている。最後に送った手紙では、リーヴィス先生を訪ねる旨を告げていたはずだが、会いに行く当日レティ君の事件が起きてしまい、訪問は叶かなわないままでいた。
　リーヴィス先生から手紙を貰った三日後にちょうどクリフが施設に顔を出してくれる予定だったので、レティ君を彼に任せてリーヴィス先生の家を訪問する事にした。小さな花冠が飾られた扉を叩くと、最後に見た時よりもまた弱弱しくなってしまった女性が顔を出した。
「あら……久しぶり。また大きくなったみたいね。いえ、私が縮んじゃったのかしら」
　そんな冗談を交えて、昔と変わりない笑顔を向けてくれたのは、リーヴィス先生その人だった。しかし、その声は昔聞いたよりも張りを失い、か細くなっている。
「前に会ったのは確か大学の入学前でしたしね。あの時もお世話になりました」
「……本当に立派になって。孤児院にいた時は、よく泣きべそをかいていたのにね、すごく懐かしいわ」
「あはは……恥ずかしいな、先生に言われると」
　僕は昔、僕の姉と共にリーヴィス先生が勤めていた孤児院で育てられた。そこで僕達は先生から名前を付けて貰い、勉強を教えて貰った。僕が十歳くらいの時だっただろうか、出産をするという理由で施設から去ってしまったが、その後もたびたび連絡を交わし合い、今でもよくお世話になっている。
「……それで、先生の娘さんは」
「ああ……部屋にいるわ。カギは掛かってないんだけど、目を合わせて話をしようとしてくれないの。特に……夫とね」
「何があったのか、まず話して頂けますか？」
　そう尋ねると、先生は微かに顔を曇らせた。少しだけ間を置いた後に、ぽつぽつとある事件について語り始める。
　先生はよく娘に、薬屋をやっているという母親──娘にとっての祖母の元へ、薬を貰ってくるようおつかいを頼んでいた。先日もいつもと同じようにおつかいを頼み、帰りを待っていたのだが、いつまでたっても娘が帰ってこない。その時、ちょうど夫が帰宅したので、娘の様子を見に行って貰うことにした。
　夫が薬屋に辿りつくと室内は荒らされていて、薬の瓶や薬草が散乱する部屋の奥で、うずくまる自分の娘と、いまにも娘に襲いかかろうとしている見知らぬ男を見つけた。夫は咄嗟に、娘を守るためにその場にあった斧を男に向かって振り下ろした。
　──幸い娘は無事だったが、怯えた様子で家へと走り帰り、それ以来部屋に篭りっきりになってしまったという。

「その男は、薬を詰め込んだ大きな袋を持っていたらしいわ。母の薬は珍しいものも多かったから、薬泥棒だったのかも。……もう、本人はおろか、母からも話は聞けないけれど」
「……手紙でも拝見致しました、僕もお世話になりましたので……心よりお悔やみ申し上げます」
　頭を下げ、ゆっくりと目を伏せる。先生の母親も、襲った男性も手遅れだったと手紙には記されていた。先生も、丁寧にお辞儀を返した。
「知らない男に襲われそうになったことは、もちろん恐ろしかったでしょうが……。自分の父親が、どんな理由であれ目の前で人に斧を振り下ろしたのですから……幼い彼女にとっては、あまりにショックが大きすぎたのかもしれません」
「……そうね。とりあえず、娘と一度話をしてみてくれないかしら。夫も、頑なに拒否されてしまって、もう話し掛けることを諦めてしまったのよ」
　そう言って先生は、自分の娘の部屋へと僕を促す。ノックをし、扉を開けると真っ赤な衣装に身を包んだ少女が、部屋の片隅に蹲って震えていた。
「だ……誰？」
「チェルシー君……だよね。君と何度も手紙のやり取りをしていたでしょう。僕が書いてたんだ。あの時は急用で来れなくて、悪かったね。でもこうして会うのは実は初めてじゃないんだけど……何年も前で、君は小さかったし、覚えてないかな」
　怖がらせないようゆっくりと話し掛けながら微笑む。逃げ出す素振りはみせなかったので、そのままあまり近づきすぎない程度に距離を詰めたが、膝をついても縮こまっている彼女とは目線を合わす事が出来なかったので、正座をして向き合った。
「どうしてそこにいて、お父さん達とお話をしてくれないのか、教えてくれないかな？」
　数分程彼女は躊躇っていたが、やがて僕の目を捉えてぽつりぽつりと話し始めてくれた。
　内容は大方先生に聞いたとおりで、自分の目の前で父親が人殺しになってしまった事がショックだったようだ。
「……あの男の人、とても優しそうな人だったの。でも、急にオオカミみたいになって……おばあさんをおそって、薬をぐちゃぐちゃにして……」
　一つ一つ、あの日のことを思い出しながら僕に話をしようとする。しかし、それ以上は喉に何かが詰まったように、黙り込んでしまった。
「無理はしなくてもいいんだ。……お父さんと、お話する事は出来ないのかな？」
「……出来、ない。お父さん、たまにしか帰ってこないし。きっと、私の事もそんなに気にしてないと思うから……いいの、もう」
　そのまま、大きな瞳から数粒の雫しずくを零し始める。羽織ってい

たコートのポケットに入れていたハンカチを取り出しそっと差し出すと、彼女はおずおずと受け取った。
「良かったら……落ち着くまで、僕の所に来るかい？　他にも、君と同じ年頃で似たような体験をした子が居てね。……女の子だし、僕だけじゃ不安になる事も多いんだ」
「……ほんとに？　でも、お母さんが病気だから……」
「いいのよ、チェルシー」
　そう言って、リーヴィス先生が部屋の扉を開けて入ってくる。扉の外で、僕達の話を聞いていたようだ。
「病気って言っても……そんなに大きな病気じゃないんだから。チェルシーも、勉強や自由に遊んだりしたいって思っているでしょう。お父さん、これからお仕事はちょっとだけお休みするって言っていたから、私の事は心配しなくていいのよ」
「お母さん……」
　チェルシー君は顔に戸惑いを滲ませて、僕と先生の顔を交互に見る。
「しばらくの間、チェルシーを頼むわね」
　先生は言いながらチェルシー君の元まで歩み寄り、蹲ったままだった彼女の腕を持って体を引き上げるとその背中を軽く僕の方へと押す。
「また定期的に、ご連絡は差し上げますから」
「ええ、昔の教え子にこうして娘を任せる事になるなんて。何だか、変な感じね」
　先生は昔と変わらない笑顔で、僕に優しく語りかける。一瞬、心の奥に棘とげが刺さったような痛みが走った。
「えっと……よろしく、お願いします」
　チェルシー君は丁寧にお辞儀をしてから、僕の服の裾を掴んだ。僕も彼女によろしく、と微笑み、リーヴィス先生にも挨拶を済ませると、施設へと彼女を連れ帰ったのだった。

⚷

「先生……また、こんな所で寝てる。風邪引いちゃうよって、前にも言ったのに」
　少しだけ頬を膨らませたチェルシー君が、僕の体を揺さ振っていた。体を起こし辺りを見回しながら記憶を辿る。……どうやら僕はまた図書室のソファで、寝てしまっていたらしい。
「あはは……ごめんね、一応注意してるんだけど。いつのまにか寝ちゃうな」
「もう！　今の季節は、夜と朝とで気温の変化が激しいから気をつけなきゃ……あっ、先生、これ、手帳」
　今、思い出したように慌ててポケットの中を探り、朱色の手帳を僕に手渡す。
「じゃあね、先生。もう寝る時間だから……先生も、ちゃんと自分の

部屋で寝ないとダメだよ！」
　彼女は重そうな瞼まぶたを擦りながら、僕に注意をする。その後、図書室から出て行く時にも僕の方を何度も振り返り、自分の部屋で寝るようにと繰り返し言い放つ。
「わかってる、ちゃんと寝るから。おやすみ、チェルシー君」
　彼女は僕の言葉に、ようやく納得した顔をして「おやすみなさい」と挨拶を返した。そのまま、ゆったりとした足取りで自分の部屋へと戻って行った。
　一息ついて、彼女の事についてまとめてみる。彼女は自分の祖母の家へと薬を貰いに定期的に通っており、母親は寄り道をしないように、と注意喚起していた。
　しかし、あの日はお花畑で花を摘んでいたらしい。その途中で、知らない男性が彼女に話し掛けてきた。彼女も最初は警戒したが、話をし、手を繋いだ時には悪い人ではないと感じたという。きっと、仕事の関係で父親とはあまり会ったり触れ合ったりする事が出来なかった寂しさが、そう感じさせてしまったのだろうか。
　その後、その男性は薬を買いに彼女の祖母を尋ねたいと言った。ただ、男性は普段街で生活をしていて森には入った事が無く、迷ってしまっていたらしかった。チェルシー君はその話を聞いて、彼女の祖母の家へと一緒に行く事を決めたと言う。
　その後の話は、先生やチェルシー君に聞いたとおりだ。急に人が変わったかのように男性が彼女の祖母を襲い、薬を強奪しようとしたという所が妙に引っかかる。最近、似たような事件が多発している。今回の場合、その犯人から詳しく話は聞けないが……。
「……もう少し、資料を集めて調べる必要があるな」
　一度背伸びをして、僕はもう一度目の前にある机へと向かった。

⚷

　チェルシー君を預かってから、施設でともに生活したことまで順番に思い出しながら、森の中の道をしばらく進んでいくと、ここに来る途中で通りかかった花畑とよく似た空間が広がっていた。ただ、あちらとは違ってこちらは季節を無視して色々な花が競うように咲き乱れていたりはしなかった。花を潰さないように慎重に座り、少しだけ息を整える。そして、彼女から貰った手帳の一番新しいページを思い返していた。

　先生、おとうさんを、わたしは、まだ、ゆるせない。あのめが、いろが、こわい。……たすけて

　彼女のあの事件のショックを和らげる事が出来れば、またあの家で家族と暮らす事は出来るだろう。その方法も、無い訳ではない。ただ、まだ実行に移す訳にはいかなかった。
「……なんだ？」

レティ君のセカイで感じたのと同じような地鳴りとともに、地面が揺れ始める。周りの草木が早送りをするように急激な成長を始め、僕の周りを囲んでいく。
―これは……セカイの崩壊か？　ああ、またダメだったのか。
どこかでこうなる予感がしていた。しかし、彼女が約束を破るとは到底思えなかった。その答えを見つける前に、緑の蔓つるや変な形をした葉っぱが僕の体に纏わりつき始め、やがて全てを飲み込んでいった。

3

「……コチラが笑顔でおかえりと言っているのに、そんな顔をされていては不快ですね」
苛立った声で、シロウサギが僕にそう吐き捨てた。
「いえ……無事カギも回収できているようですし、何も文句は言いませんよ」
「……あのセカイにいる人たちを、助ける事って出来ないの？」
苛立ちを重ね始めているシロウサギに、おそるおそる尋ねてみる。
「ああ……それは、ヒトのセカイに立ち入らない事ですよ。心なんて、どんなに配慮したって本人以外は必ず傷つけてしまうものでしょう」
シロウサギは腕を組み、その白い指で自分のひじをトントンとノックし始める。
「よく考えてみてください。隠していた部分を無理矢理開けられるんです。……セカイにある扉は、いわばその部分を閉じ込めておく為のものなんですよ。さらには、触れて欲しくない所までベタベタと素手で触られる。……アナタだって、イヤでしょう？」
僕は黙って、シロウサギの話を聞いていた。―つまり、僕がセカイへ入った時点で、たとえそれが無自覚であったとしても、僕は彼女たちを傷つけてしまっていたのだろう。
「……大丈夫ですよ。後処理は、コチラでしますから。アリスは気にせず、カギの回収を続けてくれれば良いのです」
にっこりと、シロウサギは不気味な笑みを浮かべる。優しさを感じない笑顔を見たのは、初めてかもしれない。僕はその場しのぎで頷いた後、シロウサギから離れ、三番目の扉に向かって歩き始めた。
あの時、カギに触れて思い出したのは……あの日の朝食の光景だった。新聞を読み、パンを齧かじりながら僕に話し掛けるお父さん。お父さんを見て、注意をするお母さん。そんな自分の両親を見て、笑っている僕。確かに、欠けていたあの日の記憶だった。
記憶を取り戻すにつれて、感情というものも少しだけ取り戻しはじめた僕は、次のセカイへ行く事を躊躇っていた。先程のシロウサギの話を聞けば、なおさらだ。これ以上、誰も傷つけたくはない。
「傷つきたくない、の間違いじゃあないのかい？」
僕の背後に、いつの間にかチェシャ猫が現れていた。本当に、神出

鬼没なネコだ。
「ヒトってのは、皆そうだな。言いたい事言えって言う割には、マイナスやバッドな事を言えばナイフを向けてくる。ああ、なら何を言えば良いんだ！」
　ひょうきんなダンスを踊りながら、僕の方へと首を傾かしげる。僕の不快感はより明確に重なり、大きくなり始めていた。
「ああ、そうさ。それなら、オマエみたいに何も言わなけりゃいい。何も知らなけりゃ、そんな思いもする事は無かったのにな？」
　……記憶を取り戻そうとしている僕を否定しているのだろうか。
「知識は、心を汚すんだ。頑張ったって疲れるだけだぜ」
「……助ける方法だって、あるかもしれない」
　僕の中に、反抗心が芽生え始めていた。このまま否定され続けていれば、僕もどこか壊れてしまうかもしれない。また自分を忘れてしまうのが─失ってしまうのが、怖かった。
「シシシシ！　ウサギも言ってたのになあ、口ではやめたいと言って、まだ続けるつもりなのかい？　アイツと全く同じじゃあないか。そういう事は教えてくれなかったのか？」
　アイツ？　教えてくれなかった？
　思い当たるのは、ただ一人だった。セカイでリックやチェルシーも姿を見たと言っていた、とても身近な人物。
「……アイツって、先生の事？　先生の事、知ってるの？」
「ああ！　そうさ。何たって、アイツと約束をして俺はこうして動いているんだから……おっと、もうこんな時間か。じゃあな、また今度話そうぜ」
　二度と話をしたくない、と思いつつも、チェシャ猫の最後の言葉に僕は惑まどわされていた。
　─チェシャ猫は先生と約束をして、動いていた？
　どんな目的で、先生はセカイを歩き回っているのだろう。
　僕には先生の考えていることがわからなかったが、チェシャ猫の口ぶりからすると、今頃きっと、先生は次のセカイへと入っているのだろう。確かめるためには、僕も次のセカイの扉を開けないといけない。
　少し前まであった躊躇いは、いつの間にか消え失せてしまっていた。何だかんだ言っていても、あのネコの言う事を真に受けて行動せざるを得ないのだ。
　三番目の扉のドアノブに手を掛ける。そのまま、間を置かずに勢い良くドアノブを捻った。

４

「今の話は本当なのか？」
「ああ！　オマエの他にセカイを歩き回っている奴は確かにいる」
　チェシャ猫は満面の笑みで答えた。やはり、僕以外にセカイを歩き回っている誰かがいる。また自由に歩き回られて、セカイが崩壊して

しまっては非常にまずい。
　ならば――。
「……先に行ってるよ」
　笑い続けるチェシャ猫の横を通り過ぎ、僕はクローゼットの扉を引き開けた。

わたしのおかあさんは、からだがとてもよわいです。
　だから、わたしがかわりに、おりょうりや、おせんたく、いろいろします。
　おとうさんは、あまりいえにいることはありません。
　たまに、オオカミやシカをつれてかえってきます。
　がっこうにはいきたいけれど、おかあさんがだいすきなので、ずっといえでそばにいます。
　おかあさんは、ベッドのなかでいつも、ごめんね、ごめんね、ちいさな、きえそうなこえでいつもつぶやくのです。

　もりのおばあさんは、くすりをつくるおしごとをしています。
　おかあさんのくすりがきれると、おばあさんのいえまでとりにいきます。
　とあるひ、いつものようにおばあさんのいえへいってほしい、といわれました。
「きょうは、とどけものもしてほしいの。いつも、おせわになっているから」
「パンや、おさけがはいってるけど、とちゅうでたべたりしちゃだめよ」
「いつもいっているとおり、よりみちをしてはいけません」
「こわいオオカミが、いるんだからね」
　わたしは、おへんじをしていえをしゅっぱつしました。
　もりをすすむとちゅうで、わたしはきれいなおはなばたけをみつけました。

　よりみちはいけないって、わたしはわたしにちゅういをしました。
　でも、おはなもとどけたほうが、おばあさんもきっとうれしいだろうな。
　そうおもって、おはなをひとつ、ふたつとつみました。
　とちゅうで、おとこのひとがくすりやのおうちのことをたずねてきました。
　きっとおばあさんのことだ。

　わたしも、いくところだからいっしょにいきますか、とさそいました。
　おとこのひとは、えがおになるとおはなをつむのをてつだってくれました。
　そして、てをつないでおばあさんのいえまでいきました。
　おとうさんともあまりてをつなげないから、すこしだけ、すこしだけあたらしいかんかくでした。

　おばあさんのいえにつくと、いらっしゃいとおばあさんがでむかえてくれました。
　おとこのひとも、すこしおじぎをしました。

「くすりは、いつものところにおいてあるよ」
　わたしは、おくのへやへおかあさんのくすりをとりにいきました。
　そのとき、すごいおとがきこえて。そこには、そこには・・・・・・
　・・・・・・オオカミが、おばあさんを、たべていました。
　そのあと、くすりをたくさんふくろにつめて。
　そして、わたしにきづいて、こちらにあるいてきたのです。

　ひとの、めが、みれません。てを、にぎるのがこわい。
　あのとき、のことを、おもいだして、しまいます。
　あのとき、おはなを、つまなければ。あそこで、であわなければ。
　てを、つながなければ。
　ちが、たくさんでした。すごく、いやなにおいでした。
　先生、は、まだちょっとこわいけど、すこしだけ、だいじょうぶです。

『先生、おとうさんを、わたしは、まだ、ゆるせない。あのめが、いろが、こわい。・・・・・・たすけて』

第四章　オオカミしょうねん

1

　三番目の扉の先にあったのは、予想通り、施設にある誰かの部屋だった。机には宿題が白紙のまま綺麗に隅に寄せられており、本棚の隣の壁には変な模様が描かれたポスターのようなものが貼られている。
「おっ？　よう！　アリス！　良い天気だな！」
　窓が無いから外の天気なんてわからないのに、部屋の中心に居た人物は弾んだ声で僕に話し掛けた。銀色のチェーンがついた黒いニット帽を、いつも大事そうに身につけている少年。
「こういう時って、んーと、んーとんーと、んっとな」
　ジョシュアはいつもその口から、言葉がマシンガンのように繰り出してくるのだが、今は何かが詰まってしまったかのように同じ単語を吐き続けている。
「そそそそそ！　そそ！　そそそだ！　ああああ遊ぼうぜ！」
　やがて、声の出る玩具が電池切れを起こしたかのように、同じ言葉を重ねて遊びに誘ってきた。
　不安定な言葉とは裏腹に、ジョシュアはにこにことして、僕の答えを待っている。
　セカイへ行ってカギを見つけ、また記憶の断片を取り戻す。そして、先生を見つけて話を聞く──。今や僕の目的は二つになっており、早く行かなければ先を行く先生に追いつくのはより難しくなってしまうだろう。
「いいよ、遊ぼう」
　自分でもなぜかわからないが、応じる声が大きくなり、さらに途中で裏返ってしまった。……疲れているのだろうか。
「おおおう！　おう！　元気だな！　んじゃ！」
　ジョシュアもその声を、何重にも重ね、何倍にも大きくさせていく。
「クローゼット、開けようぜ」
　僕は頷き、ジョシュアのクローゼットへと近づく。そして扉に手を掛けた所で、自分の手が震えている事に気がついた。僕は、どうしてしまったのだろうか。
　震える手を、無理矢理動かして取っ手を掴む。僕は、そのまま力任せに扉を開けた。

　　　　　⚷

　やんわりとした感触が、僕の体へと広がっていく。まるで、無重力空間の中にいるみたいだ。少しだけ体を動かしてみると、慣れない摩擦が僕の全身をくすぐって来る。上半身だけ起こしてみると、広い部屋のあちらこちらに高価そうな家具や小物が置かれていることに気づいた。
　大きなベッドの上で目覚めた僕は、するりとベッドから抜け出し、

部屋中に敷き詰められた青いカーペットをそっと踏みしめる。まるでリビングのような広さだが、ベッドがあるということは、ここは寝室なのだろう。先ほど、ジョシュアに出会ったことを考えると、ここはジョシュアが施設にやってくる前に暮らしていた家なのかもしれない。
　ベッド脇に置かれたサイドテーブル、壁際に置かれた大きなテレビ、本棚……と、ベッドから近い順に一通り部屋を探索してみるが、特に気になったのが、洋服がぎっしりと詰められたチェストだった。一番下の引き出しの中には、ジョシュアが普段身に着けていたものと同じ帽子が大量に詰められていた。他には……パンツも入ってる。
　ここはもう良いだろうと、部屋の扉へと向かう。カギは掛かっていなかった。ドアノブを捻るとすんなりと開き、僕は安堵の息を漏らす。無理矢理こじ開けるような事は、出来ることなら、もうしたくなかった。
　扉の外に出ると、広く長い廊下が横たわっている。僕はその真っ直ぐな廊下に従い、真っ直ぐに足を進めていく。途中で上の階に上るための階段を見つけたが、見えない壁のようなものに阻まれていて、進む事はできなかった。
　階段を上ることを諦め、そのまま真っ直ぐ進み続けると、扉にカギが掛かった部屋に辿りついた。ドアノブが右にも左にも動かないことを確かめた僕は、その部屋はそっとしておく事にして、再び前へと足を動かし始めた。
　しばらく歩き続けていると、目の前に白い壁が現れた。どうやらここで行き止まりのようだ。横に目をやると、ここにも一つ扉があった。様々な不安に駆られながらもドアノブに手を掛けると、こちらの不安をよそに、軽快な音を鳴らして扉は簡単に開いた。
　扉の先には、壁一面に掛け時計が掛けられた部屋が広がっていた。その時計は一つ一つ形も、秒針が進む音も違っていて、各々が不規則に音を鳴らし、重なり合っている。ずっとここにいては、気が狂ってしまいそうな量だ──。
「……ん？　アレン？」
　時計に目を奪われていたが、誰かに肩を叩かれことに驚いて、視線を少し落とす。目の前には一人の少年が、こちらを不思議そうな顔をして見つめていた。
「……ジョージア君」
「ジョシュアだよ！」
　僕のとぼけた呼び掛けに、勢い良く突っ込んでくる。良かった、どうやら本物のジョシュアのようだ。
「良かった、この部屋に居てくれて。他の部屋、カギが掛かっていたから……先生には、会った？」
「？　カギなんて掛かってたか？　さっき他の部屋にも行ったけど全部開いてたし、誰にも会わなかったけど……先生もいるのか？」
　どうやらジョシュアはまだ先生には会っていないらしい。だが、前の事を考えれば、先生はきっとジョシュアにも接触を図るだろう。先

に彼に出会えたのは、好都合だ。
「なあアレン、ここどこだ？　目が覚めた時にはここにいてさ」
「ここは……夢の中だよ」
　嘘だ。どこかまではわからないが、夢ではない、ということだけは僕にもわかっていた。
「ふうん、やっぱそっか。僕の家に似てるけど、こんな狭くないしな！」
「……ジョシュアの家、すごく広いんだね」
「ああ、そうだよ。最近、こんな夢ばっかだな。さっきまで誰もいなかったから、一人ですごろくしてたんだ。まあ、すごろくって言ってもサイコロを転がしてただけだけど」
　そう言ってジョシュアは、得意げに小さなサイコロを数個、手のひらの上で跳ねさせた。
「アレンが居るなら、すごろくはもういいや。ここ、他に何にも無いし、どっか行こうぜ！　他のヤツも、もしかしたらいるかもしれねーしな！」
　ジョシュアが嬉しそうにそう言った時、僕の心がズキン、と痛んだ。あの時の光景を思い出し、胸焼けに似た感覚が奥から込み上げてくる。同時に、きん、と耳鳴りがした。

『─とある大きな街に、大きな家がありました』
『大きな家には母親、父親、少年、少年の姉兄、そして沢山の人が住んでいました』
『少年の楽しみは、大きな家をこっそりと抜け出し、外へ冒険する事と、その話を母親に聞かせることでした』
『その多くは嘘でしたが、母親は喜び、その度に頭をなでてくれました』

「……？　大丈夫か、アレン。なんだかつらそうな顔をしているけど」
　色々なものが体中からせり上がり、バランスを崩して床に座り込んでしまった。ジョシュアは心配そうに僕の顔を覗き込んでいる。
「……これからの事はアレンに任せるからさ。動けるようになったら、ついてくよ」
「大丈夫。たぶん、ちょっと眠かっただけだよ」
　そう言いながら、目の下を擦る。涙が溢れ出てくる度に何度か擦っていたので、少しだけピリッとする。その事がばれないように少しだけ俯く。そのままジョシュアに「行こう」と言って、時計だらけの部屋からまた広く長い廊下へと戻った。

「……最初に目が覚めた部屋のタンスにさ、ジョシュアがかぶってるのと同じ帽子がたくさん入ってたんだけど。他の帽子は、かぶったり

しないの？」
　行き止まりになっていた壁を背に、先ほど来た道を戻りながらジョシュアに問い掛ける。
「うん？　帽子がたくさんあったなら僕の部屋だな。実はこの帽子には宇宙のパワーが秘められていてさ、同じヤツじゃないとパワーを出せないから……」
「一緒に入ってたパンツもかぶるの？」
「かぶるわけないだろ！」
　意気揚ようようと語り始めたジョシュアに、適当な会話を織り交ぜてみたらまた鋭く切り返された。でも、ジョシュアはどこか楽しそうな、嬉しそうな表情を滲ませている。
「本当はさ、初めて貰ったプレゼントなんだ、この帽子。他にも何か買ってやるって言われたけど、この帽子が一番気に入ってるんだ」
「……誰に貰ったの？」
「ん？　これはな、えっと……あれ？　誰に、貰ったんだっけ？」
　ジョシュアが立ち止まって、その場で首を捻る。何度かその行動を繰り返していたが、やがて「まあいいや」と呟いて再び前へと進み始めた。
　来た時よりも、廊下が長く感じる。先ほどあったはずの扉も見当たらず、ずっと白い壁が続くのみだった。一本道だったにもかかわらず、「もしかして迷っているのだろうか」という錯覚に陥る。
　喋り疲れたのか、ジョシュアも黙々と僕の後ろについてくる。いよいよ不安が大きくなり始めたその時、先ほど見えない壁に阻まれて行けなかった煌きらびやかな階段が突然目の前に現れた。
　一段目に足を乗せると、何かずっしりと重いものがのしかかってきた。二段目に中々足を出す事が出来ない。するとジョシュアは僕の横を通り過ぎ、軽々と階段を上っていく。
「あれ？　アレン、何してるんだ？　お前、階段上れなかったっけ？」
　あまりの言い草に少しムッとして、無理矢理二段目へと足を運ぶ。足にのしかかっていた謎の重力はいつの間にか解けていて、今度は逆に勢いがつきすぎて前へと倒れそうになってしまった。
「大丈夫か？　あんまり、無理はするなよ」
　そう言ってジョシュアは僕に手を差し出してくれる。少し躊躇いつつも、その手を握る。レティやチェルシー同様、やはりその温度はいつもより低く感じられた。
　階段を上ると、下の階と同じように長い廊下がどこまでも広がっていた。すでに長く歩き続けていたので、どっ、と疲労感が波のように押し寄せてくる。現実の世界よりは随分マシに感じられていたが、やはり僕はあまり体力がないようだった。
「……ねえ、自分の家とはちょっと違うって言ってたけどさ、どこに何があるのかとかはなんとなくでも、わからない？」
「ん？　そうだなあ、なんとなくなら……わかる気がする」
　このまま無駄に歩き回り続けていては、そのうち倒れてしまいそう

だった。バトンタッチして、ジョシュアに前を歩いてもらう。するとものの数分で、一つの扉を発見した。ジョシュアは躊躇うこともなく、ドアノブに手を掛け捻る。扉は、抵抗することなく僕達を招き入れた。
　その部屋には先ほどジョシュアの部屋で見たものよりもさらに高価そうな調度品や、やたら強そうな剣などがずらっと並べられており、奥の壁の中央上辺りには誰かの写真が掛けられている。写っているのは鼻の下に蓄たくわえられたヒゲが何処か威厳を感じさせる、年老いた男性だった。
「ああ、これ僕の父さんだよ。怒るとすっげー怖いんだぜ」
　不思議そうに眺めていたら、ジョシュアが説明をしてくれた。なるほど、確かにキリッとしたオリーブ色の瞳はジョシュアと似ているかもしれない。
「色々買っては、前のものは使ってない部屋に移動するんだよな。ほら、この剣とかも」
　そう言って、ジョシュアは隅に置かれていた一本の剣を両手で持ち上げて来る。顔が映り込むほどに丹念に磨かれた剣身は、部屋の明かりをキラリと跳ね返している。
「……かっこいい」
　僕の素直な感想に、ジョシュアもまたイタズラっぽい笑顔で対応した。
「ウラ……ウラウラウラ」
　突然そんな、どろどろとした声が背後から聞こえてくる。振り返ると体の一部を裏返して縫い付けたような、人なのか──そもそも生き物なのかすらよくわからない物体が何かをしきりに呟いていた。
「なんだこいつ？」
「ウラ……オモテ……ウラウラ……」
　繰り返し呟きながら、ジョシュアの手元をじろじろと眺めている。
「これ？　欲しいの？　いいよ、いっぱいあるからさ」
　そう言ってジョシュアは片手に握っていた小さなサイコロを一つ、その物体へ渡した。その物体はサイコロをつまんで眺めたり、手のひらで転がしたりしてみている。
「イチノウラ……ロク。サンノウラ……ヨン」
「そうそう、サイコロって表と裏の目を足すと、七になるんだぜ。面白いよな」
　その奇妙な体をした物体を相手に、ジョシュアは臆することなく、ごく普通に接している。物体は、裏返された部分には血管が走っており、僕にはそれが少しだけ恐ろしく感じていた。
「ウラ……キミハ？　ウラ？　ウラ……ウラ？」
　その物体が唐突に、ジョシュアに何かを問い掛ける。が、その意図がわからずに、ジョシュアも僕も首を傾げてしまった。その後も物体はまたウラ、ウラと呟き続け、底知れない気味悪さを感じ始めた僕は、ジョシュアを促して、また違う部屋を探すために廊下へと出た。

歩き始めて数分後、ジョシュアがまた別の部屋の扉を発見した。僕が先頭を歩いていた時には、次の部屋を見つけるだけでも数十分は掛かった──が、そんな事を言ってもきっとジョシュアに変な目で見られてしまうだけだろう。
「…あれ？　あれ、先生じゃない？」
　ジョシュアがそう言って、扉を半分開けたところで手を止める。僕もその隙間から部屋の中を覗いてみたが、見慣れた背中がその部屋の奥の椅子に座っていた。二人で顔を見合わせて、足音を立てないようにその背中へと近づいていく。こちらに気づく様子はない。
「……ていっ」
　しばらく二人で背中をつついたり、髪の毛をくるくるとしていたりしたが、全く反応しない事に飽きてしまったのか、ジョシュアが先生の腰にパンチを入れた。音から察するに、軽いものだったはずだが、先生は重いパンチを喰らったようなうめき声を一つ漏らして、目の前の机にうつ伏せになる。大丈夫だろうか。
「……ジョシュア君に……アレン君か。ジョシュア君にはいつも言っているけど、腰を強く叩くのはやめてくれないかな」
　こちらを振り返り、まずジョシュアを、次に僕へと視線を移す。僕を見た時、先生は少し驚いたような表情をした。その後、何かを思索する素振りをしていたが、やがて、一人で納得したのか、小さく頷いた。
「腰、ダメなの？　じゃあ、脇腹は？」
「いや……場所の問題じゃなくてね」
　先生はジョシュアの問いに苦笑を交えながら応じていたが、突然顔色を変え、さっと脇腹を押さえる。
「先生、こんな所で何やってるんだ？　僕の夢に先生が出てくるなんて珍しいな」
「……夢、とは少し違うね。ここでの行動は、慎重にならなければいけない」
　このセカイが夢だという事を、先生はあっさりと否定した。やはり先生は、セカイについて何か知っているのだろうか？
「なら先生、僕達はどうすればいいの？」
「君達は、この部屋でじっとしていた方がいい。……これ以上、扉を開けてはダメだ」
「……それって」
「ああ、もう僕は行かないといけない。先生の言う事、聞けるよね？」
　僕の言葉を遮るように、先生は慌ただしく言葉を発し、僕達の視線を捉える。ジョシュアはその視線からぱっと目を逸らし、顔を横に背けた。
「ああ、僕がいるから大丈夫だって先生！　えっと……大船にのった気でいてよ！」

「……君がそうやって自信満々に言う時が、一番不安なんだけどな。任せたよ」
　そう言って、先生は腰をゆっくりと上げて、僕達の横を通り過ぎ部屋から出ていった。結局、先生についての謎を解くことは出来なかった。胸の辺りがモヤモヤとする。
「んーこの部屋ってあんま遊ぶものないんだけどな……あっ、そうだ確かあそこに……」
　先生の姿が完全に見えなくなった直後、ジョシュアは退屈そうに唇を尖らせる。どうやら、部屋を出るな……という先生の言いつけを守る気はあるらしい。何かを思い出したように部屋の隅に置かれた本棚へと走って行ったかと思うと、棚と壁の僅かな隙間を漁あさる。数秒後に、そこから銀色の銃を取り出した。
「ロシアンルーレット！　やろうぜ！」
「ロシアンルーレットって……銃に弾を一つだけ込めて、順番に自分の頭に撃つあれ？」
　お金持ちの家というのは、子供の内から生死を賭けた遊びをするのだろうか。記憶を失った今、昔のことに確信はもてないが、おそらく生まれた時から一般庶民であろう僕には到底理解出来ない遊戯だった。
「違うって！　ホンモノだと危ないだろ。これ、良く出来てるけど玩おも具ちゃだよ。ここにペイント弾入れてさ、外れだったらここから針が出てきてパンッてそのペイント弾が割れるんだよ。な、それならやれるだろ？」
「……いいよ」
　ジョシュアの説明を聞いて、ようやく納得する。それでも随分やんちゃな遊びだということには変わりはない。服も汚れてしまいそうだし、あまり乗り気ではなかったが、ジョシュアが段々必死になってきたので、誘いに乗る事にした。ジョシュアは嬉しそうに慣れた手つきで銃にペイント弾を仕込み始める。
「よーし、弾数は六発！　その内一発が、ピンク色のペイント弾だ！　ほら、アレン。お前からでいいぜ、何発か打つ前に宣言しろよ」
　ジョシュアは僕に、銃をひょいと投げ渡した。手から滑り落としてしまいそうになったが、なんとかキャッチする。そして三発、と宣言し、カチカチカチ、と引き金を引いた。
「おっ、三発か。中々いいんじゃない？　僕は一発ね」
　そう言って、ジョシュアは一回、引き金を引いた。これで残りは二発、僕が一回引き金を引いてペイント弾が割れなければ僕の勝ちだ。しかし、引き金を三回引いた後に気づいた事があり、何となくだが僕は負けを予測していた。服が汚れないようにと頭を少し傾け、一発と宣言し、引き金を引く。
　──パンッ！
　見事に、ピンク色の血飛沫が僕の髪を染める。弾の当たった部分は少しじんとした。

「あーあ、残念だったな！」
　ジョシュアは、片手をズボンのポケットに突っ込み、にっ、とイタズラっぽく笑う。
「……そういえばジョシュア、弾、仕込んだ後にシリンダー、回してなかったよね」
「ん？　ああ、そうだな！　だから僕には位置はバレバレ。でもなアレン、そういうのはやった後じゃなくて前に言うもんだぜ！」

そう言って、さらに白い歯を見せた。僕の髪は犠牲になったが、ジョシュアが楽しそうで何よりだ。つられて僕も、少しだけ口角を上げる。
「さて、片付けないと。ほら、タオル。あんまり力入れなくてもとれると思うよ」
　いつのまに用意していたのか、ジョシュアは僕に白くてふわふわと

したタオルを手渡してくれた。その後、さらに別のタオルを取り出して床に弾け飛んだペイント弾の痕を丁寧に拭き始める。
「……お姉ちゃんやお兄ちゃんもたまに遊んでくれるんだけどさ。勉強で忙しいって、全然やってくれなくなったんだ。だから、久々に遊べて嬉しかったよ。……母さんや父さんも、最近はなんだか慌ただしくて、全然こっちを見てくれなくなったし」
　後片付けをしながら、ジョシュアがぽつりぽつりと僕にそう零した。
「兄ちゃんはさ、サッカーとか、すげー上手いんだぜ！　お姉ちゃんも、難しいテストでいつも一番を取ってくるんだ。……僕には、何にもないけど」
　喜々として自分の兄や姉の事について語ったジョシュアだったが、その後、自分の話になった途端、唇をぎゅっと噛み締め俯く。
「……ジョシュアは、面白いよ。色々な話をしてくれるし、イタズラも……やりすぎる所もあるけれど、想像力が豊かだ」
　僕がそう話し掛けると、ジョシュアはぱっと顔を上げてこちらを見つめる。
「アレンは、僕に何かあるって……持ってるって、言ってくれるんだな」
　そう言ってジョシュアは、また照れくさそうに僕から視線を逸らした。その横顔は、先程のつらそうなものとは違い、何かから解放されたような表情だった。よかった、少しだけ元気を取り戻せたみたいだ。
「さて、ロシアンルーレットも終わっちゃったし、もうここには他にやる事が無いんだよな。まあ……じっとしてろって言われたら、逆にじっとしてられなくなるし！　違う所に行くか！」
　汚れたタオルを畳んで近くの机に置き、ジョシュアは僕の手を引っ張る。
　これ以上扉を開けてはいけない、先生の言葉が僕の脳内で繰り返し再生されていた。その声は次第に重なりあってノイズを帯び、やがて不快な耳鳴りへと変わっていく。

『━とある日、どこかで雷が落ちた日でした。父親のお城は、崩れ落ちました』
『お城は崩れ、お金はありません。ひどく悩み、そして少年が最後に見た父親は、空中に浮いていました』
『少年は、母親に訴えます。しかし、母親はこう言いました』
『━こんな時に、なにを言ってるの！　私達は、今とても疲れているの。そんな嘘は、二度とつかないでちょうだい━』
『少年は何度も、何度も訴え、母親を父親の元へ連れて行こうとしましたが、やがてその手をゆっくりと離しました』

「……どうしたアレン？　ごめん、手痛かったか？」
　気づくとジョシュアは僕から手を離し、不安げな表情でこちらの顔

を覗き込んでいた。大丈夫だよ、と伝えたくてジョシュアに視線を合わせると、彼はなぜかさっと目を逸らした。それからホッとしたような表情を浮かべ、ドアノブに手を掛ける。
　──もしかしたら、ジョシュアは人の目をずっと見る事は苦手なのだろうか。
「どうする？　……行くか？　……やめるか？」
「…………行く」
　ジョシュアの問いに、少し間を置いてから、でもしっかりと僕は答えた。行くしかないんだ。それは、このセカイに来た時から覚悟していた事だった。
　これからどんな事が起きるのか、何を見てしまうのかは、なんとなくわかっていた。それでも前に進むことをやめない僕もまた、どこか壊れ始めているのかもしれない。
　ジョシュアは僕の方をまだ心配そうにちらちらと振り返りながら、扉を開け廊下へと出た。その後はまた二人で、長く続く廊下を真っ直ぐ歩き始める。
　十数分歩いた所で、目の前に白い壁が現れる。ここで行き止まりのようだ。
「ここにしか扉はなかったな。本当はもっとこう、ずらーっと並んでるはずなんだけど」
　手をばっと横に大きく広げ、どこか悔しさを滲ませながらジョシュアは言った。彼はそのままドアノブに手を掛け、その扉を開ける。その瞬間に、甘いにおいがふわっと舞い込んで来た。
　部屋の中を覗き込むと、中央に置かれたテーブルの上に、小さなイチゴをちょこんと乗せた真っ白なショートケーキが二つ並べて置かれているのが見えた。
「おっ、これ父さんが家に帰ってくる度に買ってきてくれるケーキじゃん。何か、有名なパティ……お菓子を作る人が、作ってるらしくて、すげー美う味まいんだぜ。結構甘いけど」
　そう言いながら、テーブルへと近づいていく。後を追って近づくと、その甘い香りはより強くなり、僕の食欲を刺激してくる。
「おいアレン、手で食べようとするなよ。服もべとべとになっちゃうしさ、えっと……ほら、ここにフォークがあるじゃん」
　そう言いながらジョシュアは、机の下へと潜りフォークを取り出した。何故そんな所にフォークがあるのか、また、彼はどうしてそれを見つける事が出来たのかなんて、その甘い誘惑の前では質問する気も起きなかった。
　ところが、ジョシュアが差し出すフォークを手にしようとした瞬間……。
「メエ～」
　机の下から、のんきな、力が抜けるような声が聞こえてきた。同時に、ひょっこりと大きな綿毛に立派な巻き角を生やした、羊のような生き物が顔を覗かせた。
「なんだ、お前も食べたいのか？　でも、人間の食べ物は動物には体

に悪い事が多いからさ。やめたほうがいいぜ」
「メエ～メエ」
「……しょうがないな、ホラ、イチゴなら多分大丈夫だろ」
　……僕にはその動物が何を言っているかは理解出来ないが、ジョシュアには理解出来ているらしく、ケーキの上に一つだけ乗っていた貴重なイチゴを、そちらに向かってひょいと投げる。羊のような動物はそれを空中でぱくり、と器用に口の中に収め、嬉しそうな鳴き声を上げる。
「僕達も食べようぜ。歩き疲れたしさ、ここで休憩しよう」
　ジョシュアは細長い三角形のショートケーキに、フォークを入れて一口サイズに切り分ける。そのままフォークで刺して、自分の口へと運ぼうとした。
「……食べないのか？　アレン、甘いもの苦手だったっけ？」
「いや、大丈夫。なんでもない」
　そう言いながら、ジョシュアよりは大雑把にショートケーキに切れ込みを入れ、フォークに刺し自分の口元へと運ぶ。口に含んだ瞬間に、強い眩暈に襲われた。

「──い、おーいアレン、聞こえるか？　大丈夫？」
　遠くから自分を呼ぶ声が聞こえて、それは段々と近づいてくる。意識がハッキリとした時、ジョシュアが心配そうに上から僕の顔を覗き込んでいた。
「大丈夫……あれ？　ここ、さっきの部屋じゃないね」
「ん？　ああ、そうだな。僕も頭がくらっとしてそのまま寝ちゃったみたいでさ。起きたらもうここにいたよ」
　ジョシュアは自分の後頭部をさすりながら、僕に言った。意識を失った際にぶつけたのだろうか。
　辺りをぐるりと見回してみて、気になるものといえばただ一つ。目の前に異ような雰囲気を放ちながら微かに揺れ動いている、赤いカーテンだ。時折その隙間から、真っ暗な闇がこちらを覗いている。
「……なんだろう、こんな部屋あったっけ？」
　ジョシュアが首を傾げた。カーテンの隙間をやたら気にしている様子で、先程からそわそわとしている。
「二階で声がするって言ってた時も思ったんだけどさ、ジョシュア怖いのキライなの？」
「えっ？　いや！　怖くないぞ！　ただ、隙間とかってさ、何か覗いてそうでさ……そういう視線って、なんとなく感じない？」
　それは遠まわしに怖いと言っているのではないだろうか。カーテンをばっ、と開く。中は完全に真っ黒に塗り潰されていて、光はどこからも入っていないようだった。
「……入るの？　えっ、これ進んでいくのか？」
「ここしか、入れそうな所無いから……僕が先に行くよ、それなら怖

くないでしょ？」
「違う！　違うぞアレン！　怖くは、ないんだ！　……でも、任せた」
　ジョシュアは素早く後ろへ回り込むと、僕の服の裾を掴んだ。僕はそのまま慎重に、闇の中へと足を踏み入れた。

「…………」
　特に話もせずに闇雲に歩いていたら、突然ジョシュアが足を止めた。
「どうしたの？」
「いや、なんかさ。ずっと変な感じがしてるんだ。何か足りないような……」
「何かって……何？」
「わからない。わからなくて、胸の辺りがモヤモヤとしているんだ」
　服の裾がさらにつん、と引っ張られる。先程から何度も見えない何かに驚いては服を引っ張ってくるので、僕の服の裾はだぼつき、よろよろになり始めていた。
「アレンはさ、無くしたら怖いものって、ある？」
　ジョシュアが唐突に、僕にそんな質問を投げ掛けた。
　—既に記憶を無くしている今、やっと取り戻し始めた記憶をまた失うのは怖いと思う。しかし、この記憶が本当に僕のものだったかもまだ確信が持てず、不安だった。
　そんなことを考えていると、名前を知らない感情が浮かび上がり、そのまま僕を沈めていく。
「……あっ、……ごめんな、アレン」
　ジョシュアは何かを思い出したように声を上げると、僕に悲しそうな声で謝った。「大丈夫」と僕は答えて、またジョシュアを背後に従えて前進する。
「暗闇ってキライだったんだけどさ。今は何か、ほっとするな。……何も見えないし、見なくていいからかな」
　僕の背中に向かってジョシュアは、らしくなく小さな、弱々しい声で呟く。それに対して何と言葉を返したらいいのか模索している間に、前を探る手が何かに触れた。ぺたぺたと色々な所を触ってみると、それはどうやら壁のようだった。しばらく壁沿いに歩いてみると、やがて何か突起物のようなものを発見する。どうやらドアノブのようで、つまり今僕の目の前に現れたのは、扉だった。
「開けるのか？」
　突然の背後からの声に、ビクッと肩を震わせる。じんわりと汗が滲み始めてきた。
「……なんで？」
「いや……なんかさ、何となくなんだけど。入りたくないっていうより、入れたくないっていうか……僕もよくわからないんだけど。……入るのか？」

再度、ジョシュアは僕に問い掛けた。この先にあるものは、僕は何となく──いや、しっかりと理解していた。それでも、僕はこの扉を開けようとするのか。
「アレンが入るっていうなら、良いんだ」
　ジョシュアはそう言って、僕に判断を委ゆだねた。中途半端に取り戻した感情が、足枷かせとなり、扉を開けようとする自身の手を引き止める。
　──どうして、こんな気持ちにならなければならないのだろう。
『──なら、俺が手伝ってやろう！』
「えっ？」
　何処からかそんな声が聞こえてきて、誰かが僕の体を押す。同時にドアノブは捻られ、部屋の中へと引きずり込まれた。僕達二人は前のめりになり、そのまま重なるように倒れる。その部屋は、今までいた部屋よりも僅かに明るかった。
「いてて……開けるなら開けるって言えよな、アレ……」
　ジョシュアが僕に抗議するが、その言葉はふいに途切れた。
　違和感を覚えた僕は上に乗っているジョシュアを押しのけ、体を起こす。かなりの力で押してしまったにもかかわらず、ジョシュアは上の方を呆然と見つめたまま、小刻みに震えていた。
　その視線を追ってみると、天井から大きなてるてる坊主のようなものがぶら下がっていた。ゆらゆらと、風も無いのにてるてる坊主はその大きな体を揺らしている。
「クリック？　……クラック！」
　耳元で、ジョシュアではない別の声が聞こえてくる。そうだ、僕の体を押した声。こんな声を出すのは、チェシャ猫以外、他にはいなかった。
「何してるんだ？　こんな所で！　来るなって言われただろ？　なあ、アリス！」
　チェシャ猫はいやらしい笑顔で、ジョシュアへと語りかける。しかし、ジョシュアは上を見たまま震えているだけで、チェシャ猫の言葉には反応しなかった。
「眼中にないってか。……そこにぶら下がっているてるてる坊主が、そんなに気になるのかい？」
「は？　……違う、あれは母さんだ、ここは母さんの部屋だ、いや……違う、違う違う違う！　僕の母さんじゃ……！」
　さらにしつこく紡つむがれるチェシャ猫の言葉に、ジョシュアはようやく反応を示した。その顔は青ざめ、今までに見た事の無いような表情へと歪ませていく。
　……あのてるてる坊主が、お母さん？
「おや？　こっちのアリスだけには、あれが別のものに見えるらしいな？」
「ち、違う、違う、違う……母さんは、あんな目じゃ……」
「ほう？　じゃあ、どの目だ？　……教えてくれよ！」
　チェシャ猫がジョシュアに近づき、両手を広げる。その瞬間、部屋

中の壁や家具に様々な色をした人間の目が瞼を開き、こちらを見つめる。一斉に浴びせられた視線に、僕は小さく悲鳴をあげてしまった。
「！！！！！　あっ……！　おい……嘘だろ……だって、あの時空中にぶら下がっていたのは……なあ、アレン」
　ジョシュアはすがりつくように、僕の腕を強く掴んだ。
「なあ、違うよな？　これ、違うよな」
　必死な目で、僕を見つめるジョシュアの顔は、しだいに黒く変色しはじめ、ぼろぼろと泥のように崩れ始めた。落ちた泥がジョシュアの服をべっとりと汚していく。僕はその光景にただ怯えてしまい、首を横に振る事しか出来なかった。
「……なんで、そんな目で見るんだ？　なんで……なんで、こんな目に遭うんだ」
「今更何言ってんだアリス！　散々嘘をついて、目を引こうとして、その結果がこれなんだぜ。あの時ああしておけば、何て船旅はただの時間の無駄さ」
　ジョシュアが崩れていく様子を見て、チェシャ猫はさらに愉快そうに目を細めた。吐き出してしまいそうな程の不快感と、怒りに似た感情が同時に込み上げる。
「やめろよ！　…………やメてよ」
　ジョシュアはそう言ったっきり、ぷつり、と事切れたように動かなくなってしまった。僕はもしかして死んでしまったのか、という不安に駆られてジョシュアへと手を伸ばした。その瞬間、僕の脳天を貫くような痛みが頭に響き渡る。

『──少しの時間が経ち、少年の姉兄が母親を、父親のいる方向へ連れて行きました』
『僕が言ったときは、ウソだと言ったのに。どうして。あっちには、何かあって僕には何もないから？』
『今までのもウソだってわかってた？　なら、わからないウソだったらいいのか？』
『──少年は、自分を磨く事を放棄しました』

「……あーあ。もうちょっと楽しめると思ったんだが……もう潰れちまった」
　その声にハッと顔を上げると、チェシャ猫は先程とは打って変わってつまらなそうに口角を下げ、大きなため息を吐いた。そのままジョシュアから離れ、天井を見上げる。
「オマエにも、あれは馬鹿でかいてるてる坊主にしか見えないだろ？　ああ、それが正解さ。別にオマエが狂ってる訳じゃあないから安心しな。あのアリスにだけ、私が特別な魔法を掛けてやったのさ」
　チェシャ猫はまるでおとぎ話に出てくる魔法使いのようなセリフを言ったが、その内容はあまりに残酷なものだった。つまりは、ジョシュアには自分の母親があのてるてる坊主のように、首を紐で括くくって……。

「オマエはいつ潰れちまうのかな？　いや、潰してる側か？　ならオマエが死ぬ程嫌っている僕とは変わらないんじゃあないか！　ヒトのキライな部分ってのはな、自分も無意識に他人にやってるもんだぜ」
　チェシャ猫の言葉が、僕の胸を突き刺す。そうだ、レティやチェルシーの時だって、扉を開けたのは僕だ。皆を壊したのは、セカイへ足を踏み入れた僕だ。
「おや？　ハツカネズミがやってきた。この話は、もうこれでおしまいだ。おやすみアリス！　また一つ、いい夢が見れたな。ほら、プレゼントだ」
　そう言って、チェシャ猫が僕の足元へ何かを投げ落とす。それは、小さなカギだった。
　すがりつくように、助けを求めるように、僕は足元のカギをそっと拾い上げる。また一つ、僕は僕を取り戻していく。

　──春の暖かな日差しが、とても心地良い日だった。前から借りたかった本を借りる事が出来、僕の気持ちは高揚していた。ここから三つ先の十字路を左に曲がり、真っ直ぐ行けば、僕の家がある。早く家に帰ってこの本を読みたい、そんな思いが僕の足を自然と速めていた。家に帰り着き、すぐさま扉のドアノブに手を掛け、手前に引いて──。

　──僕の体を、全身を、何かが締め付けていく。息が苦しい。心臓の音が、やけに大きく聞こえる。そうだ、あの時も、僕は扉を開けたんだ。
　……僕は、そこで──。

2

　からっとした暑さがじわじわと体力を奪っていく。季節は、春から夏へと変わろうとしていた。目の前には、規則的に並べられた赤レンガが道を作り、脇にある大きな庭は、花一輪に至るまで手抜きされる事なく見事に手入れされている。
「……予想はしていたけど、やっぱり暑いな」
　彼を迎えに行った時も、じんわりと身を焼くような暑い日だった。つまりは、ここも彼と出会った時のセカイだろう。
　彼……ジョシュア・バートレットは、今や財閥と言われる程の資産を有している大企業の、社長夫婦の息子だった。目の前に見える大きな屋敷は、その社長の自宅だ。一人で行けば、高確率で迷子になっていただろう。
　ここへ足を運んだ理由は、とある一件で少し様子が変わってしまったジョシュア君を一度見てもらいたい、という親友クリフからのお願いだった。なんでも、ジョシュア君のお兄さんと知り合いで、僕が事

件や事故で心に傷を負った子供達のカウンセリングをしている事を伝えたら、弟の事も見てやって欲しいと懇願されたのだそうだ。
「忙しいのにゴメンな、子供達は大丈夫なのか？」
「前はやんちゃな子一人だから心配だったけど、最近預かった子がとても真面目な子だからね。その子が居れば、安心さ。……あまり時間は掛からないだろうし」
　クリフが苦笑気味に謝罪をし、僕は軽く返事をした。そのままクリフの案内に身を任せ、屋敷の玄関口までの長いレンガ道を歩いていった。
　扉に取り付けられたドアノッカーで、クリフが扉を数回叩く。しばらくして、随分とやつれた、少々年老いた一人の女性と、その体を隣で支える青年が現れた。
「よう、クリフ。……と、初めまして。僕はブラン・バートレットです。お噂はかねがね……こっちは僕の母さんです」
　ブランと名乗った青年はクリフに軽い挨拶をした後、僕へ改めて丁寧に挨拶をし、会釈をする。体を支えていた女性を気遣いながら、僕達を屋敷の中へと招き入れた。
　廊下に敷き詰められた真紅のカーペットが、高級感を漂わせている。時折、廊下の左右に配置されている甲かっ冑ちゅうが、屋敷中の光を浴び、照り輝いていた。白い壁には赤茶色の扉がずらっと、大量に並んでいる。数回、使用人らしき人達とすれ違い、その度に深々とお辞儀をされた。
「既にテレビのニュースや新聞記事にもなっているので、ご存知かもしれませんが……先日、僕の父が亡くなりまして。その日から、ジョシュアの様子がおかしくなったんです」
「ええ、連日報道されていますね。……心中お察しいたします」
　先日、これから会う少年や青年の父……あの大企業の社長が、自室で首を吊っているのが見つかり、新聞でも大きく取り上げられた。報道によると、社長が自殺する直前、会社でなんらかの不祥事があったために取引先から信用を失い、経営に大打撃を受けていたことが明かされており、今回の件もそれが原因では、と世間でも噂されている。
「突然の事でした……まるで何かに引っぱられるように、うちの会社は落ちていきましたよ。僕が跡を継ぐ予定ですが、不安だらけで……ああすみません、ここです」
　ブランは廊下にずらりと並ぶ扉の中から一つの扉の前で立ち止まってノックをする。扉の向こうで、はい、と少年の声が聞こえてきた。
　扉を開けると部屋の中には、小さな丸椅子にきちんとした姿勢で腰掛ける銀髪の少年が居た。美しい銀髪は、ニット帽により半分黒く染められている。
「お兄さんが話をしてくれる人ですか？　宜しくお願いします」
　少年は立ち上がり丁寧に、僕にお辞儀をする。家の事もあるだろうが、この年齢で既にしっかりと教育されているようだった。僕も名前を名乗り、挨拶を返す。
「……お兄ちゃん、僕、この人と二人っきりの方がいいな。話しやす

いし」
　そう言って、少年はブランにお願いをした。青年も頷いて、少年と僕以外は扉の外へと連れ出し、ゆっくりと扉を閉じた。
　扉の閉じる音を確認した瞬間、突然少年はズボンのポケットに手を突っ込み、丸椅子が一瞬傾くほどに勢い良く座った。その後足を組んで、驚いていた僕にイタズラっぽく笑いかける。
「僕、ジョシュアだよ。うちの人達、堅苦しくってやりにくかったでしょ？　僕と二人っきりの時は、楽にして大丈夫だよ」
　そう言って少年━ジョシュア君は肩を竦すくめた。なるほど、やはりこの子も年相応な一面を持っているようだ。先程までの態度は、おそらく来客用に作られた虚構なのだろう。
　余っていた丸椅子を借りて、ジョシュア君の目の前に腰掛ける。
「話をしろって言われたけどさ、僕、別におかしな所は何も無いよ。何の話するの？」
「そうだな……君の事が知りたいから、何か教えてくれると嬉しいな」
「……僕？　そうだなあ、サッカーが得意でさ、いっつも十回位シュートを決めるんだ。後は、勉強も好きだからテストは毎日満点だよ！」
　僕から目を逸らし泳がせつつ、彼はどこか自慢げなような、そうでないような曖昧な態度で答える。
「それから？　他にも、あるかな？」
「あとは……羽は無いけど、空高くまで飛べるんだ！　こっそり家を抜け出して、白い鳩と喋りながら空をおよぐんだ」
　こうした話を始める度に、ジョシュア君はそわそわと目を泳がす。子供らしい、背伸びをした嘘に僕は微笑む。そして、今回の主題を突きつけた。
「……お父さんについて、何か知ってる？」
　ジョシュア君は一瞬肩を震わせ、僕にゆっくりと視線を戻す。何かを考え込んだ後に、また僕から視線を逸らした。
「……知らないよ。浮いてる父さんを見つけたのは、お兄ちゃんやお姉ちゃんだし」
「本当？　一番初めに見つけたのは……誰かな。話を聞きたいんだ」
　彼は少し俯いて、唇を噛む。その後に小さく息を吐いた後、顔を上げた。
「僕。僕が、見つけたよ。ここで一人で勉強してたら、猫の鳴き声が聞こえてさ。その声を辿っていたらギイギイって、父さんの部屋から音が聞こえたんだ。だから、扉を開けたんだよ。開けた瞬間に、父さんが……」
　そう言ったっきり、ジョシュア君は口を閉ざしてしまった。きっと、自分の父親が首を吊る瞬間を見てしまったのだろう。僕は「それ以上はいいよ」と言って少年の背中をなでる。彼の体は、小さく震え始めていた。
「辛かったね、きっとその気持ちはすぐには忘れられないだろう。

……大丈夫だよ。ゆっくりでいい、話してくれてありがとう」
「……お兄さん、僕の話を信じてくれるの？　僕は、嘘つきなのに。この話も、嘘かもしれないのに、信じるの？」
　ジョシュア君は顔を上げ、すがるような目で僕を見つめた。僕が頷くと、ようやく少し緊張が解けたのか、肩の力を抜いた。
「そうだ……君と同じように辛い体験をした子達がいてね。僕のいる施設で、少しずつ辛い気持ちが和らぐように、一緒に暮らしているんだ」
「……そうなの？　辛いのは、僕だけじゃない？　……僕もさ、お兄さんの所で辛くなくなるようにお話しすることって、出来ない？」
　軽く話を振ってみると、ジョシュア君は興味を示したようだった。
「そうだな……出来るかもしれないけど、君のお母さんとかがいいよって言わないと」
「……多分、大丈夫だよ。母さんさ、僕の顔も見てくれないし、話も全くしてくれなくなったんだ。きっと、僕がキライになったんだと思う」
　そう言って、寂しそうな表情を滲ませるジョシュア君を連れ、部屋の外で僕達を待っていた彼の母親に、先程の話をしてみる。横で聞いていた青年やクリフは驚いた顔をして少し戸惑っていたが、母親の方はあっさりと了承した。
「……では、しばらく息子さんをお預かり致します。何かあればすぐにそちらにご連絡致しますから」
　僕はそう言って母親達に挨拶をすると、ジョシュア君を連れ、森の中にある施設へと戻ったのだった。

「せーんせいっ！」
　ジョシュア君が、僕の腰へとダイレクトに拳こぶしを入れてくる。あまりにも突然な出来事に、変な唸り声を漏らしながら前のめりに倒れてしまった。
「ジョシュア君、だから腰への打撃はやめてほしいと何度も……」
「だって先生、こうしないとこっちに気づかないじゃん」
　そう言って、ジョシュア君は頭の後ろで手を組んで、イタズラっぽく笑った。
「……初めての君の態度と同じように振る舞ってはもらえないものかな」
「えっ？　無理無理！　あれも、嘘だもん。あっちの嘘はつかないと、怒られるし」
　ジョシュア君は舌を出し、不機嫌そうな顔をする。こちらの彼が、本来の彼なのだろう。
「そうそう、はい、手帳。ちゃんと書いたよ」
　片側のポケットに手を突っ込んで、青緑色の手帳を取り出す。彼の手から手帳を受け取り、新しく記されたページを確認してみる。とて

も丁寧で、規則正しい文字がいくつも並んでいた。
「……ありがとう。また、僕も返事を書いて渡すからさ。ほら、もう寝る時間だよ」
「おう！　頼んだぜ、先生。おやすみなさい」
　ジョシュア君は丁寧にお辞儀をして、僕と挨拶を交わす。僕もおやすみ、と彼に返事をした。少々やんちゃが過ぎる所もあるが、彼は規則などはしっかりと守る子だった。

　庭に出来ていた木陰に移動し、その下へと潜り込む。ようやく、暑さから解放された安心感から、深い息を一つ漏らした。そのまま、彼の手帳の一番新しいページをめくってみる。

　おにいちゃんは、サッカーがうまい。おねえちゃんも、あたまがいい。
　でも、ぼくにはなにもなかった。
　なにもないのに、あるっていってしまう。もってないのに、もってるっていってしまう。
　いったあとに、すごくかなしくなる。そのうち、ぼくもどれをもってて、どれがあるのかわからなくなった。
　いってしまえば、だれかを、きずつけてしまうかも。でも、いってしまうんだ。
　先生、ぼくは、どうすればいいですか。

　彼は普段から、母親の気を惹きたくて嘘をつき続けていたのだろう。だから、父親の死を報告した際に信じてもらう事が出来なかった。報道が真実ならば、その時会社の事で悩んでいた母親も、精神的に安定した状態では無かったのだ。色々なことが重なってしまった結果があの日の出来事を招いてしまったのだろう。
　ジョシュアの兄が経営を任されることになったあの会社は、現在、少しずつではあるが回復傾向にあるとクリフから聞いた。母親の方も、徐々に精神的に安定してきているらしい。このままジョシュア君のケアを続けていけば、彼は元の生活へと戻る事が出来るだろう。
……続けられれば。
　強い風が一つ吹いた瞬間、耳鳴りのような甲高い音が響き渡り、僕を包んでいた影が大きくなる。それは深さを増して、やがて闇へと変化していき、僕の体を飲み込み始めた。
　……おかしい。僕は、彼らにはちゃんとあの部屋から出ないよう――扉を開けないようにと伝えたはずだった。彼らが、僕の言いつけを破ったとは、にわかに信じられなかった。特に、ジョシュア君の暴走をいつもぎりぎりで止めてくれるアレン君もいたのに、だ。
「おやおや、こっちももうぶっ壊れ始めたのか！　脆もろいもんだな」

聞き覚えのある、しゃがれ声が耳鳴りのような音に混じり、僕の耳へと届く。目の前にはいつの間にいたのか、チェシャ猫がその闇の中に白い歯と目だけを浮かせていた。
「……君は、何かを知っているのかな」
「ああ！　そうだな、観察をしてくれと頼まれたんだから、ちゃんとやったさ。あのアリスは、扉を開いた。だからあのアリスは壊れてしまった。ただ、それだけの話さ」
　深くなっていく闇が、チェシャ猫のギラリと光る目と口をより一層、際立たせていく。本当の話かどうかわからないが、チェシャ猫の話によれば扉を開いたのはアレン君のようだった。
「そうか……彼が、ジョシュア君の扉を開いてしまったのか」
「さて、どうするアリス？　あと残るセカイは二つ。予定はもう何度狂わされたかな？　それとも、オマエ自身が狂い始めちまっているのかな？」
　チェシャ猫は僕を煽あおるような言葉を、ぽんぽんと投げ掛けてくる。だが、それら全てを僕は無視して、早口でチェシャ猫に伝えた。
「……君に頼みたい事がある。セカイに入るのは僕一人だけって頼み事は、君は叶かなえてくれなかったし、良いだろう？」
「ああ！　僕は止めたんだぜ。でも、ガキっていうのはやるなって言われた事はやりたくなる生き物だ。まあ、やれって言ってもやるんだけどな……シシシシ！　いいだろう、俺様に任せな」
　朦もう朧ろうとし始めた意識の中、チェシャ猫に用件を簡潔に伝える。そのまま、僕の体は深い闇と一体化していった。

　３

「おや？　前とは全く違う顔をされていますね。……いえ、察しがついていますので、お答えは頂かなくて結構です。カギの回収、お疲れ様でした」
　シロウサギは、事務的にそんな言葉を放った。僕も特に思う事もなく、ゆっくりと頷く。
「セカイはどうです？　慣れてきました？　……その反応を見るに、あまりお気に召してはいないようですが。まあ、僕も初めて来た時はなんでこんな所！　と思いましたし。今では、そんなに悪くないと思ってますけど」
「……シロウサギさんは、このセカイを何とも思わないの？」
「ええ、食料にも困りませんしね。世界より、僕はセカイの方が好きです。……まあ、アリスは好きでは無いようなので、戻りたくなったら一つ、方法を教えてあげますよ」
「本当？」
「カギを全て回収した後に、ですがね」
　シロウサギはそう言って、無機質な笑みを浮かべる。その名前に反して、愛嬌や可愛らしさは微塵も感じられない。どうして、こいつはシロウサギを名乗っているのだろう。

「……今使っているのがシロウサギ、ってだけですよ。名前は、大体アイツが決めますし。僕は面倒なので、それに従っているだけです」
　声に出していない質問を、シロウサギが淡々とした態度で答える。
「ただ、コロコロと変えようとするのは止めて欲しいですね。それに合わせて見た目も変えようとしてくるもんですから。……ああ、くそ。ムカついてきた」
　シロウサギの苛立ちがまた大きくなり始めていたので、僕はこっそりとその場から離れ、セカイへの扉が立ち並ぶあの場所へと移動した。
　肺はい腑ふを抉えぐられるような思いに僕はずっと襲われていた。中途半端に記憶を、感情を取り戻してしまった反動なのだろうか。それとも、セカイで扉を開けてしまったが故なのだろうか。いや、両方なのかもしれない。これは、誰のせいだ？　もう、湧き上がる感情の名前を思い出す事さえ億劫になり始めていた。
「そうやって、ヒトのせいにするのかい？」
　いつものように、チェシャ猫が唐突に僕の行く手を遮った。
「いつも自分のことしか考えてないくせ、不幸な目に遭うとヒトのせいにする。ヒトってのは、悪魔よりよっぽどタチが悪いと思うぜ、俺は！」
　ねっとりとした笑みを浮かばせながら、両手をブラブラとさせている。もうチェシャ猫に対して苛立ちや、不快感を抱く事も、疲れきってしまった僕には出来なかった。それまでも計算しているならば……悪魔。
「ああ、そうさ。私は悪魔、アイツも悪魔だよ。名前はテキトウさ。そんなの、僕らの中じゃもう必要がないからな」
　なら、僕らをアリスと呼ぶ事にも理由は無いのだろうか。
「ああ！　オマエの名前だって、別にどうでもいい。だから、皆同じように呼んであげるのさ。オマエは、アリやカエルの名前なんて気にするのか？」
　チェシャ猫にとって、僕らは、そのアリやカエルと何の変わりは無いという事か。きっと適当にそれらしい呼び名で呼んでいるだけなのだろう。僕は、自分の名前も必死に忘れまいとしていたのに。
「なんだ、あんまり楽しく無さそうだな？　周りに振り回されんなよ。世界ってのはクズなほど成功するように出来てるんだ。狂っちまった方が、いっそ楽だぜ」
　猫撫で声で、僕にそう語りかける。僕にはもうどの話が本当で、本当ではないかわからなくなり始めていた。思考が停止し始めている。小さな頭痛がしているだけだ。
「…俺のコトバなんて、ただの悪魔の囁きさ。今のコトバもオマエは真に受けるのか？　そんなに、つまらないやつだったかな？」
　僕の心を抉る言葉を吐き出したかと思えば、そのトゲを抜く言葉で手を差し伸べてくる。このネコは、何がしたいのだろう。どうして、こんな事を言うんだ。
「どうして俺がこんな事を言うのかって？　わからないのか。……ヒ

トを悪く言う事ほど、簡単な事はないからさ」
　当たり前だろと答えると、チェシャ猫は奇妙な笑い声を上げながら僕の目の前から消え去った。
　誰もいなくなった空間に、僕の息遣いや鼓動以外に聞こえる音は無い。得体の知れない不安が僕の背中を這いずり回る。僕は逃げるように、四番目のセカイへ繋がる扉のドアノブに、手を掛けていた。
　あの時に感じていた後ろ髪を引くような感覚も、足枷に阻まれているような感覚も既に感じられ無くなっていた。僕は、どうなってしまったのだろう。
　そのまま、僕はドアノブを握る手を回していた。この先、どうなるのかはわかっている。ただ、この空間から、不安から、全てから逃げたかった。
　そのまま引き込まれるように、僕の体は扉の中へと押し込まれた。

つきが、おちてきたんだ。まるい、おおきなつきが！
おかあさんにそう、いったらおどろいたかおをして、すこしほほえんだ。
ほんとうはつきなんかおちてなかった。
つきはそらからこっちをみおろしてた。
でも、おかあさんのそのかおをみるのがすきで、いろいろいった。
おおきなトカゲがしゃべったんだ、となりのおじさんはそらをとんだし、ネコがいけをおよいでいた。
はなしをするたび、おかあさんはたくさんおどろいて、たくさんわらってくれた。
でも、だんだんわらってくれなくなった。
そのつぎのひから、おかあさんはこっちをみてくれなくなった。

とあるひ、おとうさんがねたまま、つめたくなってるっていった。
ひさしぶりに、たくさんおどろいてくれた。すごく。
そのあとすごくおこられた。でも、やめられなかった。
まいにちのように、おとうさんがつめたくなってるっていった。
そのたびおどろいて、そのたびおこられた。
それがよかった。
おどろいてくれるときだけ、ぼくとはなしをしてくれるから。

へやにとじこめられた。べつに、テレビも、ある。オモチャも、ある。
でも、ちがうんだ。ちがうだろ？
おねえちゃんや、おにいちゃんはみる。ぼくはみない。
クモや、カエルがしゃべったらたいくつしないのになあ。
ああ、ちがう。…どうして？

おとうさんが、つめたくなった。ほんとうに。
そう、おかあさんにいったけどしんじてくれなかった。
ぼくのいうことなんて、もうしんじなくなっていた。
だいぶんじかんがたってから、おにいちゃんとおねえちゃんがきづいて、やっとそのことをしった。
みたことのない、かおをしてた。みたくない、かおをしてた。
おどろきも、おこりも、わらいもしなかった。
そのひから、おかあさんはなにもいわなくなった。
なにもいわないで、どこかをつめたくみつめるだけになった。

おにいちゃんは、サッカーがうまい。おねえちゃんも、あたまがいい。
でも、ぼくにはなにもなかった。なにもないのに、あるっていってしまう。
もってないのに、もってるっていってしまう。いったあとに、すごくかなしくなる。

そのうち、ぼくもどれをもってて、どれがあるのかわからなくなった。
　いってしまえば、だれかを、きずつけてしまうかも。
　でも、いってしまうんだ。

『先生、ぼくは、どうすればいいですか』

第五章　どくリンゴ

1

　四番目の扉に引きずり込まれ倒れた体を、ゆっくりと起こし部屋の中を見渡す。目の前の奥にある、漆黒に染められたピアノが高貴な存在感を漂わせている。その少し手前には、ピアノに劣らないほど高貴で不思議な雰囲気を放つ少女が立っていた。
「あらあらアリス、どうしたの」
　透き通るような長い黒髪。赤ワイン色のリボンがついた白のヘッドドレス。不思議な形状の黒いワンピース。そして、身が竦んでしまいそうなほど鋭く赤い眼光。ステラが僕に、いつもと変わらない無表情を向け見下ろしていた。
「そう、そう。遊びたいのでしょう。いいわよ。何して、遊ぶ？」
　普段聞く事は滅多にない、ステラの透明感のある声が僕へ語りかける。ただ少し、いつもよりは濁りを感じていた。ステラは、こんな声をしていただろうか。
「……クローゼット、開けましょう」
　僕の返事を待たずに、その鋭い眼差しでぼくを貫く。僕の体は、脳は、その視線にとらわれたかのように動き始める。ステラと視線を交えたまま、一歩ずつ、クローゼットへと近づいていくと、クローゼットの取っ手がぶつかり、背中に小さな痛みが広がる。
　ステラは静かに、僕の目を見つめている。彼女がどんな感情を頂いているのか、そもそも感情というものを持っているのか、僕は未だに知る事は出来ていない。
　後ろ向きのまま、手探りで取っ手を見つけ、両手で掴む。そのまま、体を後ろに傾けてクローゼットを開けた。

⚷

　冷たい風が肌を掠める。布団を被っているはずなのに、全身が強張る寒さだった。我慢出来ずに、体を急いで起こす。
　布団の外の景色は僕の予想とは違い、どこかの寝室などではなく、様々な形をした石のようなものが点在している屋外だった。辺りは閑散としており、葉を全て落とした黒い木々は寒そうにその細い枝を微かに揺らしている。
　ベッドから降り、此処はどこなのか確認しようと辺りを見て回る。あちらこちらに点在する様々な形をした石には、良く見ると名前のような文字が刻まれていた。
「ノースロップ……？」
　これは、墓石だろうか。ならば、ここは何処かの墓場なのだろう。
　そんな事を考えた瞬間に、痛みを伴った大きな眩暈と共に、いつもの声が僕の脳内へと語り掛け始める。

『──とある森の奥に、小さな街がありました』
『小さな街には、沢山の人が住んでいました。病気ひとつせず、皆健

康に過ごしていましたが、ある嵐の夜。突然の事でした』
『森に、呪いがかけられてしまったのです』

　揺らめく体を、足に力を込めて何とか支える。この痛みにも、慣れ始めていた。
　不意に大量の鳥が羽ばたいたような音がして、ビクッと肩を震わせる。見渡した限りこの墓地には僕以外、誰一人としていない。既に感情というものも麻痺し始めていたが、恐怖というものだけはどんな時でも忘れる事は出来ないようだった。
　──僕は何に怯えているのだろう。
　ひっそりとした、石がぎゅうぎゅうに敷き詰められた道を歩き始める。歩く度に、コツコツと硬い足音が静穏な空間に響き渡る。早く誰かと一緒になりたい。このセカイの何処かにステラがいるはずだ。歩速は自然と速くなっていった。

　墓石は迷路のように一方で道を塞ぎながら、もう一方で進むべき道を示していた。何度か行きつ戻りつしながらも、少しずつ前へと進んで行く。しばらく進んだ所で、目の前に鉄格子の扉が見えた。錆さび付いていて、触るとざらざらとしている。
　──もう、扉は開けたくない。
　鉄格子の扉を前にして、足止めを喰らってしまう。しかし、鉄格子の端の方はかなり錆付き、崩れ落ちて巨大な穴を作っていた。屈んで行けば通れそうだ。ドアを開けずして先に進めることに奇妙な安心感に包まれ、膝をつきその穴を潜り抜ける。
　膝に食い込んでしまった小さな石を払い落とし、僕はまた足を動かし始めた。鉄格子の先に墓石は無く、代わりに黒くやせ細った木々が手前へと連なり道を作っていた。僕はその案内に従うように前進して行く。
「……？」
　道の先に、二つの影が見えた。少し歩みを速めて近づくと、そこに居たのはステラと──先生だった。二人は揃って椅子に座り、先生は赤茶色のくしでステラの髪をとかしている。
「あら、アレン」
　ステラが先にこちらに気がつき、顔を軽く傾ける。先生も後を追うように、その手を一旦静止させて僕を見た。
「ああ、ありがとう先生、もういいわ。それに、先生も髪、ちゃんと手入れしなきゃ」
「いや……先生はいいんだ。これは、切り方を知らなくて伸びてるだけだし」
「？　……そう」
　ステラは怪訝そうな顔をした後に僕に向き直る。
「じっとしてるのも、退屈ね。どこかへ行きましょう。アレン、貴方

について行くわ。先生は、ここから動かないって言うし」
「……ステラ君」
「いいじゃない。ずっと同じ所にいたって、何も変わらないわ。先生はどうするの？」
　先生は苦い顔をした後に、少し何かを考え込む。その後に、顔の緊張を緩めて、
「……君達は、本当に言う事を聞いてくれないな。僕もついて行くよ」
　少々呆れ気味に、肩を竦めながらそう言った。
「決まりね。それじゃあアレン、行きましょう」
　そう言って二人とも椅子から腰を上げ、そのまま、僕の後ろへと回った。ステラはともかく、先生まで僕に任せっきりにして良いのだろうか。先生は何も言わずに、ステラと共に僕の行動を待っているが、未だ、先生への不信感は拭いきれていない。
「どうしたの？　早く行かないと、風が冷たくて凍えちゃうわよ」
　ステラが僕の背中を、軽く小突く。そういえば、彼女とこんなにしっかりと会話をしたのは今までで初めてだ。足を前へと動かし始めながら、彼女に声を掛けてみる。
「……ステラって、結構喋るんだね」
「そう？　別に、喋るのがキライな訳じゃないし。話し掛けられれば話すわ。ただ、私から話をする事がめったに無いだけよ」
「でも、ジョシュアは結構ステラに話し掛けてるよね」
「……あの子は、私のキライなものを持ってくるから。気に食わないだけよ」
　ステラは僕の問いに、淡白な態度で答える。いつもより、声が近い。もっと聞いていたいと思ったが、時折吹き抜ける冷たい風が僕の唇を凍えさせ、硬直させる。結局それからは皆無言で歩き続け、あとは時折ステラが僕に白い指先で道を示すだけとなった。

「……この辺りは、穴だらけだね。二人とも、躓つまずかないように気をつけて進むんだよ」
「先生もよ。貴方が一番、心配だわ」
　しばらく進んだ先には、ぽつぽつと墓石の手前に穴が空いていた。覗いてみると、かなりの深さがあるようで、底は見えなかった。
「私くらいなら、入れそうな大きさね」
　ステラは穴を見つめながら呟いた。その声は、いつもよりやや温度が低く感じられた。
「でも、底は見えないし……あれ？」
　穴の中に片手を入れて何度か空をきっていた途中で、何かもっさりとした触感のものが手に当たった。鷲掴むと、動き始めたのでビックリして、勢い良く手を引き上げた。
「……虫の足？」

ステラが若干不快感を滲ませながら、僕から少し距離を置く。虫が苦手なのだろうか。
「やめて、近づけないで頂戴。……アレン、貴方キレイな顔してるけど、やっぱり彼と同じ男の子ね」
　僕の腕の中で、複数の虫の足のようなものはわさわさと蠢うごめく。ステラは、その動きを確認するとさらに僕から離れていった。
「ステラの言うキレイな顔って……何だろう」
「確か、前に聞いた時死んだ人のようにキレイな顔、と聞いた気がするよ」
　先生が近づいてきて、僕の疑問に丁寧に答えてくれた。
「……それは僕が預かっておこう。ずっと手に持ってたままじゃ、アレン君が転んだ時に危ないからね」
　そう言って、僕に手を差し伸べる。今の先生は、いつもと変わらない。僕達の事をずっと気に掛けてくれる、優しい先生だった。僕は、人を疑う事も苦手なのだろうか。
　手に持っていた虫の足を、先生に渡す。先生はわさわさと蠢き続ける足を受け取ると、一瞬ピクリ、と顔を歪ませてから、腰に着けたポーチにそれを入れた。先生も虫はあまり得意ではないのかもしれない。
　離れていたステラはいつの間にか僕の隣に戻っていて、何食わぬ顔をしてそこに立っていた。
「……ここは、もういいでしょう。違う所に行きましょう」
　そう言って、ステラは歩き始めた。慌てて、僕と先生もその後を追う。僕一人の時は、この迷路のような墓地に度々行く手を阻まれていたのだが、ステラと一緒になってからは彼女が道を示してくれていた。今まで巡ってきたセカイは皆、施設に暮らす子供たちの記憶の中から作られていたようだったが、このセカイは何処まで行ってもお墓ばかりだ。
「ここ、どこかわかる？」
「お墓。人が死ぬと、地面に埋められてあの石に名前を刻まれるの」
　……予想から若干ずれた回答が返ってきて、そのまま口を噤つぐんでしまう。やはり、彼女と会話を長く続ける事はなかなか難易度が高いみたいだ。僕は黙って、彼女の白い指先が奏でる指示に従って、ひたすら前へと足を動かした。

⚷

　うねうねと乱立する墓石を避けながら前へと進んでいたら、一つの影が見えた。それは蜘蛛のようだったが、普通の蜘蛛よりも何倍も大きく、そして足を持っていなかった。
「お？　おう！　ちょっとこっちに来てくれ！　助けて欲しいんだ！」
　予想以上に低い声で、僕達に呼び掛ける。少しだけ戸惑い、先生の方を振り向いた。

「……セカイの住人には、あまり干渉はしない方がいいんだけどね。今回は大丈夫だろう。何かあったら、僕が守ってあげるから」
　先生は微笑んで、そう後押しをする。その言葉に渋々従い、蜘蛛のようなものの元へとゆっくりと足を運ぶ。
「ああ！　良かった。聞いてくれよ、ボーっとしてたら足を盗られちまってさ。探そうにも、足が無いから歩けない！　お前さん達、何処にあるか知らないか？」
　体から浮き出る八つの目が、僕達をギラリと見つめる。改めて見ると、蜘蛛っていうのはゾッとするような目をしている。
「……足みたいなの、さっき拾ったじゃない。それじゃないの？」
　ステラがそう呟くと、先生が腰のポーチに仕舞っていた虫の足を取り出す。手に持った瞬間、それは嬉しそうに蠢き始めた。
「おう！　おう！　それだよ！　早速、付けてくれ！」
　ちらり、と見ると先生の顔が段々と青ざめていっていることに気づいたので、僕が代わりにやるよ、と先生から足を受け取る。八本の足を、僕は蜘蛛のようなものへと一本ずつ丁寧に取り付けていった。
「いやあ、助かったよ。お礼に秘密の場所を教えてやるさ。目、とじろ！」
　命令口調で、蜘蛛は僕達に言い放つ。今まで事の成り行きを無表情で見守っていたステラだったが、蜘蛛の言葉に僅かに苛立ちを露わにした。
「……嫌よ。私、暗いのキライだし。それに、蜘蛛もキライだもの」
「気性の荒い性格のようだし……目を閉じている間に襲ってくる可能性もあるよね」
　続いて先生も、不審そうに蜘蛛をじろじろと眺め始める。
「なんだってんだ！　さっきまで、喋らなかったくせに！　いいから閉じろ！　綴とじろ！　トジロ！」
　疑いの眼差しを一身に浴びた蜘蛛は憤いきどおり、僕達にそう連呼して目を閉じるよう強要してくる。先ほど戻してあげた八本の足を、水の上に落されたかのようにばたつかせ、わさわさと蠢いていた。
「……ここは、彼の言うとおりにしておこう」
　先生が僕達にそう言って、目を閉じる。ステラも幾らか不満は残っていた様子だったが、先生に従い目を閉じた。僕も、静かに目を閉じる。
　体の軸がぶれ始め、空間が歪む感覚に襲われる。そのまま強烈な眩暈に襲われ、意識は静かにどこかへと引きずり込まれていった。

　目を覚ますと、そこには墓は一つも無かった。冷たい石の道が、真っ直ぐに伸びている。その脇には、浅黒い鉄格子がびっしりと並んでいる。
「……あら。…………そう」
　ステラだけ、何かを理解したみたいだった。ここが何処なのか聞い

てみたかったが、先程同じ事を聞いた時の曖昧な返答を思い出し、そっと喉の奥へと押し込んだ。
　少し進んだ先に、水が張られた噴水が見えた。噴水の両脇にある女神像は、首がもがれていて近寄りがたい雰囲気を漂わせている。
「……少し疲れたわ。ここで、休憩しましょう」
「ああ……そうだね。ここで、一休みしようか」
　ステラの提案に、先生と僕は同意した。噴水の前まで行き、その縁に腰を下ろす。水を噴射していない噴水は、下に張られた水をただ静かに揺らめかせている。覗いてみると、僕の顔を映し出した。僕は、こんな顔をしていたっけ。向こう側にいるもう一人の僕は、最後に見た時よりもずっと虚ろな目をしている気がする。
「ここは、一体何処なの。……知っている場所に似ている。でも、こんな場所は知らないわ。無駄に広くて、歩き疲れるし」
「そうだね、道が入り組んでいて迷ってしまいそうだしね」
「……いつも道に迷うのは、先生でしょう。あのたまに来るお医者さんが言うように、本当に頭は良いのかしら？」
　ステラが若干トゲのある言い方で、先生に言葉を返す。先生は苦笑しながら自分の後ろ頭をぽりぽりと掻いた。
「……僕は、そこまで頭は良くないよ。色々褒められたりした事もあるけれど、僕自身はどうしてもそうは思えないんだ」
「そう。先生の部屋にある書物も、難しそうなものばかりだし、そうなのでしょう。私には、未だに理解は出来ないけれど」
　そう言うと、ステラはスカートの裾を整えながら、黒く透き通る髪を手でときはじめる。白い肌が生気を感じさせないからか、その姿はまるで人形のようだ。
「……先生は、何を調べているの？」
　ステラと先生との会話が途絶えたので、思い切って、僕はずっと気になっていた疑問をぶつけてみる。先生はこちらに少し困ったような表情を向けると、また前へと向き直し、
「……内緒」
　いつもより暗めの声で、返答した。
「どうして？」
「……僕のやりたい事は、いつも否定されてしまうんだ。それをするのはおかしい、なんて、僕の事をよく知らない人間から散々ね」
「先生は、そう言われたらやめてしまうの？」
「うん。妙に納得してしまって、その時は全部やめちゃったんだ。そうして、気がついた時には、僕は少しだけつまらない人間になってしまっていたよ」
　俯き気味に、どこかを見つめながら先生は微かに微笑んだ。
「だからね、今やってる事は皆には内緒にしてる。……僕は流されやすいからね。本当にやりたい事は、誰にも言わないことにしたんだ」
　それ以上、先生から何か聞く事は出来なかった。先生は苦しんでいるような、悲しんでいるような、様々な暗い感情を織り交ぜたような表情を浮かべる。それを間近で見た僕の喉の奥に、何かが引っかかっ

た。
「……さて、もう行かないとな。これ以上進むのが苦なら、君達はここにいればいい」
　そう言って、腰を上げようとした先生の上着の裾を、ステラが静かに掴んだ。
「……先生は、いつもそう。何故？」
「何故って、何がかな」
「……何故、先生は一人でいきたがるの？」
　ステラの質問に、先生は体を硬直させた。……ステラは、どちらの意味で聞いたのだろう。一時の沈黙の後に、先生はこちらを振り返らぬまま、
「あまり、人に知られたくない。巻き込んでしまいたくない。僕は……ずっとそうだよ」
　小さく、そう呟いた。ステラはそう、と呟いてゆっくりと立ち上がり、僕の方へ顔を向ける。
「……アレンはどうするの。疲れたなら、先生の言うとおりここにいて良いのよ」
「……行く」
　少しだけ迷い、返事をした。立ち上がって服に付いた小さな砂埃を払い落とすと、先生とステラの背後へと回る。僕達はまた冷たい空気を頬に掠めながら、真っ直ぐに伸びる道を進み始めた。

　黙々と、先生を先頭に陰鬱な風景の中を歩き続ける。すると、何かが腐ったようなにおいが鼻から入り込み、全身を疼うずかせる。これ以上においが侵入しないように、片手で鼻を摘んだ。
「……この臭いは知ってる。何度も、出会ったもの」
「そうか……なら、もうすぐなのかな」
　先生やステラは淡々と、そんな言葉を交わしたが、僕にはその言葉の意味はわからない。そのまままた無言で前進すると、一つの影が見えた。近づいていくにつれ、そのにおいはだんだんと濃くなっていく。この腐臭は、あの影が発しているようだった。
　影が輪郭をもち、形がハッキリ判別出来るところまで近づく。やがてそれが何かわかった途端、僕は思わず足を止めてしまった。
　それは人の形をしていた。だが、体のあちこちは腐って窪み、その隙間から白い骨を覗かせている。生きている人間のようには、見えなかった。
「……酷い、においね。まるで、毒リンゴみたい」
　ステラはすぐに体の向きを変えて、その横を通り過ぎる。先生も慌てて後を追おうとしたが、その足を一度止めて僕の方へと振り向く。
「アレン君、大丈夫かい？　……気分悪い？」
　心配そうな顔をして、僕に近づいてそっと背中を撫でてくれる。大丈夫、と小さな声で伝えると、先生は少し微笑んで、

「……あんまり、無理しちゃいけないよ」
　と、いつもと変わらない優しい声で僕に告げた。強烈な腐臭を放つ、かつて人だったもの達の横を通り過ぎ、先に進んで行ったステラの後を追う。ステラは、少し先の方で立ち止まって、僕達の事を待っていた。
「……遅いわよ」
　少々不機嫌そうに、ステラが言った。ぐるりと見渡して見ると、この場所だけ何処かの施設の室内のような構造をしている。先程までいた石造りの道との境目に、妙な違和感を覚える。ステラの背後には扉のようなものが見えた。
　突然、不快な寒気を感じて、背筋が凍る。顔を左右に振ってみたが、ステラや先生以外に誰かいる様子も無い。ステラも少しだけ顔を歪ませている中、先生は扉に近づいていき、ドアノブに手を置いた。
「……アレン君にステラ君、君達は、これ以上は進んではいけない」
　冷たい声で、先生は僕達にそう言い放ち、扉を僅かに開けて人ひとり通り抜けられる程度の隙間をつくる。
「……ずっと、見てたんだろう？　……約束だからね」
　先生は、僕達の返事を待つことなくするりと扉の中へ入り、その隙間を閉じた。僕が慌てて後を追おうとしたら、目の前に大きな影が突然現れ、不気味な笑い声を上げる。
「ああ！　こんばんは、アリスにアリス。こりゃあ、また随分と不幸そうな顔をしてんな？　辛いなら、俺がカイホウしてやろうか？」
　チェシャ猫は僕とステラに丁寧なお辞儀をすると、顔をあげてその大きな口の端を限界まで吊り上げる。
「……貴方は助けてと言えば、助けてくれるのかしら」
「やだね！　面倒くさいからな！」
　フードの中に、一つだけ不気味に浮遊させた目を細めて、チェシャ猫はステラの質問に馬鹿馬鹿しい答えを返す。ステラは先程よりも不快そうな感情を、露骨に顔に滲ませていた。
「こいつ、苦手だわ。死んでいるのか、生きているのか、わからないし。気持ち悪い」
「ひどいなあ！　俺はとっくにろくでな死で、死んじまってるっていうのにさ！」
　妙ちくりんなポーズをとって、おかしな返事をする。ステラはそんな猫から視線を逸らすと、何かに気づいたように口をピクリ、と動かす。
「……扉が、無いわ」
　えっ、と呟いてチェシャ猫の後ろを見ると、先程まであった扉が消えていた。
「私は、約束だけは守るヤツだからな！　アイツが願ったのさ」
「…………アイツって、先生の事かしら」
「まあまあ、それより、オモシロイな、オマエ。何一つ奪ってないのに、他のアリスとほとんど違いない。まあ、ほとんど持っていなかったから奪う必要が無かったしな」

チェシャ猫の不可解な言葉に、ステラは首を捻り、何かを考え始める。

「こっちの話さ！　まあいい。用は済んだ。じゃあな、いい夢を！」

　そのまま身を翻すと同時に、チェシャ猫は僕達の目の前から消失する。ステラは、まだ答えが見つからないようで、ずっと首を傾けたままだ。

「……アイツも、皆も、何もかもわからないわ。……そうよ、何故。どうして、こんなにモヤモヤするの」

「……ステラ？」

「……扉、消えたけれど、どうするの？」

　ステラがこちらに視線を向けて、問い掛ける。燃えるような赤い瞳は、いつもより少しだけくすみ始めているように見えた。

「……貴方に、任せるわ」

　僕の答えを聞かずに、背後へと回る。扉は消えてしまったが、まだ道はあった。先生はどこに行ってしまったのだろうか。……進まなければ、いけない。行かなければいけない。見えない何かに急かされる。僕は、まだずっと迷っていた。中途半端な感情が、僕を蝕むしばんでいく。

　ステラは後ろで、僕が歩き出すのを待っているようだった。鋭い視線が僕に注がれているのを、背中で感じる。心なしか、不機嫌そうなオーラも纏っている。これ以上ステラの機嫌を損そこねないように、左右にわかれている道のうち、とりあえずは左へと進んでみる事にした。

　左の道を進んでいくと、また墓場のような場所へと出た。先程の墓場と大きく異なるのは、無数に乱立する墓の奥に、黒く輝く大きなピアノが置かれていることだった。異ような光景に戸惑い、足を止めていたらステラは僕の横を通り過ぎて、ピアノへと近づいていく。

　ポーン、と綺麗な音が、冷たい風と共に空間を駆けた。彼女は満足そうに、次々と音を鳴らしていく。小さな横長の椅子に腰掛け、その両手で音を鳴らし、何かを弾き始めた。僕もその音に惹かれるように、ステラに近づいていく。

「……そんな所より、こっちの方がピアノは良く聞こえるわ」

　ピタリ、とステラは両の手を止め、僕の方を振り向く。自分の座っている小さな横長の椅子の、空いているスペースを片手でポンと叩いた。若干困惑しつつも、少しだけ隙間を空けて隣に座る。彼女は無言でピアノに向き直り、また別の曲を弾き始めた。

　いつもは扉越しにしか聞けない音だったか、こうして間近で聴くと全然違う。水のように透明で、繊細で、柔らかな音だった。ただ、じんわりと滲んでいくような冷たさは、このセカイで擦り傷だらけになった僕の心には少しだけ沁しみてしまう。じん、とした痛みと共に、聴きなれた声が、ピアノの音と共に僕の中で反響し始める。

『──毎日、多くの人が呪いによって死んでしまいました。しかし、ひとりの少女だけ、その呪いにかかることがありませんでした』
『呪いで家族を失った少女を、かわいそうだと多くの人が、自分の家へ招きいれました』
『しかし、それでも呪いはやってきます。少女はまた家族を失いました』

「……やっぱり、ピアノは良いわ。余計な音を、出さないもの」
　ハッとして、彼女の方へと視線を向ける。ステラは、鍵盤の上で指を躍らせつつ、僕に語り続けた。
「……人間なんて、戯ざれ言ごとしか鳴らせないもの。雑音と同じよ」
　僕は黙って、ステラの声とピアノの音を聴いていた。僕の声すらも、雑音になってしまうかもしれない。そんな妙な考えに支配されて、口を開く事が怖くなっていた。
「……貴方も皆も、どうして私のワガママに付き合ってくれるの。私は、貴方達に何もする事なんて出来ないのに」
　音が勢いを失っていく。ステラは俯いて、ただ動き続ける自分の指先を見つめていた。

「……皆、何かをしてもらいたくて何かをする訳じゃ、無いと思う」
「……そう」
　僕の回答に、ステラはそう小さく応答した。音はまた重なり始め、勢いを取り戻していく。僕はまた、音の渦に飲み込まれていった。
「皆ヘンテコね。死んでるようなのに。そうよ、皆失って、死んで……」

―ジャーン！
　突然鳴り響いた不協和音に、驚いて肩をビクッと震わせる。ステラの方を見てみると、彼女は両手をピアノに叩きつけていた。
「……なるほど、ね。……もういいでしょう、他の所へ行きましょう」
　ステラは椅子から腰を上げて、歩き始める。僕も慌てて、彼女の後を追うために立ち上がった。……なるほどって？　彼女は、何を理解したのだろうか。今度は僕が彼女の背後へ回り、足並みを合わせる。そのまま、先程の何処かの施設の室内のような場所へと戻ってきた。
「……これ、私の絵」
　壁に掛かっていた額縁を、ステラは眺める。さっきは注意して見なかったが、そこには不気味な絵が太い枠の中に納められていた。悲しそうな少女や、緑色の猫の絵、青い肌の人と大きな丸、何かを抱え、こちらを見つめる人。どれも、どういった状況を表しているのか、僕には理解する事が出来ない。
「……病気ってね、色々あるのよ。死ぬ時に血を吐いたり、肌が変な色になったり。特殊なにおいを出す病気もあるの。そして……今の医学では、治せなかったりするの」
　額縁に指を這わせながら、ステラはそう僕に呟く。何かを思い出しているのだろうか。
「……さっきのも、すごいにおいがしたよね」
「ええ、私が一番、出会った数が多いにおいよ。……少しだけ、甘酸っぱくも感じるにおい。バナナのような匂いなら糖尿病。リンゴのようなにおいなら……確か、ペスト。でも……どれも、違う」
　彼女は額縁から視線を逸らし、右側の道へと歩き始める。僕もゆっくりと、彼女の歩幅に合わせてその後を着いて行った。
「私のいた街は、謎の病気で皆死んでしまったわ。いえ……自ら、その命を捨ててしまった人もいたけれど。私だけ、どうしてか死ななかったわ」
「……その病気が何かをハッキリさせるために、調べているの？」
「そうよ。あの施設の図書室、病気の本が結構あったでしょう。いくつかの本に所々、鉛筆でメモ書きのようなものがあったわ。……あの字は、先生のものだと思うけれど」
　先生の、字？　先生も、何かの病気について調べていたのだろうか？
「そのメモが書かれていたりする部分って、なにか特徴とかあった？」
「……夢。全部、夢に関係する病気の所だったわ。あそこの病気に関する本は、ほとんど読んだから……夢の病気について調べている事は確かなはずよ」
　夢の病気。頭の奥で、ピリッと小さな電流が走った。以前、新聞や、ニュースで見た事があった気がする。治療法もまだ見つかっておらず、色々と言われていたが……確かその病気を発症する条件のようなものが発表されていたはずだった。だが、頭の奥の方で引っかかっ

たまま、その記憶を明確に思い出す事が出来ない。
　ふと、ステラの足がピタリと止まる。急に立ち止まったので、危うく彼女の背中にぶつかりそうになってしまった。ちょっとだけ、鼓動が速くなる。
「……私の街にいた、皆の名前」
　そう言いながら、目の前にある文字が刻まれた大きな石に、指を置いてなぞる。良く見ると、全て誰かの名前が上から下まで、びっしりと刻まれている。
「この場所は、知ってたの。でも、違うって言ったのは、お墓一つに一つの名前、なんて贅沢な事はしていなかったから。……このお墓が、正解よ」
　ステラが石に這わせていた指先を、ある名前の下で止める。そこには、ノースロップ、と刻まれていた。この名前は、確か最初の方に見た墓石にも刻まれていた。
「……私の、ファミリーネームよ。といっても、同じものを持っていた人の事はもう、忘れてしまって思い出せないのだけれど」
「……ステラの、お父さんやお母さん？」
「ええ。私が小さい時に、呪いにかかって死んでしまったの。その次の人達も。その次も、次も次も。皆、呪いで死んでしまった」
　ステラは少しだけ寂しそうな顔をしながら、墓石から指先を離し、横を通り過ぎて奥へと進んで行く。僕もその後をついて歩く。
「……人が死んじゃったら、何から忘れるか知ってる？」
「忘れる？　……忘れてしまうのかな」
「そう。……まず、声から忘れるんだって。先生が言っていたの。私も、皆の声、もう思い出せないもの。……他の事も、いずれ完全に忘れて、消えてしまうの」
　そういうものなのだろうか。僕も死んでしまったら、僕を知っていた人たちは徐々に、僕の事を忘れていってしまうのだろうか。―少しだけ、怖い。
「その人の死を乗り越える為に忘れるのか。……死んで興味がなくなったから忘れるのか。どちらなのかしらね」
　目の前に、大きな木が現れた。太い根は深い水底に沈んでいて、広く伸びた枝には無数の真っ赤な果実が実っていた。良く見ると、その果実はリンゴのようだった。ステラは、その木に近づいてリンゴを二つ、その木の枝から離して両手のひらに乗せる。
「……私ね、あまり自分の名前が好きじゃないの。ステラは、星。そのとおりよ。……呪いで死んでいく皆を、遠い空から眺めている事しか出来なかった」
　ステラは、両の手のひらに乗せた真っ赤なリンゴを、同じ真っ赤な瞳で静かに見つめている。その姿はいつもよりさらに不思議で、神秘的なオーラを纏っていた。
「生きている人は、キライよ。……皆、死んで私の目の前から消えちゃうじゃない」
「ステラ……」

「……先生も、自分の名前が好きじゃないって言ってたわ。……先生は、まだ何か隠している。私は、もう疲れて歩けないけれど。アレン、貴方はきっとまだ歩けるわ」
　赤い視線を、こちらへと向ける。彼女からは、完全に生気が失われていた。
「何が足りないのか、何が欲しいのか。わかったのよ。皆が、どうして生きているように感じないのか」
「僕達に、足りないもの？」
「……人は、××を失うと、死んじゃうのね」
　その言葉にはノイズが掛かっていた。ステラは、微かに微笑んだような気がした。
「私はあの時、毒リンゴを食べるべきだった。……アレン、貴方はどうするの？　一緒に食べるなら、止めないわ。……貴方は、いきたいの？」
　ステラは、僕に最後の質問を投げ掛ける。僕は、どうするべきなんだろう。……おそらく、ステラを止める事は出来ないだろう。僕はまた一人になってしまう……だけど。
「僕は、まだ生きたい」
　行かなければいけない──そうして、失くしてしまった××を、全てを取り戻したい。
　僕の意識は、ハッキリとしていた。それが、どんな結末になろうと。
「……そう、それで良いのよ。それが、貴方。アレンだわ。……おやすみなさい」
　今度は、彼女は少女らしい笑顔を僕へと向け、片方のリンゴに口付けをする。そしてそのまま、その実を齧った。ゆっくりと、音を立てずに彼女はその場に倒れる。もう片方の手のひらに乗せられていたリンゴが、僕の足元へと転がってきた。僕の足元にコツン、とそのリンゴがぶつかった瞬間、小さな痛みが全身に走った。

『──少女は五番目の家を失い、六番目の教会で出会った人から一つのリンゴを差し出されました』
『このリンゴは、死の呪いをかけてくれる。皆と、一緒に天国へいけるわ』
『しかし少女は、拒みました。そして、その人も呪いによって死んでしまいました。少女は、毒リンゴを食べなかった事をひどく後悔しました。……そのうち少女は、生きる事を嫌悪しはじめました』
『──少女は、生への執着を放棄しました』

　ハッと意識を取り戻して視線を落すと、僕の足元に転がっていたのは真っ赤なリンゴではなく、淡い光を放つ、小さなカギだった。僕は呼吸を整えて、そのカギに触れる。あの時に見た景色が、鮮明に脳裏に浮かび上がってくる。その景色は、僕の視界や意識さえも奪っていった。

⚷

—僕は、扉を開けた。その瞬間、まずは吐き気を催すような酷いにおいが、全身を駆け巡り痙けい攣れんさせる。僕は本を抱えていたのと逆の手で咄嗟に口を多い、中から迫り上がってくるものを必死に押さえ込んだ。
目の前にあったものは、確かに僕のお母さんとお父さんに似た形をしていた。
だけど、違う。
僕の知っているお父さんやお母さんは、背中に無数の穴を持っていなかったし、そこから赤い液体を垂れ流している事もない。それに、あんなに虚ろな、ぽっかりと穴が空いたような目をしていなかった。これは、僕のお母さんやお父さんじゃない。
違う、違う、違う違う違う違う、信じられなかった、違う、こんなの—。

⚷

—ああ、そうだ。あの時、僕が扉を開けて見たものは、酷い姿になってしまったお母さんやお父さんだった。やっと、あの時の事を思い出した。
体が、熱を持ち始める。苦しい。水の中に、投げ込まれた感覚に陥っていく。息が、出来ない。
鼓動の音が段々と大きくなっていた。……僕はそのまま、静かに目を閉じた。

2

「……あの猫は、ちゃんと約束を守ってくれたのだろうか」
丸くなっていた背筋を伸ばしつつ、辺りの様子を確認する。そこは施設の僕の部屋だった。机には雑にばら撒かれた研究資料を避けて、空のティーカップが二つ置かれている。
彼女がここに来た時、このティーカップでお茶を飲みながら二人で話をした。といっても、彼女は少ししか話さず、後は相槌をうったり首を横に振ったりして、反応を示すだけだった。
ただ、彼女……ステラ・ノースロップと名乗った少女と初めて会ったのは、この時ではなかったはずだ。
—初めて彼女に出会ったのは、この森の、さらに奥にある小さな街の中でのことだった。そこは、独自の生活様式や文化を持っているような街だった。外の人達とはあまり交流をしようとはせずに、住人達は街の中で自給自足の生活を送っており、初めて訪れた時、多くの住人から好奇の目を向けられたのを覚えている。
その街へ行く事になったのは、親友のクリフからのある頼みがきっ

かけだった。クリフは当時街で流行していた謎の奇病の調査をしていたのだが、一人ではあの街には入る事が出来ないと話し、縋るような目で、僕に同行を求めたのだ。
「あの街さ、一人だと入りにくくて。他の皆も気味悪がって付いてきてくれないし、お前だったらそういうの気にしないだろ？　一日だけでいいからさ！　なっ！」
「……君は以前からあそこの調査をしていただろう？　いつもは、誰と行ってたんだ？」
「……リーヴィスのばあちゃんだよ。この森の中に住む薬剤師の」
　少しだけ気まずそうな、申し訳無さそうな弱々しい声でそう答える。リーヴィスのおばあちゃん、つまり先日、チェルシーの事件で亡くなった先生のお母さんの事だ。
「……結構、色々アドバイスをくれてさ。もう少しで治療法も見つける事が出来るんじゃないかって二人で話していたんだけどな……」
「……そういう事なら、良いよ。ただし、一日だけだ。子供達もいるしね」
「……！　そ、そうか！　ありがとう、恩に着るぜ」
　クリフは少しだけ顔を明るくさせて、僕にお礼を言ったのだった。

　その数日後に、子供達には留守番をお願いして、僕達二人は問題の街へ向かった。車は通れない道だから、と徒歩で長い葉が生い茂る道を進んだ先に、その小さな街はあった。
　街に入ると、それぞれの作業をしていた街の住人達が、その手を止めて皆一斉にこちらを見つめる。なるほど、これは一人ならば多少きついかもしれない。多数の人間からこれほどまで容赦のない視線を向けられるのは、あまり快いものでは無いだろう。クリフは、しきりに視線を左右へと泳がせて、何かを確認している。
「あそこにある施設だよ、いつも話を聞いているのは」
　その視線をかきわけ、クリフは一つの施設を指差した。外観は教会のようだが、何かを祀まつっている様子は無い。所々ひび割れていて、なんとも不安になる建物だった。
「……人が住んでいる風には、見えないな」
「ああ、元は廃墟となっていた教会だったそうだ。あれでも最低限暮らせる程に修繕したらしいけれど。ここの人達は自由信仰だから、今では教会としての機能は果たしてないらしいぜ。確か、今は例の奇病で親を失った子供達をまとめて面倒見てるんじゃなかったっけな……」
　クリフが、施設の扉を数回叩く。しばらくして、中からシスター服を身に着けた妙齢の女性が顔を覗かせた。
「ああ、クリフさん。お久しぶりです……どうぞ、中へ」
　女性は、僕達を施設内へと招き入れる。中には所々傷んだ椅子や台座等が並んでおり、その間を縫うようにして複数のシスター服を身に

着けた女性達や、子供達が施設内を駆け回っている。僕達に気づくと、皆少し距離を置いて様子を伺い始めた。
「その衣装も、こちらにあったものを再利用されているのですか？」
「……ええ、そうですよ。この街は閉鎖的なところがあるので豊かな暮らしではないですし、使えるものは使わないと、まともに生活が出来ませんから。……最近は、特に」
　軋きしむ椅子に腰掛けて、僕達にも座るようにと勧める。近くにあった椅子に腰掛けると、こちらもギイ、と大きな音を立てた。
「……どうですか、薬の方は。やはり前に来た時よりも、人が減っているように見えたので……また駄目でしたか」
「ええ、あれから……八人、亡くなりました。でも、最期はあれ程苦しんでいたのに、あのお薬を飲んでからは、柔らかな表情で逝いかれる方ばかりです。……それでも、やはり多少、苦痛の表情を浮かべることもあるのですが」
　クリフは悔しそうに、下唇を噛んでいる。中々、この件の進捗は良好では無いようだ。
「……もう少し、調べなきゃいけないな。あの女の子に協力してもらえれば、一番嬉しいんだけどさ……」
　そう言って、クリフは視線を子供達の方へと向けた。その視線の先を追うと、子供達の輪から少し離れた所に、透き通るような黒髪が綺麗な、白い肌に赤い瞳が映える少女がいることに気づいた。
「……あの子、両親を亡くしてから別の住人に引き取られてな……その住人が呪いで倒れた時でも一人生き残っていたんだ。その後また別の住人の元に身を寄せてからも、同じことが起きたんだ……何度も。他の子達は、自分の両親と共にその病気で死ぬか、発症せずにここに引き取られた子ばかりでさ」
「……つまりは、この街に蔓まん延えんしている病気に対する抗体を持っているかもしれない、という事かな？　何故、協力をしてくれないんだろう」
「……話すら、まともにしてくれようとしないんだ。最初に話しかけた時じっと見つめられて、貴方は駄目だわ、って言われてからずっとな」
　……クリフが何か、変な事でもしでかしてしまったのだろうか。いや、確かにおちゃらけた部分もあるが、そんなに酷い人間ではない。……と、僕は思っているが。
　そんな事を考え込み始めていたら、その少女がいつの間にか僕の隣に立っていた。近づく気配を感じることが出来ず、急に現れたかのように感じた僕は、椅子から転がり落ちそうになったが、クリフに支えられてなんとか倒れずに済んだ。
「……貴方……死んでる。違うけど、死んでる」
　透き通るような、透明な声で少女は僕の目を見つめながらそう言った。言っている意味は、良くわからないがシスターもクリフも驚いた顔をしている事から、彼女が自ら進んで声を出すのは珍しいことなのだろうと推測する。

「えっと……話がしたいんだけど、いいかな？」
「……貴方なら、別に。いいわ」
　消えそうな幼声でそう言うと、その少女は近くにあった椅子に腰掛ける。こうして見ると、まるで精巧に作られた人形のように整った顔立ちをしている。
「えっと……君の周りで死んだ人達、死ぬ前に何を口にしたとか、どういう行動をしていたとかはわかるかな」
「……知らない。皆、好きな事してた。そして、突然真っ赤な血を吐いて、倒れた。ただ、それだけよ」
「どんな事でも、って事なら原因は一つではないとか？　それとも……後で発症するタイプの病気なのか……。食事は、ここで採れたもの以外、何か食べているのかな」
「…………」
　クリフの問い掛けには少女は答えようとしなかった。苦笑しながらため息を一つ吐く。本当に、僕としか会話をするつもりはないようだ。その理由は、未だによくわからないが。
「……どうする？　僕が代わりに聞くけれど」
「ああ……ならさ、さっきのじゃなく、彼女の血を少しだけ採らせて欲しい。そう、聞いてみてはくれないかな」
「……君の血が、少しだけで良いんだけど欲しいんだ。注射をしなければいけないんだけど、良いかな？」
「……好きにすれば」
　彼女はすんなりと、その白く細い腕を差し出した。クリフも慌てながら、準備をして彼女の腕から真っ赤な血を少量抜き取りはじめる。少女は身じろぎ一つせずに、ただその様子をじっと眺めていた。その後は他のシスター服を身にまとった女性達としばらく話をして、その日は引き上げる事にした。
「そういえば、今回はいつものおばあさんはご一緒ではないのですね」
「……えっ？　あっ、えっと……今日は忙しくて。友達のこいつに、付き添いで来てもらいました。彼はシスターさん達のように、行き場の無い子供達を施設で預かってるんですよ」
　ここへきて突然、僕のことを紹介し始めたので驚いてしまった。施設の事まで詳しく話されるのは中々都合が悪い事もあったのだが、この街の人達は閉鎖的で外に出ないようだから、話が広まる可能性も低いだろう。そう結論づけ、クリフの話を遮ることはせず、そのまま自分からも話をし始める。
「……この街の外でも、変な事件が起きたりしていまして。そこで引き取る親族がいない子供達を、一時的に保護して心のケアを行っているんです」
「まあ……お一人でですか？　まだお若いように見えるのに、立派な事ですね。……良ければ、施設の場所を教えて頂けますか？　……もし良ければ、ですが」
　ふと深刻そうな顔をして、シスターは施設の場所を尋ねてきた。ど

うしてそんなことを尋ねてきたのかわからなかったが、いずれにしろ僕はここまでの道はまだ覚えていなかったので、代わりにクリフに地図を書いてもらう。シスターは大事そうにそれを受け取ると、僕達にお礼を行って、街の外まで見送りをしてくれた。

「今回は大きな収穫があったな。……抗体が見つかれば、必ず救える。時間はあまりないから、急がなきゃな。じゃあ、俺はもう帰るけど、体調崩さないように気をつけろよ」
　いそいそと荷物をまとめて、クリフは施設前に停めていた自分の車に乗り込む。軽く手を振って、その影が見えなくなるまで見届け、自分も施設内へと戻った。
　その数週間後、風が強く天気が悪い日だった。施設の扉を、誰かが叩く音が聞こえた。クリフからは訪問を告げる連絡は貰っていない。また、幽霊話を信じて肝試し感覚で来た若者だろうか。内側に取り付けられた覗き穴から、外の様子を眺めてみる。少し球体に歪んだ先に見えたのは、あの透き通るような黒髪に赤い瞳が印象的な少女の姿だった。
　急いで扉を開けると、彼女は片手に小さな紙切れを握り、その服や体を擦り傷だらけにしながらも、表情ひとつ変えずに立っていた。状況は掴めなかったが、とにかく彼女を施設内へと招き入れる。遠くでは、雷の音が鳴り響き始めていた。
「……どうしたんだい？　一人で来たのか」
　少女はその質問に、こくりと小さく頷く。そのまま、片手に握っていた小さな紙切れを僕に渡した。それは、先日あの街に行った時、シスターに渡した地図だった。裏の方に滲んでいて多少読み難くなった、メモ書きが新たに記されている。
「……ステラを、よろしくお願いします……？　これは……街の人達は？」
「……死んだ。皆、死んだわ。生きていた人も、毒リンゴを食べて呪われて」
　か細い声で、彼女はそう答えた。あの街の人は、病気で全て死んでしまったのだろうか。毒リンゴ、というのは……自ら命を絶った住人もいたと言う事か。
「……そうか、辛かったね。ここには、部屋もまだある。君が良ければだけど……こうしてシスターにも、頼まれてしまったし。ここで、暮らすかい？」
　突然のことに困惑しながらもそう尋ねてみると、彼女はまたこくり、と小さく頷いた。
「そうか、わかった。……新しい服も準備しよう。えっと……ステラ君、かな？」
「……ステラ・ノースロップ。ねえ、私紅茶が飲みたいわ」
　白く小さな手で両腕を擦りながら、彼女は無感情にそう、僕にお願

いをした。天気も悪かったし、風はとても冷たかったので体が冷えてしまったのだろう。僕は頷いて、紅茶を用意してここで彼女と飲み、その後また少し彼女から話を聞いた。

「…………」
　彼女が無言で、僕の服の裾を引っ張る。彼女の手には、黒色の手帳が握られている。僕は微笑んで、ありがとう、と言って彼女からその手帳を受け取った。
「おや……珍しい。ステラ君が、絵以外のものを書くなんて」
「……そう」
　彼女はそう言って身を翻すと、そのまま自分の部屋へと戻って行ってしまった。彼女と言葉を交わす事は、未だに難しい。そのまま手帳を、一旦自分の上着のポケットへと仕舞い込んだ。
　空になったティーカップからは、まだ甘い香りが漂っている。彼女に初めに振る舞った時には、確か甘すぎる、と怒られてしまったっけ。
　彼女が唯一書いた、手帳の文章を思い返してみる。

　みんな、おなじめをしてる。りゆうは、わからない。でも、しんでいるの。みんな。
　ずっと、それをさがしてるけど、みつからないわ。
　……でも先生は、わかっているんでしょう？

　……彼女らしく、自分の事ではなく、僕への問い掛けだった。彼女の言うとおり、どうしてこうなってしまったのかは、僕自身が一番良くわかっている。でも……。
　ティーカップが、カタカタと小さく揺れ始める。セカイが崩れ始めていた。
「……残るセカイは、一つだけ」
　小さく、僕は呟く。既に四つのセカイを回ったが、僕の探しているものは未だに見つけることが出来ない。残り一つのセカイでも見つからなかったなら……どうするのかは、もう決めている。最悪の結末よりも、ずっと救いのある終わりを。
　やがて視界が眩み始め、じんわりとした闇が全身を飲み込んでいく。……気がつけば僕は、あのおまじないを小さく唱えていた。

3

「ああ、良かった！　これで、全てのカギが揃いました。全く、アイツの面倒事に時間を取られてしまうなんて、ああイライラする」
　嬉しさや苛立ちを織り交ぜたような複雑な感情を、シロウサギは僕へと向ける。反応に困っていたら、一つ大きなため息を吐いてから、

僕を見つめ直した。
「さて、貴方はどうするんです？　随分と疲れているように見えますが」
「……夢。この夢から、覚める方法を教えてくれるって言ったよね」
「……ああ、なるほど。はい、長い説明は面倒なので……簡潔にお話いたしますよ。このセカイとあっちの世界を繋ぐ方法は、二つあります。まあ……一つは不可能だとして。もう一つはこれです」
　シロウサギは後ろのポケットから、先が鋭く尖った大き目のカギを取り出す。カギ、というよりはまるでナイフのようだった。
「……アリスがこのセカイで、一番悪いと思うヒトを、このカギで刺せばいいのです。そうすれば、そのヒトが世界を繋ぐ扉となりますよ」
　笑顔で僕に、そう解説をした。本当に、人を刺す為のものなのか。
「……あんまりここにいても、アリスは不安定な状態ですから。ずっといれば、泡のように消えてしまうかも。扉は開けておきますよ。さて……それでは、良い夢を。……ああ、ちなみに僕はヒトではないので刺そうとしても無駄ですよ」
　……このセカイの住人は、やはり心を読む事が出来るのだろうか。後ろ手に握り直して、機会を伺っていたカギをそっとズボンに仕舞い込む。
　それから僕は、セカイの扉が立ち並ぶ場所へと移動した。

「やあ！　中々耐え忍ぶもんだな。ニューレコードだぜ。ほとんどのガキは、ヒトのココロに干渉した時点で潰れちまうヤツが多かったしな」
　待っていたかのように、チェシャ猫が僕の目の前にひらり、とフードを揺らして現れた。ただ、違うのはそのフードの中に、人の形をした何かが出来上がっていたことだ。
「前にフードの中を見せてやるって言っただろ？　と言っても、またテキトウにかき集めたツギハギなモンだけどな。右目は、羊に苦しめられた少年。髪は、光を失った少女。耳は、親に捨てられた黒猫！　中々、クールだろ？」
　フードをひらりと外すと、確かにその中身は人のようなシルエットをしていた。だが、抉りぬかれた左目や無理矢理縫い合わされたような肌が、全く人の気配を感じさせない。
「シシシシ！　ウサギからセカイと世界を繋げる方法、聞いたか？」
「……このカギを、悪いヤツに刺すんだって。でも、ヒトじゃないと刺せない」
「ああ！　そうさ。俺達は悪魔だからな。なら、もう一つの方法は俺が教えてやろう」
　チェシャ猫が僕の目の前で、黒い爪を一本、ピンと目の前に立てた。

「それは、悪魔との契約さ。……まあ、詳しい事は契約したいって時に教えてやるさ。後は、次に何をすればいいのか？　私がヒントをあげようじゃあないか」
　体を揺らしつつ、指先も合わせて揺らがせる。
「一つ。前に、俺がオマエから何かを奪ったと言ったな。僕が奪ったのは、一つだけだぜ。たくさん奪うのは、疲れるからな。まあ、それでオマエがキレイに空っぽになるなんて、思ってなかったさ。イマドキ、珍しいんじゃねーの？」
　チェシャ猫は目を細めて、もう一本、追加で黒い爪を僕の目の前に立てる。
「二つ。そのカギで刺せば、そいつは扉となる。世界とセカイをつなぐ扉に、だ。つまり、セカイから戻れなくなる。魂をおきざりにする訳さ！　外側はいらないから、そっちにお返ししてやるがな」
　チェシャ猫はねっとりとした声で、さらにもう一本の黒い爪を追加で立てた。
「三つ。オマエは、これはユメだって言ってたな。オマエがそう言うんなら、そうなるさ。ここは、アリスが思った事が全て。オマエを、散々苦しめたユメだ！　……シシ！　ユメなら、このユメを見たやつが必ずいる。……これは、誰のユメだろうな？」
　チェシャ猫の言葉に、僕はピクリ、と肩を震わせた。この夢を作った、人がいる……？　候補は、浮かび上がっている。それは、確信に変えられずモヤモヤになる。……まだ、わからない事がある。
「オマエが、どんな結末を選ぶのか。……楽しみにしてるぜ」
　不気味な笑い声を響かせながら、チェシャ猫はその場から消え失せる。このセカイで一番悪い人。それは、この夢を作った人になるのではないだろうか。それに……僕は、完全に記憶を取り戻せてはいなかった。
　確かに、事件の日のあの光景を思い出す事は出来た。だけど、まだ肝心な、他の何かをぽっかりと奪われたままだった。このセカイの向こうで……全て、見る事が出来るのだろうか。最後のセカイの扉へと近づき、ドアノブに手を掛ける。
　僕は、生きたい。そのために、行かなければいけない。大きく深呼吸をする。もう、迷いなんてものはちっぽけな存在になっていた。早く、この夢から……皆で、帰るんだ。
　僕はドアノブを捻り、その身を扉の向こうへと投げ入れた。

みんな、おなじめをしてる。
　りゆうは、わからない。
　でも、しんでいるの。みんな。
　ずっと、それをさがしてるけど、みつからないわ。

『でも先生は、わかっているんでしょう？』

第六章　××されるもの

扉の先に広がっていた景色は、また僕の知っている場所だった。あのネコに導かれ、最初に扉を開けたこの場所は──施設で与えられた僕の部屋だ。なぜか、もともとあったはずの家具は全て取り払われ、クローゼットだけが部屋の中央に置かれている。……開けてくれ、と言わんばかりに。
　しばし逡しゅん巡じゅんしてから、あの夜と同じようにクローゼットの扉に手をかける。
　──その瞬間、目が覚めた。
　そこはクローゼット以外に机も椅子もベッドもある、今まで通りの僕の部屋だった。先ほど確かに開けたはずのクローゼットの扉は、ぴったりと閉じられている。…夢だったのだろうか？
　ベッドから這い出て、ぐるり、と辺りを見回す。
　机の上に、水色の手帳が寂しく、ぽつん、と置かれていた。机へと足を運び、手帳を拾い上げてそのページを捲ってみる。

　──神様は、六日で世界をつくりました。ヒトは××を忘れ、世界をバラバラにしました。そして神様は、二億日でセカイをつくりました。

「……？」
　僕は、この手帳を貰ってから何かを記した事は一度も無い。……誰かの、イタズラだろうか。そんな小さな疑問が思い浮かんだが、それ以上は特に気に留めることもせず、自分の部屋から出る事にした。
　外に出てみても、広がっていた景色は、僕達が住んでいたあの施設そのままだった。
　最低限のものしか置かれていないので、やたらと広く感じる玄関や廊下。もしかして、今までの出来事は全て夢だったのか……？
「おっ？　アレンじゃん。何してんの、そんな所で」
　不意にすぐ近くから声がして、振り向くとそこにはジョシュアとレティが笑顔で立っていた。
「あっ！　アレン、寒いね！　今年は、雪ふるかな？　あのね、去年は皆で雪合戦して遊んだのよ。今度はアレンも一緒に、出来たらいいね！」
　レティが自分の両腕を擦りながら、少しへなっとした明るい声で僕に話し掛けてくる。
「懐かしいな！　でも、手がピリピリってして、感覚が無くなるから僕は施設の中で遊ぶ方がいいなあ」
　ジョシュアは自分の袖の中に手を引っ込めたりしながら、なんとか暖をとろうと試行錯誤していた。
「……先生、知らない？」
　思い出を語り合うジョシュアとレティに、僕は唐突に質問を投げ掛けた。二人ともお互いの顔を見合わせて、目をぱちくりとさせてい

る。
「……今日はまだ会ってないなあ。またどっか出掛けてるか、変な所で寝てるんじゃないの？」
「うん。私も、会ってないわ。施設の中、歩いてたら会えるんじゃない？」
「……そっか。二人とも、ありがとう。じゃあね」
　僕がそう言うと、二人も僕に手を振って、自分達の部屋へとそれぞれ戻っていった。
　先生は、自分の部屋にいるのだろうか。今まで回ったセカイの事を考えると、ここは先生のセカイだろう。もしくは──僕のセカイ。
　しかし、今までのセカイとは違い、施設の皆が普通に生活しているのが気にかかる。やはり、あれは夢で、こっちが現実なのだろうか……。
　とにかく先生を探してみようと、廊下の奥へと進む。
「あっ……アレン、君」
　先生の部屋の扉の前で、チェルシーと、その隣に凛とした表情で佇むステラと遭遇した。
「こんにちは。えっと……いい天気だね。すごく、寒いけど。……寒くない？　上着、貸してあげようか？」
　チェルシーは自分の両手に息を吐いては、擦っている。時折、小さなチェルシーの手のひらから白い息がふわり、と漏れ出していた。
「……貴方の上着じゃ、アレンには小さいでしょう」
　ステラが冷静に指摘すると、チェルシーはあっ、と声を上げる。おろおろとし始めたチェルシーを見たステラは、呆れたような顔をしてため息を一つ吐く。
「ねえ、先生どこにいるか知ってる？」
　会話が途切れたので僕がそう尋ねると、チェルシーはきょとん、とした顔をして首を軽く捻った。
「えっと……この部屋の中にいるのかな……？　ステラちゃん、知ってる？」
　チェルシーがステラの方を向いて聞くと、ステラは首を数回横に振る。どうやら二人とも、先生の居場所を知らないようだ。
「……わかった、ありがとう。じゃあね」
　チェルシーとステラも、軽く会釈をして僕の横を通り過ぎていく。僕は先生の部屋の扉を数回叩いてから、扉を開いた。

　部屋の中には、一つの影がコーヒーカップを片手に、隅の椅子に座っていた。ただ、その影は先生じゃない。そこにいたのは、先生の友達と言ってたまに施設に来ていた、クリフさんだった。
「あれ、アレン君じゃないか。どうしたんだ、アイツならここにはいないぞ」
　クリフさんは人懐っこそうな笑顔をこちらに向け、溌剌とした声で

僕にそう言った。
「……資料が、整理されてる」
　いつもは机の上にばら撒かれている資料が机の隅にまとまって置かれている光景があまりに珍しくて、無意識にそんな事を呟いてしまう。クリフさんは一瞬驚いたような顔をした後、声を上げて笑った。
「ああ、やっぱりいつも片付けてないんだな。廊下や、食事の後片付けなんかはちゃんとするのに、自分の事になるとコレだもんな。大学にいた時も、そうだったよ」
　コーヒーカップを机の上に置いて、一息吐いた後にクリフさんは背伸びをした。
「昔っからそうだ。と言っても、俺が知っているのは大学時代からのアイツだけどな。他人の事はやたらと気にするのに、自分の事になるとこんなにもだらしない」
　僕の知らない先生の過去のことを話すクリフさんは、本当に楽しそうだ、
「……クリフさんと先生って、仲良いよね」
「おっ！　そう見えるか。それなら嬉しいな。一度だけ、喧嘩した事もあったけど……変なヤツだけどとても良い奴だよ」
「喧嘩、した事あるの？」
　意外な二人の過去に驚いて、僕はその話に食いつく。怒った先生を見た事が無い訳ではないが、他の人と喧嘩をする、という先生は上手くイメージが出来ない。
「ああ、アイツ昔から小説を書いてたらしくてさ。はじめて見せてもらった時に、すごく面白くて。それで、ちょうど新聞社が小説を募集してたから、黙って応募しちゃったんだ。それが良い賞とっちゃって、慌ててアイツに報告したら、勝手に応募したことをすごく怒られて。……反省してるよ」
　苦い顔をしながら、クリフさんは机の上のコーヒーカップをもう一度手に取り、一口飲んだ。ほろ苦い香りが、僕の方にまで漂ってくる。
「一応、出版もされてるんだ。アイツが「出しても構わないが僕の名前は使うな」って言ったから、俺が適当に考えたペンネームだけどな。知ってるかな？　ナイトメア、ってタイトルで、白い表紙の本。結構、売れてるんだぜ」
　その本のことは確かに知っている。出版されてからじわりと売れ行きを伸ばし、発売から数年が経ってなおその勢いを衰えさせる事がなく、最近になって改めて話題になった本だ。確か、夢の病気の話だった。
「……夢の病気」
「そう。最近流行っている、ナイトメア症候群って病気に似たものが出てくる話。それでまた話題になり始めててな。……アイツにとっては、どうでもいい事だろうけど」
　ナイトメア症候群。そうだ、あの日お父さんが読んでいた新聞にも、そんな記事があったはずだった。

「それ、どんな病気なんですか？」
「ん？　そっか、ここ新聞もテレビも無いんだっけ。……まあ、仕方無いよな。ある日突然眠ったまま起きなくなって、そのまま深い眠りに……なんて病気なんだけどさ。昔から何度かあったみたいなんだけど、最近になって発症件数が増加しているらしい」
「……お年寄りとかじゃ、なくて？」
「ああ、老衰とかじゃない。しかも、この病気を発症するのは子供ばかりだ。色んな医者や研究者、心理学者までこぞってこの病気について調べてるんだけど、解明の糸口すら見つかっていない。……夢の中から戻れない、なんて辛いと思うんだけどな」
　どこか遠くを見つめて、クリフさんはそう呟いた。空になったコーヒーカップの底をしばらく眺めた後、机にコトリ、と置く。
「小説の件についての喧嘩が収まった後に、当時競売に出ていたこの建物を買い取る手続きをして欲しい、ってお願いされた時は驚いたな。お金に関しては今までにも研究成果を企業に売って結構持ってる、小説の印税も入って充分暮らせるから、なんて言って。元々、とある施設だったんだけどさ。街で変な噂が立って注目を浴び始めたから移転した、なんて話もあったけど、実際どうなんだろうな。どちらにせよ、ここで暮らすのかってすごく驚いた」
　そこまで話してから、クリフさんは何かを思い出したのか、苦笑を浮かべる。
「……アイツってさ、全部一人で何とかしちゃおうとするんだよ。……実際、本当に一人でやり遂げたりした事も多くあるんだけど。凄いヤツだよな。でも、もっとさ、頼って欲しい、なんて思う事もあるんだ」
「……それ、先生に言えば良いのに」
　僕がそう言ったら、少しだけ寂しそうな表情をしながらクリフさんは微笑む。
「大人になるとさ、なかなか言い辛いんだよ。自分の気持ちは。特に、アイツみたいなタイプはさ。だから、コソコソとどうにか支えてやる事しか出来ない。……今は、君達の方がアイツといる時間は多いからさ。アレン君も、助けてやってくれないかな」
　隅にまとめられた資料をパラパラと捲りながら、クリフさんは僕にお願いをした。僕は少しだけ間を置いて、ハッキリとした口調で答える。
「助ける。皆も、先生も」
　クリフさんはまじまじと僕の目を見つめた。その後にからっとした笑みを浮かべて、
「ああ、頼んだよ。……アイツなら、図書室に行くって言ってたぜ」
　天井を指差しながら、そう教えてくれた。僕はお礼を言って、先生の部屋を後にした。

二階に上がり、図書室の扉を開ける。先生は、図書室に置かれていたソファに寝そべっていた。毛布代わりなのか、自分の上着で体を覆っていた。足音を消して、そっと近づいてみる。寝息が聞こえるので、死んではいないようだ。日ごろから病的なほど白い肌の色や、ほっそりとした体格をしているので、目を閉じている姿を見るとつい不安になってしまう。しばらくその寝顔を見つめていると、こちらの気配に気づいたのか、先生はゆっくりと瞼を開いた。

「……ん？　ああ……アリス君か。遊びたいなら、また明日にしてくれないか。……君も、疲れているだろう。……おやすみ」

　いつもより暗いトーンで、先生は僕を見つめてゆっくり諭すように語りかける。その後、また瞼を閉じて静かに呼吸を始めた。

「……？」

　少し見渡して、ある違和感に気がつく。いつもは本棚がある場所の一角に、クローゼットが置かれている。つまり、ここはまだセカイへの入り口だったのか。クローゼットに近づき、その扉をなでてみる。……この扉が、最後の扉。

「助ける……必ず」

　ズボンに入れていたカギの位置を、再確認する。まだ、どうなるかはわからない。最悪の場合、どうするのかは決めていた。もう一度、深呼吸をする。

　そして、僕は最後のセカイへの扉を開いた。

　どこか懐かしくて、心地良い香りがする。肌に触れる温度が、眠気を増幅させる。しかし、ここで二度寝なんてしている場合ではない。体を起こして、背伸びをする。先程までいた施設の一室とは違う見知らぬその部屋は、セピア色に染まっていた。大量のベッドが、横一列、等間隔に並べられている。

　部屋の扉を確認してみると、カギは掛かっていないようだった。ほっ、と安堵して、ドアノブを捻る。石造りの壁に、軽快な足音が鳴り響くだろう、つるりとした廊下が広がっている。今、というよりは昔の建物の造りに近い印象を受ける。

　廊下には壁沿いにずらり、といくつかの扉が並んでおり、廊下の先、突き当たりにも一つ違う形の扉が取り付けられていた。その先には、また廊下が続いているのだろうか。近付いて、ドアノブを捻ってみたがこちらはカギが掛かっていた。……どうしよう。

「……あれ？　ねえ、姉さん。男の子がいるよ」

「男の子って、そんな珍しいものでも……あら、金髪の男の子は初めてね」

「わあ、小さいわ。見て、私の頭一つ分くらい、小さいわよ」

「眠そうな顔してるわ。ベッドなら沢山あるけど、寝た方がいいんじゃない？」

　扉の前で足止めを喰らっていると、僕がいた部屋とは別の扉から、

四人の影が出てきた。人影……というより、本当に影そのものだ。うっすらと背景も透かして見ることができる。かろうじてその輪郭から、ツインテールや長髪等の特徴を捉える事ができた。
「あの……ここの扉って、開けられないんですか？」
「ん？　ええ、開けられるわ。カギを持っていたのは、二番目の姉さんだっけ？」
「違うでしょう。前はそうだったけど、今は一番目の姉さんよ」
　影がその輪郭を揺らしながら、口々に何かを囁きあっている。声からして皆女性のようだが、表情が確認出来ないのでとても不安になってきた。
「別に、今渡してもいいんだけれど。ちょっと、今暇なのよね。私のお願い、聞いて下さらない？　そうしたら、向こうの廊下に続く扉のカギを開けてあげるわ」
　長髪の輪郭を浮かばせた影が、長い髪を揺らめかせながら僕にそう言った。僕が出来る事なら、と答えると、何だか嬉しそうな声を上げてあれこれと悩んでいる。
「そうねえ……あ、じゃあリボン。赤いリボン、持ってきてくれないかしら。いつも机の上に置いているのに、どこかにいっちゃったのよね」
「赤いリボン？　それなら、私が持ってるわ」
　ツインテールの輪郭を浮かばせた影が、コソコソと腰の辺りから長いヒモのようなものを取り出す。そのヒモも、影と一体化していて、こちらからは色を確認する事は出来ない。
「ああっ！　また貴方が勝手に持ち出してたのね。全く、返しなさいよ」
「ええ、でもタダって訳にはいかないわ。そうねえ……ねえ、君。私、今とても寒くて凍えてるの。だから、何か体が温まるものを下さらない？」
　温かいもの……そう言われても、僕も上着を羽織っている訳でもないし、他に渡せるものも無い。……どうしよう。
「ああ、それなら私のレッグウォーマーをお使いなさいな。でも……これもタダ、じゃつまらないわね。そうだ、貴方が決めなさいよ、何やらせるか」
「ええっ！　そうやって、末の妹だからって全部投げちゃって！　これだから姉さん達ってば、イヤなのよ！　えー……えっと……そうね、あっ、動物の鳴き真似してよ、そうね、カエルがいいわ」
　ポニーテールに帽子を被った輪郭の小柄な影が、ぶつぶつ言いながらも僕に「お願い」を提示する。動物の鳴き真似なんて、やった事がない。しかも、人の前でやるなんて。
「……ゲロゲロ」
　一瞬、躊躇いながらもできる限りのそれらしい鳴き声を出してみる。影達はその揺らぎをぴたりと止め、僕の方をじっと見つめているようだった。……これは、かなり恥ずかしい。
「……あら、じゃあ私も。ウシ、やってよ」

「私も！　私は、ネコがいいわ」
「なら、イヌ。私はイヌがいいわ」
　一人が口火を切ると、他の姉妹達も、口々に追加の要求をしてくる。だが、これ以上ここで立ち止まっている訳にもいかない。僕は羞恥心を捨て、彼女達のお願いに全て答えていった。
「……ああ、面白かったわ。貴方、あまり鳴き真似お上手ではないのね。でも、頑張ったからいいでしょう。ほら、ちゃんとカギを開けておやりなさいな」
　散々、色々な鳴き真似をやらされて、喉が少し掠れてしまった。
　影の姉妹達は、それぞれ手に持っていたものを渡し合い、最後に一人の影が扉のカギをガチャリ、と開けてくれた。
「ほら、これで向こう側へ行けるわ。……そう言えば、あの子は何処に行ったの？　いつも、お昼は寝室で小説を書いてるんじゃなかったっけ」
「さあ？　なかなか、掴み所の無い子だし。……まあ、最近あんな事があったばかりだしね。色々と、思うところがあるのよ。きっとね」
　影の姉妹達の会話が気になり、向こうへ行こうとしていた足を止める。
「……その子、どんな子ですか」
　振り向き投げ掛けた僕の質問に対し、彼女達は数秒、ヒソヒソと何かを話し合う。やがて、ツインテールの輪郭を浮かばせた影が僕へと話し始めた。
「黒髪と、黒い瞳の男の子よ。双子のお姉さんがいたんだけど、つい最近、眠ったまま起きなくなっちゃったの。その時その子、すごく泣いてね。元々泣き虫な子だったんだけど、一年分くらい泣いたんじゃないかって位に。お姉さんは病院に運ばれて、今も病室で眠り続けているんだけど……あれからよね、あの子の様子がちょっとおかしくなったの」
「そう、たしか小説？　を書き始めたのもその頃だわ。ずっと、部屋の机に向かって書いてばっかり。……まあ、そういう所に逃げないと、向き合えないわよ、あの年じゃ」
　影の姉妹達はひそひそと呟きながら、その声を小さくさせていく。次第にその囁き声が聞き取れなくなってしまったので、これ以上は無意味だろうと、僕は今度こそ扉の先へ向かう事にした。

　廊下の向こうは、少しひんやりとしていた。両腕を擦りながら、すぐ傍にあった窓の外を眺めてみる。空は淀んでいて、今にも雨が降りだしそうな天気だった。眼下に立ち並ぶ木々は、その身から全ての葉を落としている。夏を過ぎた頃と、同じ雰囲気を感じた。セカイに訪れる前━あの夜、施設で最初にクローゼットの扉を開けた時も季節は秋だったから、このセカイの時間の流れは、現実世界と同じなのかもしれない。

窓の外から視線を外し、廊下の奥へと目をやる。すると少し先に、一つの影が見えた。近付いてみると先程の姉妹達とは違い、ちゃんとした色と形を持っていることがわかり、少しだけ安心する。こちらからは後ろ姿しか見えないが、黒髪に、チェック模様のニットベストを着ていて、背はあまり高くなさそうだ。ある程度近づくと、その人は僕に気がつきこちらを振り返った。
「……どうしたの？　迷子？」
　僕と同じくらいの年頃の、少年だった。外見の特徴からして、先程影の姉妹達が話していた子だろうか。僕に向かって微笑んでくれたが、子供が浮かべる笑顔にしては若干、大人びていた。
「……ううん。ちょっと、探し物があって」
「そっか。僕も、探し物をしてるんだ。……色んな所を調べたけれど、見つからない。こんなに、探しているのに不思議だよね」
　少年は物憂げな表情を浮かべながら、ゆっくりと瞬きをした。どこか遠くを見つめているような、真っ黒な瞳。……なんだか、初めて会った気がしない。何故だろう。
「……ねえ、君に、ついて行ってもいいかな？」
「えっ？」
「違う人と探せば、また違う何かを見つけられるかも。……だから、お願い」
　少年は大人っぽい笑みを向けながら、優しい声で僕にそう言った。
「うん……いいよ。えっと……君の名前、なんて言うの？」
「ああ……」
　提案に応じてから僕が少年に名前を問うと、彼は苦い表情をして、しばらく考え込む。やがて、改めて僕へと視線を合わせた少年は瞬きを一つする。
「……好きに、呼んでいいよ。僕、自分の名前キライなんだ。僕は名乗らないから、君も名乗らなくていいよ。……じゃあ、行こうか」

少年はそう答えると、急かすように僕の背中に軽く手を置いた。背中に、ひんやりとした温度が広がっていく。その温度から逃げるように、僕は歩き始めた。
進み始めると同時に、少年は僕の隣に並び、歩調を合わせる。彼の腰には複数のカギが付いたキーチェーンや、よく見ると首にかけたヒモに何かを下げているようだった。ヒモの先は白いシャツの中に入れ

込まれていて、確認する事は出来ない。
「……気になる？　カギ。でも、これはきっと君の求めているカギじゃないよ。……僕が持っているのは、全部自分の扉のカギだから」
　彼の言葉に、視線を上げる。彼は確かに「自分の扉のカギ」と言った。今までの子供達と違って、彼はこの「セカイ」の事を知っているのだろうか？
「……ここは、君のセカイ？」
「うん、そうだよ。……この夢にくるのは、二回目だけどね。前とはちょっと、変わってる。でも、肝心なものは何も……変わってない」
　少年は冷え切った声で、僕に答えた。
　──ここは、この少年のセカイ。だが、シロウサギは僕に、ここに来たのは「アナタで六人目」だと言っていた。僕以外の五人はレティ、チェルシー、ジョシュア、ステラ、そして先生だと考えていた。それに、僕はこの少年に出会った事はない。
　しばらく歩いて、少年がここに入ろう、と一つの部屋を指し示す。
　僕が頷くと、彼は自分の腰にぶら下げていたカギを使い、扉を開ける。その先には、沢山の本棚が並べられており、大量の本が詰め込まれていた。少年の方を見てみたが、何も言わずに僕の行動を待っているようだった。
　……なんだか、色々と不思議な子だな。
　僕は適当に目に付いた本を手に取り、ページを捲ってみる。表紙には『ヒトについて』と、記されていた。
「……そういうの、興味あるの？」
　少年が少し無機質な声で、僕に質問をしてきた。上手い回答が思いつかずに、つい首を捻ってしまう。
「自分以外のヒトのことなんか、そのヒト以外にわかりっこ無いのにね。……ネコも、そんな事を言ってたよ」
「……ネコ？」
「うん。でも、自分以外のヒトに見てもらって初めて、自分というヒトが生まれるんじゃないかな。僕は、そう思うよ」
　ネコとは、チェシャ猫の事だろうか。確かに、そんな事を言いそうだ。しかし、少年の言う事もチェシャ猫と同じくらい、僕には難しい。
「……難しいよね。きっと、完璧にわかる事なんてないさ。知らなくても、困らないんだから。知らなくていい事を、知ろうとするのはヒトの悪い癖だ」
　少年はそんな事を零しながら、本棚から一冊の本を取り出すと、ページを捲りはじめた。僕も手に持っていた本を元の場所に戻し、また別の本を手にとって表紙を開く。
　それは、小説のようだった。読んだ事は無い、初めて見る本だ。ふと、奥付に目を留めてみると、発行日の欄には二十年ほど前の年が記されていた。やけに気になって、他の本を手に取って確認をしてみる。奥付に記された年はどれも古く、一番新しいものでも十八年前のものだった。

「……今って、何年？」
　セカイに、時間という概念があるのかは謎だったが、少年におそるおそる聞いてみる。
「……さあね。あそこに、カレンダーがあるけど」
　少年が指差す先には、古ぼけたカレンダーが壁に掛けられていた。そちらへ近付いて、カレンダーを確認してみると十八年前の十月、と表記されている。
「……君って、何歳？」
「うん？　……うーん、わからないな。先生に聞けば、わかるかも。僕達を見つけてくれたのも、先生だし」
「……先生？」
「うん、リーヴィス先生。この孤児院で、働いてる女の人。僕達、生まれてすぐにこの施設の脇に捨てられててさ。それを先生が見つけてくれたんだって。……育児放棄だってさ。これは、こっそり聞いてしまった話なんだけど」
　少年がカレンダーを見つめながら、記憶を辿るように日付を逆追いしている。
「……先生を探そうかな。先生なら、何か知ってるかもしれない。他にも、聞きたい事があるしね」
　少年は一人で頷くと、僕に方向を指し示す。僕もその指示に従い、また少年の隣に並んで部屋を出た。すぐ隣の扉で少年は立ち止まり、先程とは違うカギを使い扉を開ける。部屋の中には、影の姉妹達と同じような、全身が影で出来た人が立っていた。
「……あれ？　院長さん、リーヴィス先生知らない？」
「おや、こんにちは。先生なら、先程出掛けたよ。いつも通り、夜には戻ってくるんじゃないかな？」
「……そうですか、ありがとうございます……ここにはいないみたいだ。前とは、やっぱり少し違ってるんだな」
　想定外、というような顔をして、少年は口に指を当てて何かを思案し始める。やがて結論が出たのか顔を上げ、ため息を一つ吐いた。
「……とりあえずは、歩き回ってみるしか無さそうだね。違う所に、行こうか」
　少年は僕の背中を軽く叩いて、再び廊下を進み始める。置いて行かれないように、僕もすぐに少年に続いた。
　院長さん、と少年が呼んだ影がいた部屋の隣の扉を、彼はまた自身の腰にぶら下げていたカギを使って解錠する。先程からこの少年は、自ら扉を開けているが良いのだろうか。少し不安になってくる。
「大丈夫だよ。……僕が、こうしたいからしてるんだ」
　少年はそう呟いて、扉を開け室内に入っていった。口に出していない疑問へ返答された事に、驚いて一瞬足を止めてしまう。こういった芸当が出来るのは、僕の記憶の中ではまともなヤツではないものばかりだった。
　その後、ゆっくりと部屋の中を覗いてみると、こちらにも色々な本が棚にびっしりと並べられていた。少年は、本を手にとってはページ

を捲り、戻してはまた別の本を……という動作を繰り返していたが、不意にパタンと本を閉じてその行動を止め、僕の方へと近づいてくる。収穫は無かったようだ。
「……あれ、カギ？」
　視界の隅に光るものを捉え、そちらを見ると、部屋の隅に置かれた机の上に小さなカギが横たわっていた。手を伸ばしてそのカギに触れようとすると、少年が僕の腕を掴んだ。
「危ないよ、その近くのランプが割れてて、見えにくいけど破片も散らばっているから」
　少年に注意されて、初めてその存在に気づいた。小さく、キラキラと砂のような粒が光を反射させている。少年は自分のズボンのポケットからハンカチを取り出すと、カギを包み込むようにして持ち、何度か振った後に、ポケットの中へと仕舞い込んだ。
「……ごめんね、僕の手、冷たかっただろう。……きっと、温かさを知らないからだ」
　悲しそうな顔をして、少年は唇を噛んだ。何故、この少年は全て自分一人の責任にしようとしてしまうのだろう。
「……大丈夫、冷たくない。……こうして僕が握っていたら、君の手も温かくなる」
　僕が少年の手を取ると、少年は驚いたような、困ったような表情を滲ませた。何度か瞬きをした後に、その目を少し細める。
「……君は、優しいね。……今知った。いや、知ってたんだ、本当は。……遅すぎた」
　空いた片手で、少年は自分の両目を軽く、擦った。
「君の手は、温かいね」

　その後、最初に少年と出会った場所まで戻り、壁際に座って休憩をする事にした。ぱらぱら、と背中で飛び跳ねるような音が鳴り始める。雨が降り始めたようだった。
「……この辺り、よく雨が降るんだよ。皆、雨はキライだって言うけれど、僕は雨の方が好きだな」
「……どうして？」
「泣いたって、バレないから。小さい時、部屋の隅っこで、雨の音に紛れて泣いてた」
「……よく、泣くの」
「……××され、たいんだ。だから、××した。……ネコが、悪いヤツを××せば良いって。そう言ったから、××した。沢山、××した。でも……駄目だった。僕の周りには、良い人しかいなかったから。いや……違う。××し方を知らなかったから、きっと、駄目だったんだ。……あの子にも、怒られちゃうかな」
　その言葉には、ところどころノイズが掛かっていて上手く聞き取る事が出来なかった。少年は深刻そうな顔をして、肩を小さく震わせて

いる。××とは、そんなに大切なものなのだろうか。
「あの子って、誰？」
「……僕の、お姉さん。僕が泣いた時には、いつもおまじないを唱えてくれてね。でもね……ずっと、目を覚まさない。その内、二度と目を覚まさなくなった。……僕の、せいだよ。僕の……せいなんだ……」
　少年は、抱えていた自分の膝に顔をうずめて、言葉を途切れさせた。僕は黙って、少年の背中をなでる。……先生も、僕達のことを心配する時には、こうして背中をなでてくれたっけ。
「……先生、どこにいるのかな」
　僕の言葉に、少年はピクリ、と肩を震わせた。それから何度か、自分の腕で両目をごしごしと擦った後に、無言で立ち上がり僕に手を差し伸べる。
「……行こう。……もうすぐ、だから」
　意味深な言葉を呟いて、少年はすぐに大人っぽい笑みを浮かべる。僕も彼の手を取り体を起こすと、少年は壁際にぽつん、と一つ佇んでいた扉へと近付いていく。それから、先程ハンカチに包んだカギを使って解錠し、扉を少し開けると、少年は僕を手招いた。
　部屋に入ると、つん、とした薬品のようなにおいが鼻を突いた。大きさがバラバラな影達は、それぞれがせかせかと走り回ったり、会話をしたりしている。
「……なるほどね。こういう事も、あるんだ」
　少年は辺りを見回しながら、何かを納得したように頷く。
「……ぶつからないようにね。奥の方に行こう。僕の使っている机があるから」
　そう言って彼は僕の手を引く。何度か影とぶつかりそうになったが、部屋の奥、隅に置かれた机へと何とか辿りつく。机の上には、難しそうな資料が大量に、雑にばら撒かれていて、何が何だかわからない状態となっていた。
「……君には、難しいだろうね。僕のだよ、全部。昔の話だけど、色んな研究をしてたんだ。それで褒めて貰ったり、賞を貰ったりもした。……もう辞めてしまったけれど」
「……飽きちゃったの？」
「ううん。違う事、してるんだ。人が多くいる所は苦手、っていうのもあったんだけど……友達に、白衣は似合わないな、なんて言われたからかもしれない」
　少年は微笑みながら、ばら撒かれた資料を捲ったり、裏返してみたりしている。
「今は、何してるの？」
「……秘密。本当にやりたい事は、人に言わないようにしたんだ」
　どこか憂いを帯びた表情で、少年は答えた。
　この時、少年に抱いていた違和感がハッキリとしたものになった。初めて会ったはずなのに、どこかで会ったことがあるような既視感。それに、仕草や口調、話す言葉の内容に感じていた違和感。

—やたらと、大人っぽい表情。

「……先生？」

僕が、そう少年に尋ねると、少年はゆっくりと僕に視線を合わせて、微かに微笑む。ガラス玉のようなような黒い瞳が僕の顔を捉え、鏡のように映し出している。

「……こっち」

彼は再び僕の手を引いて、部屋の隅にあった扉の前へと導く。ドアノブに手を掛けると、カギは掛かっていないようで、すんなりと開いた。

部屋の奥は薄暗く、少し先も見えない。こっちだよ、と少年が僕の手を掴んだまま、ぐいぐい引っ張る。僕は足をもつれさせないよう足元を見ながら、慎重に前へと進んで行った。

「…………」

ふと、少年が足を止める。僕は俯いていた顔を上げ、少年へと視線を向ける。目の前には、小さな扉が一つ、薄暗い闇の中にぽつりと浮かんでいた。

「ここで、お別れだ。……ここから先は、僕のセカイ。今の……僕のセカイだよ」

少年が、チャリ、と音を鳴らして、何かを取り出した。その直後、小さな扉がガチャリ、と音を立てて開いた。

「開いたよ。……どうして、こうなったんだろうね。君は、頭がいいから……わかるのかな」

その表情は確認できないが、温度の低い声が僕の心をつん、とさせた。……彼は泣いているのだろうか。

「もし、答えがわかったら教えてくれ。……アレン君」

このセカイに来てからまだ一度も名乗っていない僕の名前を、少年が口にする。

一瞬、意識がぼんやりとして、ハッとした時には既に少年の姿はその場から消えていた。……何処に行ってしまったのだろう。視線を、目の前の小さな扉へと戻す。

「……先生」

僕は、ゆっくりと呟く。この先に、先生がいる。早く、帰らなきゃ。……皆で。そう呟いて、ドアノブを捻ろうとした時、手のひらにほんのりとした温度を感じた。

『……たすけて』

「……！」

どこかで聞いたことのある呼び声が、僕の意識を連れて行く。そのまま、全身の力は抜けていき、僕の目の前は真っ暗になった。

—温かい温度が、僕の体を包み込んでいた。この温度を、僕は知っ

ている……？
「……いつまで、ぼんやりとしているの」
　ぶっきらぼうな声が、頭上から降ってくる。誰かに指先で、頬を突つかれて僕は目を覚ました。目の前には、先程の少年……によく似た長髪の少女が、仏ぶっ頂ちょう面づらをして僕の顔をじっと見つめていた。
　……誰だ？　ぼんやりと見つめ返していたら、ぺちん、と頬を軽く叩かれてしまった。
「……痛いよ。君、誰？」
　叩かれた頬をなでながら、少女にそう訴えると、彼女はさらに不満そうな顔をする。
「……わからないの、そう。ちょっと、待ちなさいよ」
　こほん、と少女は息を一つ吐いて、何度か深呼吸をする。
「—とある街角に、真っ白な家がありました。その家には母親、父親、そして……本が、大好きな少年が住んでいました」
　この語り口調は、セカイにいる間に繰り返し聞いたものだった。じんわりと心に滲んでいく、優しい声。確か、夢の中でも何度も聞いたあの子の声だった。
「……気付いてくれた？　そう、良かったわ。……貴方は、夢の中でも、ここでも泣き虫なのね。涙の匂いがするわ。……あの子にそっくり」
「……どうして、僕に語り掛けてきたの」
「どうして？　そうね……貴方は、まだ何も放棄してなかったから。……ちゃんと、取り返そうとしているから。だから、おせっかいよ」
　少女は僕に近づいて、手を握ってくれた。温かい温度が、僕の手のひらに纏わりつく。
「私ね、迷子なの。それに、目がもうあまり見えないから。……道案内してくれない？　大丈夫よ、貴方にはちゃんと道が見えてる。その道を、進むだけだから」
　少女は、虚ろな目で道のある方向を指し示す。その先には、赤紫色のレンガで造られた真っ直ぐな道が伸びていた。僕は少女の手を握ったまま、彼女が転んでしまわないように用心しながら、その道を歩き始めた。
「……ウサギには、六人このセカイに来たって聞いたんだけど。えっと……君を入れると、七人目になっちゃうよね」
「フィオナ。……確か、それが私の名前。ええ、それで合ってる。私はもう、魂を持っていないもの。今は……あの子が必死にかき集めて出来た、小さなカケラみたいなものよ」
「……あの子って、僕達の先生の事？」
「ええ、貴方達が先生と呼ぶ人。私の、ただ一人の血の繋がりを持った弟。……あんなに髪の毛を伸ばして。断ち切り方くらい、とっくに知ってるはずなのに。本当に、女々しくて、情けない。こんなに重い、思いを引き摺ったまま前へ進めるわけなんてないのに。もう、ばかよ！　あの子は。ばかばか！」

フィオナは感情的に、言葉を零し続ける。その姿は先程まで一緒にいた幼い頃の先生とよく似ているが、性格はあまり似ていないようだ。彼女の言葉を聞きながら前へ進み続けていると、やがて目の前には一つの扉が現れた。カギは掛かっていなかったので、そのままドアノブを捻り、手前に引く。
　扉を開けた瞬間に、心地良い香りが広がった。紙や、新しい木のにおい。僕がよく通っていた図書館の香りに、良く似ている。実際には僕が知る図書館より、多少狭いし、本の数も少ないけれど。
「あら、本のにおい。ねえ、泣き虫君。右側の壁の隅に、シミのようなものはあるかしら？」
　……泣き虫君とは、僕の事だろうか。若干、不安が募つのりつつも右側の壁に視線を向けてみる。そこには、フィオナが言ったとおり、少し目立つ大きめのシミがあった。
　僕はその事を、彼女に伝える。
「じゃあ、昔あの子とよく行ってた、図書館かしら。小さな図書館だったけど、大好きだったの。……もう、とっくの昔に潰れちゃったのにね。まだ、こうして残しているなんて」
　フィオナは僕から手を離し、一人で進み始める。おぼつかない足取りで進むので、僕が体を支えようとしたら、彼女は大丈夫、と僕の体をポン、と叩いた。
「何度も、来た場所だから。……これかしら、あの子が書いた、夢のお話」
　彼女が目の前の本棚から、一冊の白い本を取り出した。その本の表紙には、ナイトメア、と記されていて、その下には僕の知らない名前が刻まれている。
「……ここに、この夢に、前にも来た事があるって。そう言ってた」
「夢？　……ふふ、あの子はそんな事を言ったのね。本当に夢なら、心が痛む訳無いじゃない。そうね……ここは、天国や地獄と呼ばれるものに、近いんじゃないかしら」
　彼女は本の表紙を愛いとおしそうになでながら、そう囁いた。
「……？　でも、僕達はまだ死んでないよ」
「そう、もっと中途半端な場所なのかも。……ここに来てしまうのは、きっと単純な理由なのよ。××を失ってしまった、とかね」
　……××。また、言葉にはノイズが乗せられている。
「ネコが、奪ったって言った。一つだけ。……××の事？」
「ネコ？　ネコって、あのムカツク笑い方をするネコの事？　……もしかして、君はあのネコの言う事、全部信じているの？　人の不幸をご馳走のように扱う、悪魔の言う事を？」
　彼女がぶっきらぼうに、僕に問い掛けてくる。確かに、全てを信じてる訳じゃない。だけど、ここでは僕は他に縋るものが何も無かったので、仕方が無い。僕は渋々頷いた。
「……そう。自分で見て、経験をした訳でもないのに、どうして信じられるのかしら。……それとも、全くわからないから、信じてしまうのかしら。……不思議ね」

フィオナは、可お笑かしそうに笑いながら、手に持っていた白い表紙の本を丁寧に元の場所へと戻す。
「……あの悪魔達は、顔や名前を持っていないわ。それはつまり、責任も持たないという事よ。信じちゃうなんて、貴方はきっと素直な人間なのね。……嘘つきは、どこにでもいるわ。同じくらいに、騙される人も」
　もの悲しげな表情をしながら、フィオナはまた、僕の両手をその温度で包み込む。
「……それで、いつも損をするのは騙される人だけよ。神様っていうのは、サディストなのかしらね」
　彼女の黒い瞳は、どこか遠くを見つめていた。ただ、その瞳は先生のガラス玉のような眼球では無かった。魂を持っていないという彼女の方が、余程人らしく感じられる。
「……冗談よ。ああ、やっぱり本のにおいって素敵ね。飽きないわ」
　僕からそっと手を離すと、フィオナはまた、ふわふわとした足取りで図書館の中を歩き始めた。僕も距離を置いて、彼女の動向を見守る。
　フィオナは別の本棚に並べられた本を、そっと横に指でなぞりながら選んでいる。やがて一冊の分厚い本を取り出すと、表紙を僕に向けて見せた。
「……これ、なんて書いてある？」
　フィオナは軽く首を捻りながら、そう問い掛けてくる。
「えっと……人名事典？」
　僕が表紙に記されたタイトルを読み上げると、彼女はへえ、と言いながらその本の厚さを確かめている。
「こんなに、分厚いのね。名前って、こんなに沢山あるんだ……ふふ。私の名前はね、明るいって意味らしいわ。先生がつけてくれたの」
「先生って……リーヴィス先生？」
「ええ、そうよ。茶色の長髪が特徴的で、怒るとちょっと怖いけど優しい、美人な先生。婚約者が出来たから、あと数年で辞めちゃうって私が眠る前にも言ってたけど。自分の子供を欲しそうにしていたから、皆お祝いしてたわ。女の子が欲しいって言ってて、叶えばチェルシーって名前を付けるんだって、幸せそうな顔をしてた」
「チェルシー……」
　チェルシーのお母さんが、フィオナ達の先生だった──ならば、チェルシーのセカイで見た手紙の差し出し人は、僕たちの先生だった可能性が高い。こんな繋がりがあったとは、思いも寄らなかった。
「リーヴィス先生は、名前を付ける時はいつも一生懸命に考えてくれたの。私達の名前を付ける時も、何度も頭を捻ったって笑いながら言ってたわ」
「……先生……フィオナさんの、弟の名前は？」
「……デイヴィット。意味は、××されるもの」
　ノイズ交じりに、フィオナは教えてくれた。……××。彼女の後に

その言葉を復唱してみたが、やはりその姿をハッキリとさせる事は出来ない。
「ええ、××。でも、あの子は××されないから、こんな名前は僕には合わないんだって。名乗る事を嫌ってる。でも……あの子は、ちゃんと××を知っているわ。私や、私達の先生や皆。新しく出来た友達。そして、貴方達からも、××されてるもの」
「……そうなの？」
「そうよ。でも、あの子がそれを××だと気づかないから」
「××って……何？」
「あら……××なんて、そこら中に溢れているのよ。こっちにあるのも××、あっちにあるのも××。今こうして話をしてるのも、私から泣き虫君への××よ。その事に気づいて、きっと初めて自分への××となるの。……気づかなければ、その辺りの石ころと変わらないわ。知らないなんて、ただの言い訳よ」
　彼女は優しい口調でそう吐き捨てると、また別の本棚へと歩いて行き、並んでいる本を指でなぞる行為を再開する。先程から、何かを探しているのだろうか。彼女の元へ近づいた時、フィオナは肩をピクリと震わせて、ある一点でその指先を止めた。
「……ねえ、これ、何色？」
　フィオナは小さな手帳を棚から抜き出すと、真剣な声で、僕へと問い掛けてくる。
「白色。真っ白だよ」
「……そう、じゃあ中身は？」
　彼女は神妙な面持ちで、僕に見せるように手帳のページをパラパラと捲る。その中には、何も記されていなかった。
「……白紙。全部、白紙だよ」
「そう、白紙なのね。……あの時から、ずっと白紙のままなのね」
　落胆した表情で、彼女はそう呟いた。悲しみの混ざったその表情は、先生にそっくりだ。そんな感想を抱きつつ、僕は彼女に「大丈夫？」と問い掛けてみる。
「いいえ、いいの。……この中身が確認できたのなら、充分だわ。そこに、扉があるでしょう。カギは開いてるから……向こうへ、行きましょう」
　フィオナは僕の手を引いて肩をポンと叩いた。確認してみると、本棚と本棚の間に埋まるようにして扉があった。彼女に促されるまま、僕はその扉を開く。
　扉の先はしん、と静まり返っており、少し先には闇が広がっていた。微かに感じる湿った風と、足元から聞こえてくる砂利の擦れる音に、ここが外だと気づく。
　彼女の事を気に掛けつつ、自分自身も転ばないよう、スピードを落して慎重に前へと進んで行く。静かな空間には、二人分の足音が響き渡っていた。
　しばらく進んだその先には湖が広がっていて、水面は白い絵の具を垂らして掻き混ぜたかのように、禍々しい大きな渦を描いていた。こ

れ以上は、進む事は出来そうにない。
「……着いたみたいね」
　彼女は僕の隣に並ぶと、その湖を眺める。体をふらふらと揺らがせているので、湖に落ちてしまうのではないか、と僕はそわそわしてしまう。
「これは魂の空。ここで、生まれ変わるの。悪魔に食べられた魂も、力を失った魂も、全て生まれ変わる。……私は重りがあって飛べないから、駄目なの」
「……駄目なの？」
　彼女はそうよ、と言いながら揺らぐ水面をじっと見つめている。
「くしゃくしゃになった紙を、元通り折り目の無い紙に戻すなんて事出来ないでしょう。あの子は、気付いてるはずなのに。依存して、縋って、傷ついて。……私自身も、魂を失って、輝きを失ってしまった。もうあの子を導いてあげる事も出来ない。お姉さんなのにね」
　くしゃっとした笑みを浮かべると、フィオナは瞼をゆっくりと閉じる。
「君は……君達は、断ち切れる人になってね。……向き合う事を放棄して。認める事を放棄して。自分を磨く事を放棄して。生への執着を放棄して。そしてあの子は、気づく事を放棄したわ。これから見るのは、そんな、そうなってしまった人の末路」
「でも、僕は……」
「君は、まだ放棄していない。何も、諦めていないわ。いつもこれから進む先の方向を見ていればいい。……後ろを見たって、何も得るものなんかないもの」
　彼女はこちらに振り向くと、僕の手を両手で優しく包み込んだ。じんわりと、フィオナの温度がその手から僕の体へと広がっていく。
「これで、おしまい。……私の、最後の光」
「……！」

　━暖かい日差し。柔らかい、お母さんの声。優しくなでてくれる、お父さんの大きな手のひら。少し焦げてしまった、ベーコンが添えられた目玉焼き。新しい場所で、新しく出来た友達。僕達の事をやたらと気に掛けてくれる、だけど振り回されがちな、ちょっとだけ頼りない先生。心が苦しい時に、優しく僕の手を包んでくれた両手。この、温度。

「思い出した……」
　僕の中で、ぽっかりと空いていた穴が一気に埋まっていく。このセカイで小さくなってしまった僕の心では全て掬すくう事が出来ずに、やがて目から零れ始める。僕はただ静かに、じっとして僕を満たしていくソレを感じていた。
「……あら、また泣いてるの。ふふ、本当に泣き虫君ね。ほら……大

丈夫、ダイジョウブ、ダイジョウブ」

　フィオナは、僕の手をぎゅっ、と握って、おまじないを唱える。それを聞いているうちに、不思議と心が安らいでいく。彼女の指先が、僕の目から溢れかけているものを、拭い取ってくれる。
「──物語の結末は、貴方次第で変える事が出来るのよ。今、ソレを取

り戻した貴方なら。もう、大丈夫。……おやすみ、泣き虫君」

　……次に目を覚ました時、僕は扉の前で倒れ込んでいた。体を起こして、胸の辺りを弄いじってみる。取り戻したソレは、たしかに僕の心臓の近くで温かい温度を纏っている。
　行かなきゃ。思考するよりも先に、僕の体は動いていた。ドアノブを捻り、勢いよく扉を開ける。部屋の中は狭く、書庫のようだった。
　ふと、本棚で分厚い本の間に挟まっていた白色の背表紙が目に留まる。引き出すと表紙も真っ白で、タイトル等は書かれていなかった。パラパラと捲ってみると、日付と共に誰かの日常が綴られている。これは、日記帳だ。

　家を買った。とはいっても、元は施設だった所だ。僕には広すぎるし、しかも迷ってしまいそうだ。またクリフにお世話になってしまった。今度、改めてお礼にいこうと思う。

　最初のページには、そう綴られていた。そこから数ページ程は本当にささやかな出来事ばかりが書かれていたが、あるページからその内容は一変している。

　今日、一人の女の子を迎える。数日前、火事が起きた家の付近で発見、どうやらその家の夫婦の娘さんらしい。私以外にもう一人いる、と強く訴えてくる。彼女にはもう一つの人格があるようだ。家具や生活用品は二つずつ与えた。どうするべきか悩んだが、研究すべき対象がようやく見つかったので、預かる事にした。今の所、発症の前兆は無い。

　発症の前兆は無い。最後には、そう締め括られていた。それに、研究すべき対象とも書かれている。

　二人目の女の子を迎える。三日前に貰った手紙に、それまでの事が詳細に記されていた。色々あったためか、以前のような明るさは無くなり、あまり話をしてくれそうにない。もう一人の子とは少しではあるが、楽しそうに話をしているのを見かけた。ゆっくりとだが、こちらも話が出来るように今後も行動を起こしていこうと思う。今の所、発症の前兆は無い。

　三人目。男の子を迎える。話を頂いた時は驚いたが、母親の様子からこちらに引き取る事を決めた。よく喋るが、その言動は支離滅裂としている。先にいた二人が女の子なので少し気まずそうだったが、数日経った今では三人で楽しそうに遊んでいる。今日は三回程カエルを頭に乗せられた。少し、やんちゃが過ぎる所があるな。今の所、発症

の前兆は無い。

　四人目、女の子を迎える。森の奥にある街から歩いて来たようだ。話を聞けば、どうやら街の住人は全滅してしまったらしい。やはり、この子には耐性があったのだろうか？　少し興味はあるが、今している事とは関係がない。女の子の方も、あまり話したがらないので、なかなか会話をするのが難しい。他の子とも接している様子はなく、自室でよくピアノを弾いている。今の所、発症の前兆は無い。

　全てが、同じような言葉で締め括られていた。その合間には、引き取られた子供達の様子や体調の変化等も事細かに記載されている。しかし、所々ページが破り取られていて、全てを把握することは出来ない。

　どの子も発症の可能性は大きくアリ。しかし、中々その前兆は現れない。そもそも、前兆などあるのだろうか。あの時はどうだっただろうか……。頭痛がしてきた。一旦、止めよう。

　そのページだけ、ミミズが這ったようなゆらゆらとした字で書かれていたが、何とか読み取る。その後もまた数ページほど破り取られていて、次に現れたページには、前のページに書かれた日付ら、一年ほど後の日付が記されていた。

　五人目の子を迎える。事件当時、この子は外に出掛けていたそうだ。事件のショックからか、記憶喪失だという。一目見て、驚いた。直感ではあるが、この子は発症寸前だろう。注意深く観察していく事にする。

　……五人目の子、とは僕のことだろうか？

　あれから、ふたつの季節を過ごした。僕は何をやっているんだろう。また、胸が焦げるような感覚に襲われる。あの日の光景が勝手に再生される。これは……ああ、そうか。もうすぐだ。きっと、終わる。頭が痛い。……ごめんね、フィオナ。

　最後のページには、そう綴られていた。ページ数の半分は、雑に破り取られたものばかりだった。筆跡から先生かもしれないと思っていたが、最後に「フィオナ」と書かれている事から確かに先生の日記帳なのだろう。
「──オマエの罪の数を数えろ！」
　不意に、僕の背後で笑い声が響き渡った。急いでそちらを向くと、そこに立っていたのはチェシャ猫だった。
「判決！　有罪！　就・寝・刑に処す！　一生いいユメでも見てな！　シシシシ！」

いつもどおりの、耳障りな声で僕をあざ笑う。ただ、いつもと違うのはそのフードの中に、人の形をした何かが出来上がっていたことだ。チェシャ猫は僕がその事に気が付いた事を確認すると、ギザギザとした口角を限界にまで吊り上げる。
「前に言っていた契約の話をしてやろうと思ってな」
「……いい。君と、何かをする気は無い。だから、どいてよ」
「まあそんなに急ぐなって！　このセカイの時間の流れは飽き飽きするほどにゆっくりだ。それに、オマエにとって得な話かもしれないぜ？」
　その横を通り過ぎようとした僕を、チェシャ猫が遮る。どうにかしてやり過ごそうとしたが、どうやっても僕を通す気は無いようだった。苛立ちが重なっていく。ここでずっと睨みあうよりも、話を聞いてしまった方が早いかもしれない。
「ああ、そうだぜ。賢いガキはキライじゃない。前に話しただろ？　セカイと世界を繋ぐ方法。一つは、お前が隠し持ってるそのカギで、一つの魂を扉にする事。……どうせ、アイツと話をした後で本当に全員で戻れないとわかったら、自分を刺して他のやつらだけでも戻してやろう、なんて事考えてたんだろ？」
　見透かされたような言葉に、僕はどきりとする。―だって、このセカイの扉を開けたのは僕だ。この夢を作ったのは、こんな事になってしまったのは、全て僕のせいのはずだ。なら、一番悪いのは……僕だ。
「……なら、全員が向こうへと帰れるとしたら？　……オマエはどうする？」
「……えっ？」
　……全員で、向こうの世界へ帰れる？
「ああ！　もう一つ、セカイと世界を繋ぐ方法、それが悪魔との契約さ。俺達悪魔は、魂を食料として生き長らえている。魂ならイヌだってカエルだって何でもいい。でも、ヒトが一番美味いし、腹持ちが良いんだよ。……特に、絶望や苦痛で、潰れちまった魂はな」
「僕の事も、他の皆の事も、もしかして……」
「ああ！　子供ってのは、余計な事を知らない。だから、あるものさえ奪っちまえば簡単に潰れる。……まあ、黒髪のヤツには特に何もしてないけどな。ただ、ついでにちょぃとちょっかいを出しただけさ。大人は駄目だ、知識で汚れちまってる上に簡単に潰れやしないからな」
　こいつらの食料になるためだけに、僕はこんな苦しみを味わわされたのか。他の皆もそうだ。……苛立ちが、憎悪へと変化していく。確かに、こいつは悪魔だ。
「だから、俺達は主に子供を狙ってここに招待して料理してるんだ。まあ……今回、このユメを、セカイを作ったのはアイツだがな。前に来て、とっくに知ってたはずなのに！　結局、アイツは変われなかった！　滑稽だとは思わないかい」
　この憎悪をどうしたものかとチェシャ猫を睨んでいたが、飛び込ん

できた「アイツが作った」という言葉が引っかかった。
「このユメを作ったのは……先生？　僕じゃなくて？」
「ああ、そうさ。オマエ達も良い線をいっていたが、扉を開くほどの苦痛に潰されていた訳では無かった。今回、このセカイと世界を繋げたのはアイツなのさ！」
　チェシャ猫は口に手を当て、くすくすとしゃがれた笑い声をその隙間から漏らしている。その様子を茫然と眺めながら、僕は自分の顔から、どんどんと温度が引いていくのを感じた。
「なんだ？　オマエだって、ウシやトリの魂を食って生き長らえているだろう。対象が少し違うだけで、悪魔もヒトも根底は何ら変わりも無いのさ。私達だって、食わなきゃ死ぬんだ。ただ、僕達には食わなくても生き長らえる方法がもう一つある」
　チェシャ猫は黒い爪を一本、ピンと立てると僕の目の前に差し出してくる。
「それが、契約。簡単に言えば、魂をミックスするんだ。悪魔は、セカイにも世界にも行ける。そのためにも、体も持っている方が何かと都合が良くてね。契約をしなくても取り憑く事は出来るが、時間に限りがあるし色々と面倒なんだ」
　……魂を、混ぜる？　こいつと、一つの魂になれという事だろうか。
「そういう事。オマエが空っぽなままだったなら、完全にオマエの体を乗っ取る事が出来たんだが……そんなに、都合良く行く訳なんて無いさ。つまりは、セカイへの扉を行き来する力を、オマエが持てるようになるってことだ。主食が魂になったりするような事もない。信じるかどうかは、オマエ次第。後は考えれば、わかるだろう？　契約したけりゃ、いつでも呼びな！　そんじゃ、あばよ」
　その場でひらりと身を翻し、チェシャ猫は闇に紛れて、やがて同化する。不快な笑い声が、狭く静かな空間で何度か反響していた。僕はそのままそこに留まり、頭の中で話を整理していく。……アイツの話を、何処まで信じるか。
　それよりも、今は一刻も早く先生と会わなければいけない。頭を横に振り、ごちゃまぜになり始めていた頭の中を一旦リセットする。それから書庫の奥、暗闇で見つけた最後の扉へと近づき、ガチャリ、とドアノブを捻った。

⚷

　扉を開けると同時に、フィオナといた場所で嗅いだような、本の香りがふわりと広がった。少しだけ埃っぽさが混じり、辺りは闇に覆われ暗澹としている。
　闇に紛れていて一瞬わからなかったが、その部屋の奥には、一つの影が揺らいでいた。
　影へと近づく前に、そっとズボンに隠し入れていた、世界のカギを両手にしっかりと握りなおす。その瞬間、サスペンダーの金具にカギ

が触れ、カチリ、と小さな金属音が辺りに響いた。
「……誰だ？」
　影が振り向き、近づいてくる。何歩か後ずさりしつつ、その影の様子を伺っていると、近づいてきたのは予想通り、先生だった。
「ここに君がいるという事は……あのネコは、やっぱり信用が出来ない。……本当に、君達は約束を守ってくれない。全く、困るよ」
　ようやく、その表情が視認出来るほどに距離が縮まる。いつもよりも、その肌は青白く、瞳は漆黒に染まっていた。
「……夢の病気。先生は、夢の病気について調べるために、僕達をあそこに閉じ込めていたの？」
　僕の直球な質問に、先生は困惑したような表情を浮かべる。しかし、すぐに元の無感情な表情を取り戻していく。
「ああ、そうだ。『ナイトメア症候群』……本や新聞をよく読む君なら一度は聞いた事があると思う。原因は不明だと言われているが、あるものを失って、心を深く闇に閉ざして苦しむ子供が発症する――と僕は考えている」
　先生は淡々と言葉を並べながら、僕へとにじり寄る。いつもの優しい先生とは、雰囲気がまるで違っていた。
「表向きは様々な理由で、心を深く傷つけられた行き場の無い子供達を引き取り、傷を癒す手伝いをしながら共同生活を送る。……裏では、この病気を発症する可能性のある子を観察し、研究をする。これが、僕があの場所で、君達に隠れてやっていた事だ」
「先生は、僕達の事は……どうでもよかったの？」
「……そうだよ。僕の目的は、この夢の病気について調べ、夢を壊す事。……君達の、事なんて……」
　一瞬の沈黙を置いて、先生はそう答えた。黙り込んでしまった。僕の腰辺りに視線を落としてから、少しだけ目を細める。
「……君がその手に持っているのは、セカイのカギだろう？　僕に、渡してくれないか」
　先生は僕に向かって手を差し出し、ひんやりと微笑んだ。僕は、後ろ手に隠していたセカイのカギを目の前に持ち上げ……そのまま、自分に向かって勢い良く振り下ろす。
　赤い液体が、何粒もの雫となり僕の手から零れ落ちていく。しかし鋭い刃は、僕の体を貫くことなく、空中で止まっていた。カギの先端は、先生の手にしっかりと握られていた。先生の手から滴る液体が刃を伝い、やがて僕の手のひらで雫となり零れ落ちていたのだった。
「……先生も、嘘つきだ」
　僕はその体勢のまま、困惑している先生に向かって呟いた。自分の顔がどんどん青ざめていくのがわかる。
「ここには、すぐにでも来れたはずでしょ。……僕だって、お母さんとお父さんが死んだ、なんて教えられたら、先生と同じようにセカイへ扉を繋げていたかもしれない。でも、先生は……ずっと大丈夫だって。僕の事を、僕達の事を、気に掛けてくれてたよ。困りながらも、僕達にちゃんと振り回されてくれた。その事も……今の行動も、先生

の言う目的とは反対のものなんじゃないの？」
　今まで先生が僕達にしてくれた行動は、確かに僕達のためのものだった。あれも嘘だったなんてことは、僕には信じられなかった。
　先生は黙り込んだままだ。僕は続けて、先生へしっかりと聞こえるように、ゆっくりと語り掛ける。
「あの時に感じたのは……確かに、“アイ”だったよ」
　先生は、僕の発した単語に目を見開いて反応をした。何かを思い出したように、顔を歪ませながら、頭を軽く掻き毟る。
「……違うよ。だって、僕は“アイ”し方を知らないから。幼い時にこの扉を開いてしまったのも、僕が“アイ”を持っていなかったから。……ここで大切な人を失ってから、さらにその事ばかり考えるようになってしまった。そうして“アイ”を失ったままの僕は、またこのセカイへの扉を繋げてしまったんだ……」
　そう言葉を漏らした後に、先生は下唇を軽く噛んだ。
「……フィオナさんが、言ってたよ。先生も、ちゃんと“アイ”を持っている。でも、気づかなければ、それは“アイ”ではなくただの石ころ同然になってしまうって」
「フィオナ……？」
　先生は、ぽかんと口を開けた子供っぽい表情で僕の目を見つめる。あの時に出会った少年と、全く変わらない表情だった。
　僕が手にしていた刃から力を抜くと、先生の手のひらからも徐々に力が抜けていき、やがてその刀身は滑り落ちて地面でカラン、と軽快な音を鳴らした。
　僕はそのまま、先生の血にまみれた手を、両手で包み込む。先生の手は大きくて、僕の両手でも溢れ出てしまっているけれど。
「これも……きっと、僕からの“アイ”だよ。デイヴィット先生」
　僕がそう言って微笑むと、先生は一瞬、体を硬直させた後に、瞬きを何度かする。数秒ほど唇を微かに震えさせていたが、やがていつもの柔らかい笑みをじんわりと浮かべた。
「……名前を、呼ばれるのは何年振りだろうな。でも、前に呼ばれた時と今では感じ方が違ってる。……はは、本当に、僕は、頭が悪いや。こんなにも、近くにあった」
　覆っていた僕の手を、先生もぎゅっと軽く握り返した。ほんのりとした温度が、僕の手のひらへと広がっていく。
「……君の手は、温かいね」
　先生はそのままぼさぼさになった頭を、静かに下降させていく。先生の手を離してしまわないように、僕も膝を付いて、座り込んでしまった先生と頭の高さを合わせる。その瞬間、先生の頬から透明な雫が一つ、零れたように見えた。
「……これ、あげるよ」
　先生が僕の手から片手を浮かせると、両手を使い、首に括っていたヒモを解く。そのまま、黄金色のロケットペンダントを小さく揺らしながら、僕へと差し出した。
「君が欲しいって言っていたもの。……その時に、与えてあげられな

かったから」
　僕は両手でそのロケットを受け止める。
　先生はヒモから手を離し、ロケットが僕の手元へと辿りつくまでのほんの僅かの間に、別の方へと素早く手を伸ばした。
　……世界のカギ！
　先生の真意に気づいた僕が、手を伸ばそうとした時にはもう遅かった。先生は世界のカギを片手で掴むと、勢い良く自分の腹部へと差し込む。深く、その奥へと。白いシャツは、じんわりと赤色を滲ませていき、先生の口からも同じ色の液体が滴り落ち始める。
「……このセカイを作ったのは、僕だ。だから、僕が終わらせなければならない。弱さを、隠しすぎてしまったんだ。気づいた時には抱えきれずに、溢れ出してしまっていた」
　腹部から手を離し、先生は後ろの壁へもたれかかる。
「君の言うとおり、最後の踏ん切りがつかなかったんだ。……その内に、僕の扉が開いてしまっていた。僕一人が来るはずだったんだ。あのネコにだって、僕以外が扉を開かないように、とお願いをしていたのに。結果、君達の事まで取り込んで、こんなに大きなセカイを作り上げてしまった」
　そこまで話すと先生は前屈みになり、激しく咳き込む。自分の手のひらにばら撒かれた液体を見て顔をしかめている。
「大丈夫、僕はこれでも一応大人だからね。食べられたりはしないだろうさ。……長く研究をしたのに結局駄目だった。君達に、嫌な思いも沢山させてしまった。……アレン君は、僕のようにはなってはいけないよ」
　先生は顔を上げると小さな笑みを零し、僕の頬を優しくなでる。
　その手は、少しだけ温度を取り戻したようだった。そのまま、光を完全に失い始めた瞳を少しずつ閉ざしていく。
「ほら、泣かないで。大丈夫、ダイジョウブ、ダイジョウブ。……そのペンダントの中に、僕の友人の電話番号が書かれたメモが入っている。向こうへ帰ったら、連絡をしてくれないか。何も言わずとも、伝わるはずだ。そうだな……あとは、僕の事は忘れてくれ」
「デイヴィット先生……」
　僕の呼び掛けに、先生はもう一度、軽く微笑み返してくれる。
「そうすれば、僕みたいにまたここに来てしまう事なんて無くなるからね。……わかってたはずなのにな。僕は……忘れられなくてこうなってしまったんだ」
　先生は、完全に瞼を閉じて、体の力を抜いていく。僕の方へと倒れ込んできた大きな体をなんとか支える。
　辺りの闇が大量の人の腕のような形になり、先生の体を包み込んでいく。慌ててその闇の腕を引き剥はがそうと試みたが、僕の手は空を切るばかりで、闇の中へと連れ去られていく先生を引き止める事が出来ない。
　やがて、僕の頬へと添えられていた先生の片手も、闇の中へと吸い込まれていく。

「おやすみ、アレン君。……ごめんね」
　先生は最後に、熱を取り戻した笑みを、僕へと向けた。

　2

　━━耳の奥で金属音のような音が何重にも重なって聞こえる。無重力空間に投げ出されたような浮遊感が全身を巡る。瞼はまるで糸で縫い付けられたかのように重く、開く事が出来ない。手足を動かそうとしても、ピクリともしない。このセカイへと魂を吸い込まれた時と、同じ感覚だった。
　……僕の魂は、元の世界へと引き戻されていく。
　やがて僕の意識は、完全に吸い込まれていった。

わるいやつは、××せばいい。そうすれば、しあわせになれるぜ。
　そう、ネコが言った。なぜ、××せば幸せになれるのか？
　そもそも、本当にネコが言ったのか。それも、僕にはわからない。
　××せばいい。ああ、眠いな。おやすみ。

　虫が、そこらじゅうにとんでる。じめんを、歩いている。
　イスがしゃべる。僕は、おどろく。それを見てネコは、バカみたいに笑う。
　でも、僕はどちらがおかしいのかわからない。
　僕がおかしいのかな？　それとも、セカイがおかしいのか？
　ああ、わからないや。…何も、わからないや。

　カエルはわるいやつだって、アリがおしえてくれた。
　ネコはわるいやつだって、カエルがおしえてくれた。
　いいや、いちばんわるいのはウサギさって、ネコがおしえてくれた。
　だから、××した。

　きがつけば、いつものせかい。
　あの子は…今日も、おやすみをしたままだ。
　僕は、沢山のヒトを××した。でも、僕が××されることはない。
　どうしてだろう。ああ、もっと沢山××さなければいけないのだろうか。
　でも、もうわるいやつはいない。僕のまわりには、いいひとしかいない。
　ネコは、わるいやつしか××してはいけないという。

　どれが正しいのか。僕には、わからない。何も、知らない。
　ただ、ひたすら僕は××されるためにヒトを××そうとしている。

　どうして僕が××されないのか。
　あの時××せたと思っていたけど、きっと僕は××すことなんて出来ていなかったのだろう。
　だって僕は××し方を知らないのだから。
　これからどうしよう。すべて、失った。
　なにもない。ああ、すごくねむい。
　…××して。

『誰か、僕を…××してくれ』

終章　おはよう

目を覚ますと、そこは普段と何ら変わりのない、施設の一室──僕の部屋だった。
寝巻きは、汗でぐっしょりとして、肌にぺたりと張り付いている。何だか、とても長くて怖い夢を見てしまった気がする。まだぼんやりとしていた頭を起こして、額に手を当てると、まるで血のようなぬるりとした感触がしたが、驚いて手を見るとそこには何もついていなかった。
……本当に、夢だったのか？
クローゼットへとおそるおそる近づき、その扉を勢いよく引き開けてみる。しかし、僕の魂は吸い込まれることなく、ただ中には僕がいつも身に着けている衣服がぶら下がっているだけだった。ウサギや、ネコの声が聞こえる事も無い。目の前にあるのは何の変哲も無い、普通のクローゼットだった。
ほっ、と胸をなでおろし、寝巻きから私服へと着替える。時計に目をやると、短針は十二時を通り過ぎていた。今はお昼だろうか、それとも夜中だろうか。
自分の部屋から出てみると、廊下はとても明るかった。空気が、少しだけぽかぽかとしている。どうやら、今は昼のようだ。
……他の子達は？
唐突にそんな不安に襲われて、すぐ隣のレティの部屋の扉をノックして、開けてみる。中では、レティがぼんやりとした表情で、フリルが付いた寝巻き姿のまま、ベッドに腰掛けていた。
「あっ……アレン？　私ね、すごく、すごくすごく怖い夢を見たの。……とっても、悲しくて、辛かった。アレンは大丈夫？　悲しそうな、顔してるけど」
ハッ、として、自分の指先で頬を撫でてみる。確かに、目元はピリピリとした痛みが広がっていた。泣いたのは、夢の中だったはずなのに。
「……うん、大丈夫。レティも、体調が良く無さそうだから、もう少し休んでいた方がいいよ。まだ、お昼になったばかりみたいだし」
僕はそう言って、まだぼんやりとしていたレティの様子を気に掛けながら、部屋から出た。チェルシーやジョシュア、ステラも皆、確認してみたが同じようにぼんやりとした状態だった。……あとは、先生。
先生の部屋へと向かい、扉をノックする。いつもは聞こえてくる声が、今日は聞こえなかった。もう一度、先程よりも強く扉を叩いたが結果は変わらなかった。ドアノブに手を掛けると、急に心臓の音が大きく聞こえ始める。胸の奥では、チクチクとした痛みが僕を縛り始めていた。
重くなる体を無理矢理動かして、扉を開ける。先生は、自分のベッドに横たわって眠っていた。先生がちゃんとベッドで眠っている姿を見るのは、とても珍しい気がする。そんな呑気な考えが真っ先に浮か

んだのも、目の前にある事実を認めたくない一心からだったのかもしれない。
「……先生？」
　ベッドへと近づきながら、僕はそう呼びかけてみる。しかし、先生はピクリとも反応を示さない。その顔は青白く染まり、いつもより体調が悪そうな印象を受ける。不安になり、先生の胸の辺りに手を当ててみると、その部分はゆっくりと上下運動を繰り返していた。
　……生きている。
「先生」
　もう一度呼び掛けてみるが、反応が返ってくることは無い。布団の隅から投げ出されていた先生の片手を、自分の小さな手で包み込む。
　先生の手は、いつもよりもほんのりと温かい気がした。
「……おやすみ、先生」
　僕はそう呟くと、先生の手を掴んでいた両手を離す。何となく、そのまま自分のポケットを探ってみると、いつもは空っぽのポケットに何か硬い、細長いものが入っていることに気づいた。自分の目の前にそれを持ってきてみると、先生がいつも身に付けていた、黄金色のロケットだった。これは、あのセカイで先生が僕にくれたものだった。つまり、僕達が経験した事は、本当に起きたことで、夢なんかではなかったのだ。
　黄金色のロケットを握り、必死に溢れ出てこようとする自分の気持ちを抑える。全てを思い出し、胸が窮屈になり、息も苦しくなる。締め付けられる思いを堪えながら、ロケットを開けてみると、中には写真と一枚のメモが入っていた。
　写真には、顔がよく似た少年と少女が写っている。
　……あのセカイで出会った、幼い頃の先生と、その姉のフィオナだった。メモ用紙には、電話番号とその下にクリフ、という名前が記されている。先生が言っていた、クリフさんの連絡先なのだろう。
　少々荒っぽく自分の腕で目元を擦り、呼吸を整える。大丈夫、ダイジョウブ、ダイジョウブ。自分の胸の内で、繰り返し呟く。
　……連絡しないと。
　先生に、そう言われたから。
　確か、玄関の方に電話があったはずだ。先生からそっと離れると、僕はまた部屋を出た。
　電話のある場所へと辿りつき、受話器を手に取り耳に当ててみる。無機質な音が、耳から僕の体へと響き渡る。ちゃんと、繋がってはいるようだ。
　番号を間違えないよう、メモを見ながら慎重にボタンを押す。何度目かのコール音の後、聞きなれた声が受話器越しに飛び込んできた。
「……はい？　もしもし。珍しいな、そっちから電話を掛けて来るなんてさ。また掃除をやってくれないか、なんてお願いだったらお断りするぜ」
　いつもの明るい調子で、クリフさんは応答をした。どうやら、先生がこの電話を掛けたと思っているようだ。

「……クリフさん」
「……その声は、アレン君か？」
　僕が声を出すと、クリフさんは明るかった声のトーンを一気に引き下げた。
「ああ、そうか……うん、何も言わなくても大丈夫だよ。こうなった時は、どういう事が起きた時かはアイツから話を聞いていたんだ」
　全てを察したように、クリフさんは僕にそう言った。それから少しの間を置いた後に、言葉を続ける。
「自分の荷物をまとめておきなさい。他の子達にもそう伝えて。……アイツの分も、出来たらまとめておいてくれると嬉しい。そちらに向かうまで、少しだけ時間が掛かるからさ、頼むよ。……少しだけ、考える時間をくれないか」
　今までに聞いた事が無い、悲痛に満ちた声でクリフさんは懇願した。僕はそれ以上何も言わずに、わかりました、とだけ答えると、静かにその電話を切った。
　受話器を元の場所に置くと、体の力が一気に抜けて、その場にへたり込んでしまう。異常なまでの無力感が、僕の体を蝕んでいく。
　これから、どうすればいいのだろう。
　どうなるのだろう。
　何をしたいのかは決めていた。でも……。
「……本当にやりたい事は、人には秘密にする」
　僕はそう呟くと、壁に手をつきながら立ち上がる。荷物をまとめなければ。僕はそのまま自分の部屋へと足を運び始めた。

　暖かな日差しが窓から差し込んでいる。空は雲一つない快晴で、穏やかな小鳥達のさえずりが僕の耳をくすぐっていく。
　あれからいくつもの年月が過ぎ去った。ジョシュアやチェルシーは、今では落ち着きを取り戻し、自分の家へと戻り家族と生活している。どちらも、両親との関係を順調に回復していっているようだった。
　僕やレティ、ステラは、クリフさんの家に居候をさせてもらっている。クリフさんは、中々個性的な面々に、手を焼いている様子も見られるが、学校へ行くための援助までしてくれている。僕は一刻も早く、彼に恩返しをしたいと頑張っている。最近は、アルバイトも始めた。
「おいアレン、何やってんだ？」
　物思いに耽ふけっていたら、長めの銀髪をところどころハネさせた青年が、どすん、と僕の肩へ勢い良く腕を乗せてくる。あまりに突然だったので、その衝撃に体を持っていかれそうになってしまった。
「……やめろってジョシュア、君、最近力が強くなってきたから痛いんだよ」
「そうか？　アレンだって、バスケットとかやってたらもうちょっと

力がつくと思うぜ！　ほら、本読むか紙飛行機を折るかしかしてないから、こんなにヘロヘロ」
　ジョシュアが僕の腕を掴んで、左右にヒラヒラとさせる。どうにか彼の手から自分の腕をすり抜けさせると、僕はため息を一つ吐いた。
「あっ、アレン君、ジョシュア君。久しぶり」
　白い廊下の奥から、赤と白を貴重とした衣服が特徴的な、茶色のお下げ髪の女性が駆け寄ってくる。しかし途中で躓きそうになり、隣にいた白髪に赤紫色のメッシュを入れた、人懐っこそうな顔をした女性がなんとかその体を受け止める。
「チェルシー、急がなくたってアレン達は逃げないんだから！
あっ、アレン、ジョシュア、おはよう！　……あれ？　でももうお昼だから、こんにちはかな？」
　レティは、チェルシーの体を起こしながら首を捻っている。その後ろでは遅れて、長い黒髪が目を引く女性が呆れたような表情を浮かべながら二人へと近づく。
「……貴方達。ここは病院よ。静かにしなさい」
　ステラがレティとチェルシーを冷たい声で叱責すると、二人は苦笑しながらお互いの顔を見合わせた。
「じゃあ、行こうか」
　僕は皆に呼び掛けて、近くの病室の扉をスライドさせた。
　先生は、僕と先生が初めて出会ったこの病院へと移され、今も静かに呼吸をしながら眠っている。安らかに眠る表情は、あの時と変わらない。
「先生、今日も持ってきたぜ」
　ジョシュアがそう言いながら、ぶら下げていた臙えん脂じ色のスクールバッグから小さな紙飛行機を取り出し、先生の布団の上へそっと乗せた。レティやチェルシー、ステラも、それぞれ紙飛行機を手に持ち、さらに上へと積み上げていく。
「この前の練習試合でさ、結構ヤバイ状況でシュートを決めれて、すっげー舞い上がったんだよ。そしたら、転んで足首捻っちゃって、すっげー恥ずかしかったんだ」
「……昔は、皆を驚かせて転ばせる側だったのにね。カエルとか、ミミズ……とか」
「ああ、えっと……あの時はごめんな、チェルシー。俺も今は、あのブニッとした感触とかがもう、イヤになって触る事すら出来なくなった！」
　ジョシュアは震え上がるような仕草をしながら、昔と変わらないイタズラっぽい笑みを浮かべた。その隣でチェルシーも、柔らかな笑みを浮かべている。
「先生、お母さんね……だいぶ良くなってきたんだよ。お父さんもお休みの日を増やして、一緒に看病をしてくれたから、そのお陰なのかな。もっと元気になったら、また先生をしてみたい、なんてお話してるんだよ。……私も、先生やお母さんみたいな先生になりたいな」
　自分のワンピースの裾を掴んだり離したりしながら、チェルシーは

もじもじと先生にそう語り掛けた。ほんのりと赤く染まった頬は、幼い頃から全く変わっていない。
「レティやステラは何かないの？　今の内に言っとけよ、また次いつ来れるかわからないしさ」
　ジョシュアが頭の後ろに両腕を回しながら、レティとステラの方へと振り向いてそう言った。レティは首を捻って、うーん、と唸りながら何かを思案し始める。
「……あっ！　そうだ、この前チェルシーと、ステラと一緒に最近オープンしたスイーツショップで、ケーキを食べたんだよ！　生クリームがふわふわしてててね、イチゴもとっても甘酸っぱくて、おいしかったの！」
　顔をぱあっ、と明るくさせて、きらきらした瞳でレティはそう言った。最近は女の子達同士でも定期的によく集まって、ショッピングを楽しんだりしているらしい。
「えっ？　あそこ行ったの？　良いなあ、あそこ男だけじゃ入りにくいんだよ。今度行く時さ、一緒に連れてってくれよな。……先生が起きた時、おすすめしたいしさ」
「……そうね」
　ジョシュアの懇願に、ステラは小声で同意をした。そのまま、一時の沈黙が訪れる。不意にジョシュアがあっ、と気づいたように僕へと振り返る。
「アレンは、最近何やってんの？　報告しといてやれよ」
「えーっと……この前、最近、木曜の夜にやってるドラマ、面白かったから原作の小説も買ってみて、その時に隣にあった小説も表紙がすごく綺麗でさ。それも買って、前に欲しくて、でも品切れで手に入れられなかった本も入荷してたから……」
「ああ、いい！　もういい！　活字に関係する話はもうしないでくれ！　本当に本ばっかりだな、アレンは！　いつか本物の虫になっちまうぞ」
「……そういうジョシュアだって、最近はクラブの事ばかりだろう。いつか、自分がボールになっちゃうんじゃない？」
　そんな冗談を言い合い、お互い顔を見合わせて笑いあった。
　僕達は予定が合う日に定期的に先生の病室の前でこうして待ち合わせをして、手紙を紙飛行機の形にしたものを持ち寄り、先生の元に届けていた。
　向こうへ届くはずなんてない、ただの気休めだなんて事はわかっていた。それでも、あの施設で生活を共にした皆が顔を揃える事が出来るだけでも、僕の中の迷いや苦しみを充分吹き飛ばしてくれた。
「……そうだ、もう机の中も紙飛行機でいっぱいだよね。捨てられないし、どうしよう」
「僕が整理しておくよ。今日は特に予定もないし、雑に入れちゃってた時もあったから」
「そう？　……じゃあ、お願いしようかな。お母さんや、お父さんの事も心配だし」

チェルシーはほんのりと頬を赤らませて、僕に微笑む。後ろでは何故かジョシュアがそわそわとしていた。皆、先生に一言ずつ声を掛けてから、荷物を整理して病室を出る。一番最後に出ようとしたステラが、唐突に足を止めてこちらへと振り返った。
「アレン。……貴方、本当に先生に似てきたわね」
「？　……そうかな？　急に、どうして？」
「…………いえ。私は何も言わないわ。貴方が、決めた事ですもの」
透き通る黒髪を揺らめかせ、彼女は病室から出て行った。ステラの見透かすような言葉には、いつもヒヤヒヤさせられる。
皆がいなくなった事を確認すると、僕は近くに置かれた丸椅子に腰掛ける。
「……また、春がやってきたよ。この季節は、暖かくていいよね」
反応が返ってくるはずも無く、僕は先生にただただ言葉を投げ掛ける。
「レティは、相変わらず。遊びにばっかり誘うんだ。リックとは、もう会う事は無くなってしまったよ。少し寂しい気持ちもあるけど……きっと、それは良い事なんだよね。チェルシーも、お父さんと仲直りが出来たみたい。料理がすごく上手なんだよ。知らない人とも、少しずつだけど話が出来るようになった。……そうだ、ジョシュアは好きな子が出来たって言ってたな。びっくりしたよ。バスケットのクラブに入ってから、以前よりもっとやんちゃになった気がする。勉強の方は、相変わらず苦手みたいだけど。ステラは、そんな僕達の隣でいつも呆れ顔をしているけれど、それなりに今の生活を楽しんでるよ。……クリフさんや、他の人達も皆良い人ばかりだ」
そう言い切った後に呼吸を一つおいて、僕は胸の中で泳がせていた決断をしっかり見つめる。八年、粘った。先生が残した資料も使いながら、こっそりと皆に隠れて。でも、セカイの事を、ただの人がどうにかする事なんて出来ないのだろう。その結果を踏まえた上、出した僕の答えだ。
「……忘れる事なんか、出来る訳が無い。僕達の先生は、デイヴィット先生だけなんだからさ。デイヴィット先生じゃないと……駄目なんだ」
……まだ、教えてもらいたい事が沢山ある。それに、与えてもらったものを返す事も出来ていない。目を伏せて、下唇を軽く噛む。僕も、きっとあちら側の人間なのだろう。
重くなり始めた唇を、僅かに動かしていく。
「……助けるよ、絶対に。上手くいく確率は、実はすごく低いんだ。全ては、上手くいかないと思う。でも、きっとこれで良いんだ」
僕は、静かに立ち上がり、振り向かずに呼び掛ける。
「……ずっと、見てたんでしょ？」

水の流れる音がする。心臓の鼓動が、いつもより速く感じられた。

空に浮かぶ雲を掴もうと必死になっているような空しさや欠落感は、今はもう感じる事は無い。僕は全てを取り戻してしまった。だから、満たされた僕があのセカイへと繋がる手段は、もう一つしか残されていなかった。
　……後悔は、していない。ただの人では、どうにも出来ないんだ。だったら――。
　深呼吸をして、顔を上げ目の前にいる人物の顔を見てみる。
　あの頃より高くなった背丈に、少しだけ伸びた金髪。そして――金色の目。
　今、目の前の鏡に映っている人物は確かに僕だった。溢れ続ける水を止める為に蛇口の栓を捻る。キュッという音と共に水の音が途切れた。
　大丈夫、ダイジョウブ、ダイジョウブ。
　胸の内で、いつものおまじないを唱える。僕はそのまま洗面所を出ると、先生の病室へと急ぎ足で戻った。
　病室の扉を開けると、八年間、その瞼を開けずに横たわっていた先生が、大きな目を見開いて自分の手のひらを眺めたり、体に触れてみたりしていた。
　久々に動く先生を見て、色々な思いが湧き上がって来る。しかし、その思いを一旦胸の奥に留めて、僕は微笑みながら先生にゆっくりと声を掛ける。
「デイヴィット先生」
　先生はピクリ、と肩を震わせて、僕へその青ざめた顔を向けた。
　……どうして？
「……おはよう、先生」
　どうして、そんな悲しそうな目で僕を見るの？

──ヒトってやつは、オモシロイな。
　やるなって言われた事は躊躇いなくやるし、自分が正しいと思ったことは何が何でもやり通そうとする。ヒトの言う事なんて信じないなんていう割には、その根底がハッキリとしないモノにも簡単にすがりつこうとする。そんな身勝手な行動が、全てのヒトの幸せに繋がるなんて考えてやがるんだ。
『僕の魂をキミに与えるから、扉を繋げたら先生の魂をコチラに戻して欲しい』
　何も持っていないと嘆いていたオマエが、なかなか恩師思いな生徒を持ったじゃあないか。
　さて、オマエはこれからどんな物語を見せてくれるんだい？
　この俺が力を貸してやったんだ。せいぜい、飽きない程度には楽しませてくれよ。
　……シシシシ！

あとがき

△（三）○（輪）□（四）×（バツ）で、みわしいばと申します。謎を残さないようにこちらに書いておきます。この小説版でも、なるべくゲーム中の謎を解消していこうと担当様と奮闘しておりましたが、無事に解消できたでしょうか。自身でも謎です。

中学生の時、某動画サイトでフリーゲームの実況を見て自分も作ってみたい！　となり、本作アリスメアの原型は生まれました。しかし当時はソフトの扱いになれずに諦めたのですが、数年後もう一度ゲーム作りに挑戦したくなり、試作にと昔のファイルを漁り手を加え完成させたのですが、予想以上の方々にプレイして頂き、更にはこうして小説化まで頂けている事に大変驚いております。将来の夢はお絵描き屋さん！　などと幼少期から豪語しておりましたが、まさか小説を執筆するなんて事は当時はこれっぽっちも考えてなかったでしょう。実は小説を制作する事自体は初めてでは無いのですが、語りたくない過去なのでそっとしておいて下さい。かわりに、本作を制作するにあたって、影響した思い出話でも出来ればと思います。

確か十歳の時です。大好きだった曽祖母が亡くなり、初めての身近な人の死に大きな寂しさと恐怖を感じた事を覚えています。その夜、自分は泣きじゃくりながら必死に折鶴を何枚も折っていたのですが、そんな自分に祖父が「何で鶴を折っとるんか？」と優しい声色で話しかけてきました。その問いに「沢山折ってひいばあちゃんを鶴に連れて帰って来てもらうとよ」と答えると、祖父は「鶴はな、ひいばあちゃんを連れて帰るんやなくて、天国へ連れてってもらうために折ってあげるんよ」と言って、頭を撫でてくれました。

その言葉と「笑顔で送ってあげんな、天国いけんよ」という言葉を祖父言われて以来、自分は笑顔で大切な人達を送ってあげられるようになりました。そんな祖父も今は亡くなり、祖母は現在も祖父の事をたまに話しては寂しそうな表情を見せるようになりました。生きていれば何歳であったとか、もう少しこうしてあげたかったとか、死んだ子の年を数えるなんてことわざもあるように、もう自分達は死者や過去に干渉をする事なんて出来ません。死者への後悔は両者を縛り、生者も前進出来ず、また死者もあの世へと行けないと数年後別の大人に教わりましたが、この言葉が脳裏に焼きついています。祖母が毎年指折り祖父の年を数え、後悔を零すその度に心配になります。

本作もいわば後悔に囚われてしまった人達の話なのですが、もうこんな暗すぎる話を作る事はきっとないです。主に自分のテンションが持ちません。ハッピーなエンドが好き。

最後に、担当様にデザイナー様、ゲームをプレイして下さった、またこの本を手に取り始めて本作に触れて下さった皆様にお礼を申し上げます。沢山の方にお世話になり、この様な素敵な機会を頂けました。有難うございました！

△○□×（みわ しいば）

●著／イラスト
▵○□×（みわ しいば）
イラストレーター、ＰＶ制作者。
ニコニコ動画でＶＯＣＡＬＯＩＤ楽曲のＰＶ制作を中心に活動していたが、２０１３年11月、自作のフリーホラーゲーム「Ａｌｉｃｅ ｍａｒｅ（アリスメア）」を公開、２０１４年４月には“嘘を暴いて物理で殴る嘘喰いＲＰＧ”「ＬｉＥａｔ（ライート）」を公開し、フリーゲーム制作者としても活動の幅を広げている。

●原作
フリーゲーム「Ａｌｉｃｅ ｍａｒｅ」とは
２０１３年11月に公開された▵○□×（みわしいば）制作のフリーゲーム。童話、絵本をモチーフにしたホラー風探索系ゲームで、独特な世界観と可愛いキャラクターデザイン、また、登場人物たちが過去に抱えた闇が次第に明らかになっていく描写力の高さが話題になり、好評を博している。

Ａｌｉｃｅ ｍａｒｅ アリスメア

イラスト：△○□×（みわ しいば）

この電子書籍は『Ａｌｉｃｅ ｍａｒｅ アリスメア』二〇一五年二月九日第一版第一刷発行を底本としています。

電子書籍版

行者：清水卓智
発行所：株式会社ＰＨＰ研究所

東京都千代田区一番町二一番地
〒102-8331
http://www.php.co.jp/digital/

日：二〇一五年三月十七日